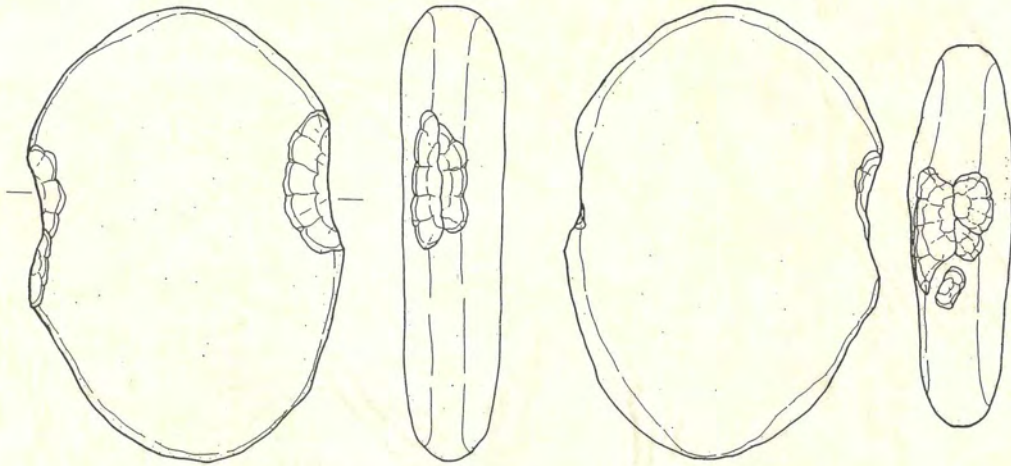


け ばら いち
花 原 市 遺 跡

—平成4年度発掘調査報告書—



出土した磯石錘

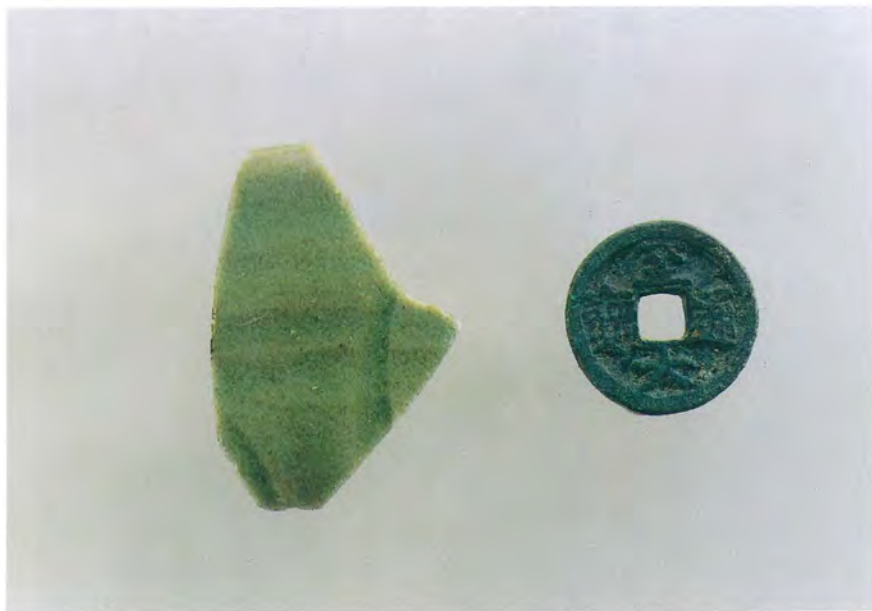
1995.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書46
A Report on the Archaeological Research in Miyako City, No.46

花原市遺跡

—平成4年度発掘調査報告書—



遺構外出土の陶磁器片と銭

1995.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education
Miyako, Iwate, Japan

序 文

私たちの住む宮古市内には、先人たちによって守り受けつがれてきた数多くの遺跡があります。これらの貴重な文化遺産である遺跡は、今に生きている私たちだけのものではなく、私たちの次の世代、そしてそのまた次の世代へと連綿と継承していくべきものと思われまます。このような多くの遺跡を保存し後世へと伝えていくのも、私たちに課せられた責務であると思っております。

しかし、今に生きている私たちの生活の基盤を整備しなければならないというのも事実であります。そのためには、これら遺跡の保存が回避できず破壊されてしまうこともあります。宮古市教育委員会では、このような遺跡の保存と開発のせめぎあいの中にあつて、できるかぎり遺跡の保護に努めてきました。保護か開発かという二者択一ではなく、その調和をはかりつつ埋蔵文化財としての遺跡保護行政を推進しておりますが、止むをえず遺跡の破壊が避けられない場合に限つては、教育委員会が主体となり発掘調査を実施してきました。

本書は、平成4年度（1992）に実施した花原市地区に建設される林業者センター建築に先だつ花原市遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものであります。わずか100㎡足らずの調査面積でしたが、数多くの成果がみられました。

調査の結果、縄文時代中期初頭から前半の大型竪穴住居跡や土坑跡などのほか掘立柱建物跡などの柱穴跡が調査され、土器、石器など数多くの遺物も発見されました。その中にあつては、今までの市内の遺跡の調査では全く出土例がなかった礫石錘の出土や、今からおよそ5,500年前（縄文時代前期末）に比定される火山灰が宮古市内では崎山貝塚とともに同時にはじめて確認されるなど多大な成果がみられました。このことは、今後の宮古地方における縄文時代の遺跡調査に新たな問題が提起されたものと思われまます。また、縄文時代以外の遺物としてもたったの一片でしたが、14世紀代（鎌倉時代末から室町時代にかけての中世）の青磁片や銭が発見され、陶磁器類の流通や当時の宮古の姿を探る上でも貴重な資料といえます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成にあたりまして多大なるご協力をいただきました各位に対し深く感謝申し上げるとともに、本書が多くの方々を活用され遺跡の保護及び学術研究の一助となれば幸いと思っております。

平成7年3月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例 言

1. 本書は岩手県宮古市花原市第2地割字草鞍前に所在する花原市遺跡の平成4年度に実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）で、発掘調査、資料整理、本書の執筆・編集は鎌田が担当し、竹下、高橋、阿部、橋本、三浦、工藤がこれを補佐した。
3. 発掘調査の座標は任意に設定したもので、磁北よりN39° 50' Wである。
4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 土層観察には『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄編）を参考とした。
6. 石器の石材鑑定については佐藤二郎氏（地質コンサルタント）に依頼した。
7. 発掘調査及び本書の作成に際しては、次の方々からご教授、ご指導をいただいた。記して感謝申し上げます。

（順不同、敬称略）

相原 康 二（岩手県教育委員会文化課）	高橋 義 介（岩手県埋蔵文化財センター）
小田野 哲 憲（岩手県教育委員会文化課）	酒井 宗 孝（岩手県埋蔵文化財センター）
熊谷 常 正（岩手県教育委員会文化課）	恵津森 義 行（岩手県埋蔵文化財センター）
佐藤 嘉 広（岩手県教育委員会文化課）	高橋 信 雄（岩手県立博物館）
高橋 與右衛門（財）岩手県埋蔵文化財センター	佐々木 勝（岩手県立博物館）
三浦 謙 一（財）岩手県埋蔵文化財センター	八重樫 忠 郎（平泉町教育委員会）
菊池 強 一（財）岩手県埋蔵文化財センター	岸 昌 一（宮古市史編纂室）
	斎藤 英 樹（宮古市文化財保護審議委員）

8. 本文中における引用文献は次のとおり略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1983～86	『宮古市分布調査報告書1～4』	武田 将男 → 『分布調査1～4』
1986	『宮古市遺跡分布図 昭和63年度版』	武田 将男 → 『分布図 86』
1987～94	『崎山遺跡群I～Ⅷ 昭和61年度～平成5年度発掘調査概報』	高橋憲太郎 → 『崎山遺跡群I～Ⅷ』
1989	『高根遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』	鎌田 祐二 → 『高根89』
1992	『高根遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』	鎌田 祐二 → 『高根92』
1989	『千鶏遺跡－昭和62年度発掘調査報告書－』	鎌田祐二他 → 『千鶏89』
1981	『宮古市史 漁業・交易』	宮古市史編纂委員会 → 『市史 漁業・交易』
1985	『金浜館発掘調査報告書 1985』	武田 将男 → 『金浜館 85』
1990	『熊野町遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』	高橋憲太郎他 → 『熊野町 90』
1992	『金浜I遺跡－昭和58年度発掘調査報告書－・大付遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』	鎌田 祐二 → 『金浜I・大付92』
1979	『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』	小田野哲憲・熊谷 常正 → 『大付 79』

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	
1 調査に至る経過	1
2 調査要旨	1
3 調査体制	2
II 立地と環境	
1 遺跡の位置と立地	5
2 遺跡周辺の地形・地質	5
3 周辺の遺跡	10
III 調査内容	
1 調査の方法	11
2 遺跡の層位	11
3 検出した遺構・遺物	14
A 縄文時代の遺構・遺物	14
B 縄文時代以降の遺構・遺物	55
C 遺構外出土遺物	60
IV 調査のまとめ	
1 遺構について	75
(1) 竪穴住居跡について	75
(2) 掘立柱建物跡について	75
2 遺物について	76
(1) 土器について	76
(2) 石器について	76
a 石材について	76
b 石器の組成について	78
c 剥片石器について	85
d 礫石器について	87
3 火山灰について	88
4 おわりに	89
報告書抄録	114

挿 図 目 次

第1図	位置図	3
第2図	花原市遺跡周辺地形図	4
第3図	地形分類図	7
第4図	地質分類図	8
第5図	花原市遺跡と周辺の遺跡	9
第6図	調査区全体図	12
第7図	基本層序図(調査区東壁土層断面図)	13
第8図	第1号竪穴住居跡	15
第9図	第1号竪穴住居跡土層断面図	16
第10図	第1号竪穴住居跡床面ピット土層断面図	17
第11図	第1号竪穴住居跡出土土器①	19
第12図	第1号竪穴住居跡出土土器②	20
第13図	第1号竪穴住居跡出土土器③	21
第14図	第1号竪穴住居跡出土土器④	22
第15図	第1号竪穴住居跡出土土器⑤	23
第16図	第1号竪穴住居跡出土土器⑥	24
第17図	第1号竪穴住居跡出土石器①	27
第18図	第1号竪穴住居跡出土石器②	28
第19図	第1号竪穴住居跡出土石器③	29
第20図	第1号竪穴住居跡出土石器④	30
第21図	第1号竪穴住居跡出土石器⑤	31
第22図	第1号竪穴住居跡出土石器⑥	32
第23図	第1号竪穴住居跡出土石器⑦	33
第24図	第1号竪穴住居跡出土石器⑧	34
第25図	第1号竪穴住居跡出土石器⑨	35
第26図	第1号竪穴住居跡出土石器⑩	36
第27図	第1号竪穴住居跡出土石器⑪	37
第28図	第2号竪穴住居跡	38
第29図	第2号竪穴住居跡出土土器	39
第30図	第2号竪穴住居跡出土石器	40
第31図	第2号竪穴住居跡及び第1号～3号竪穴跡出土石器	41
第32図	第3号竪穴住居跡	43
第33図	第3号竪穴住居跡及び第1号～3号竪穴跡出土土器	44
第34図	第1号、2号竪穴跡と第1号土壇跡	45
第35図	第3号竪穴跡と第3号土壇跡	46
第36図	第2号土壇跡	48

第37図	第2号土坑跡出土石器	49
第38図	第2号土坑跡出土石器	50
第39図	第4号土坑跡	52
第40図	第4号土坑跡出土石器	53
第41図	第4号土坑跡出土石器	54
第42図	第1号掘立柱建物跡	56
第43図	その他調査区内のピット断面図	57
第44図	その他調査区内のピット出土石器	58
第45図	遺構外出土石器	61
第46図	遺構外出土石器①	62
第47図	遺構外出土石器②	63
第48図	遺構外出土石器・石製品③	64
第49図	遺構外出土石器④	65
第50図	土製品、陶磁器、銭などの出土遺物	66
第51図	扁平円礫①散布図	79
第52図	扁平円礫②散布図	80
第53図	三角形礫散布図	81
第54図	不定形礫散布図	82
第55図	石錘散布図	83
第56図	敲石・敲打磨石散布図	84
第57図	石鏃散布図	86
第58図	石鏃計測値一覧図	87

付表目次

第1表	遺構名新旧対応表	11
第2表	調査区内ピット及び小土坑跡一覧表	59
第3表	剥片石器計測値一覧表①	67
第4表	剥片石器計測値一覧表②	68
第5表	剥片石器計測値一覧表③	69
第6表	剥片石器計測値一覧表④	70
第7表	剥片石器計測値一覧表⑤	71
第8表	礫石器計測値一覧表①	72
第9表	礫石器計測値一覧表②	73
第10表	礫石器計測値一覧表③	74
第11表	石材一覧表	77

写真図版目次

中表紙	遺構外出土の陶磁器片と銭
カラー図版	第4号土壇跡火山灰出土状況、同(拡大)
第1図版	第1号竪穴住居跡(完掘)、同左
第2図版	第1号竪穴住居跡土層断面、同左
第3図版	第1号竪穴住居跡土器出土状況(第11図1)、同床面上の立石?
第4図版	第2号竪穴住居跡(完掘)、同土層断面
第5図版	第2号竪穴住居跡土層断面、同左
第6図版	第1号掘立柱建物跡周辺の柱穴跡検出状況、同左柱穴跡(P40)
第7図版	第1号掘立柱建物跡、同左
第8図版	第3号竪穴住居跡、第2号土壇跡集磔(I期)
第9図版	第2号土壇跡集磔(II期)、第2号土壇跡集磔(III期)
第10図版	第3号竪穴跡、第4号土壇跡土層断面
第11図版	第1号竪穴住居跡出土土器(床面)、同左
第12図版	第1号竪穴住居跡出土土器(床面)、同左
第13図版	第1号竪穴住居跡出土土器(床面)、同左
第14図版	第1号竪穴住居跡出土土器(床面)、同左
第15図版	第1号竪穴住居跡出土土器(床面)、同左
第16図版	第2号竪穴住居跡出土土器、同左
第17図版	第2号竪穴住居跡出土土器、同左
第18図版	第2号竪穴住居跡及び第1号～3号竪穴跡出土土器、同左
第19図版	第2号土壇跡出土土器、同左
第20図版	第4号土壇跡出土土器、同左
第21図版	第4号土壇跡出土土器、第1号竪穴住居跡出土石器(床面)
第22図版	第1号竪穴住居跡出土石器(床面)、同左
第23図版	出土石器及び石製品

I 調査過程

1. 調査に至る経過

花原市遺跡は、宮古市花原市第1地割字畑ノ下及び第2地割字草鞍前地内に所在する周知の遺跡である。遺跡台帳である『分布図 86』によれば、宮古市の遺跡コードL G32-1082として登録されており、縄文時代中期・晩期の遺物が表採されている。特に、第2図のA地点の遺跡標柱が建っている畑地では現在も遺物が濃密に分布している。

宮古市教育委員会では、埋蔵文化財の保護と活用の立場から市内の遺跡の分布・所在を把握するために、昭和57年度（1982）から4ケ年にわたり市内の遺跡詳細分布調査を実施し、『分布調査1～4』、遺跡台帳である『分布図86』を刊行し、それまでに確認されていた約260ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が430ヶ所余になった。しかしながら、その後のパトロール事業等により現在では、443ヶ所の埋蔵文化財包蔵地である遺跡の存在が確認されている。

『分布図86』

さて、今回の調査は、当遺跡の範囲内の一面に集会施設である林業者センターを建設するという計画が平成3年（1991）に出たことにはじまる。当該地は前述のとおり周知の遺跡として登録されており、教育委員会では担当課である農林課との事前の協議を重ねた。その結果、できるだけ遺跡の破壊を回避するため、発掘調査は建物部分（約100㎡）にとどめ駐車場及び進入路部分は現状に盛土し砂利敷とするなどして保存することとした。必要経費を予算化した上で発掘調査は平成4年（1992）に、整理作業は平成5年度、そして報告書の刊行は平成6年度に実施した。

2. 調査要旨

調査地点 岩手県宮古市花原市第2地割字草鞍前44番1

遺跡名 花原市遺跡（けばらいちいせき）

調査原因 集会施設林業者センターの建設に先だつ緊急調査

調査面積 対象面積150㎡のうち建物部分の造成にかかる100㎡を調査し残りは盛土などにより保存した。

調査主体 宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）

調査期間 〈発掘調査〉 平成4年9月1日～10月29日

〈整理作業〉 平成5年1月4日～3月31日及び平成6年12月21日～3月31日

〈報告書刊行〉 平成6年度

検出遺構 縄文時代の遺構として竪穴住居跡3棟のほか竪穴跡3棟、フラスコピット1基、集石を伴う土壇跡1基など。

縄文時代の竪穴を切る掘立柱建物跡1棟のほか柱穴状の小ピット64口など

検出遺物 縄文時代の竪穴住居跡やフラスコピットなどの土壇跡から縄文時代中期を主体とした土器、石器のほか、わずかではあるが陶磁器片、銭などが出土している。

遺物の大部分は縄文時代のものである。

3 調査体制

発掘調査、整理作業の体制は次のとおりである。

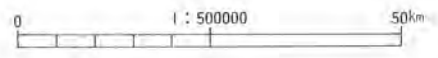
調査主体	宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）
調査協力	宮古市農林課
調査総括	岩田 善弘 社会教育課長（平成4年、5年度） 浦野 光廣 〃 （平成6年度～）
事務担当	山崎 吉章 社会教育課係長（平成4年、5年度） 田鎖 春雄 〃 （平成6年度～） 坂下 昇 社会教育課庶務主査兼社教主事
調査員	竹下 将男 社会教育課主任（平成6年度～） 高橋憲太郎 〃 鎌田 祐二 〃 （主担当） 橋本 晃一 〃 主事（平成5年度～） 三浦 千秋 〃 （平成6年度～） 阿部 豊 埋蔵文化財調査員 工藤 剛司 〃 （平成5年度～）
調査補助	石田 充 宮古市期限付臨時職員（平成4年度）

発掘調査及び整理作業に際しては、次の各位から多大なるご協力をいただいた。（敬称略）

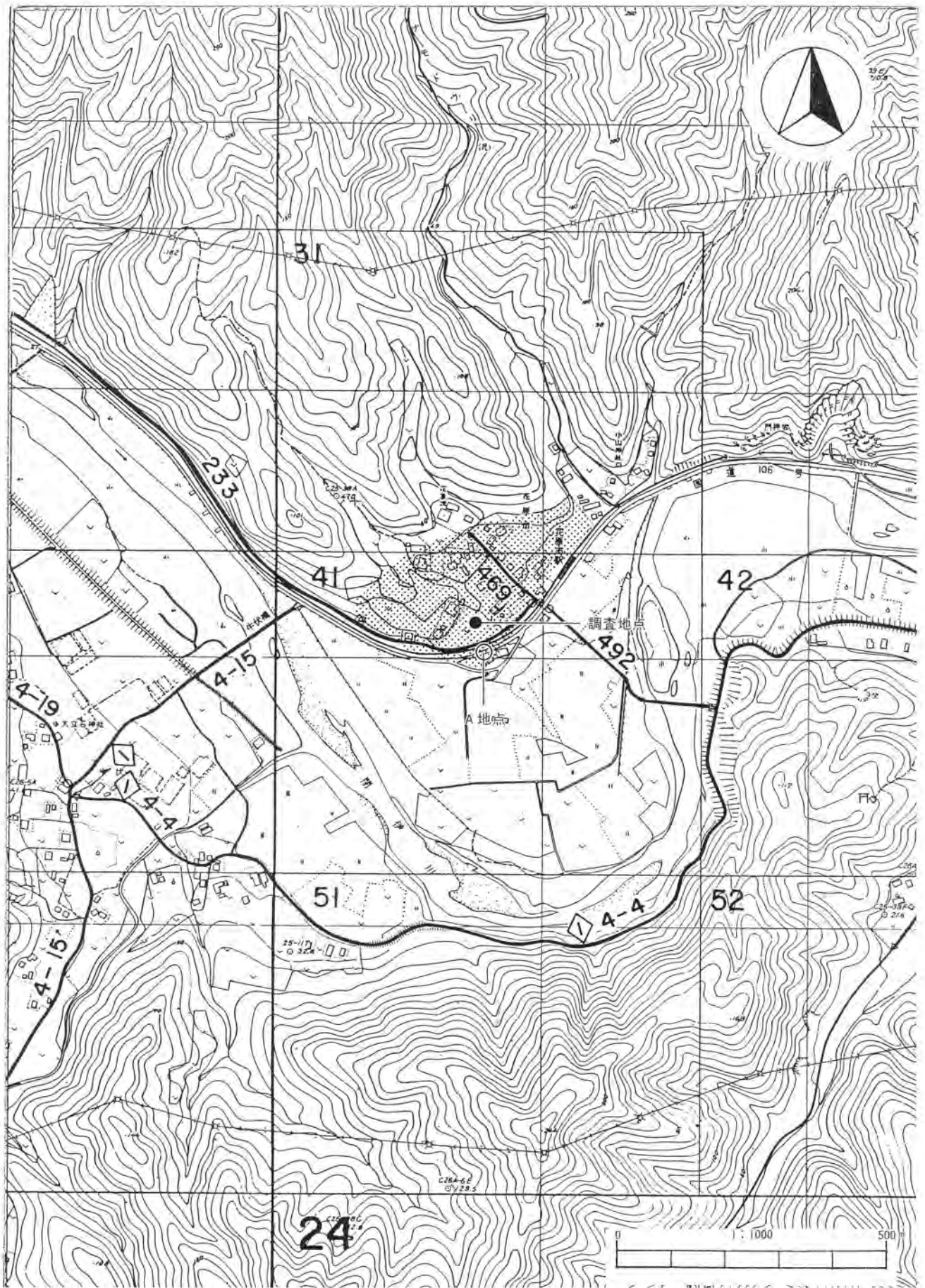
《地権者等》 永田武二、藤田雅己

《発掘調査》 佐々木健、菊池清八、木村 博、今津東一、刈屋昭三、成田寿美江
斎藤貞子、藤谷晶子、菅原テルミ、前川友宏、古館友三

《整理作業》 館崎禮子、永田美弥子、久保田チエ



第1図 位置図



第2図 花原市遺跡周辺の地形図

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地（第1図、2図）

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、北緯 $39^{\circ} 29' 49'' \sim 39^{\circ} 43' 23''$ 、東経 $141^{\circ} 45' 20'' \sim 142^{\circ} 04' 44''$ までを市域とし総面積 339km^2 をはかる。市内東部の重茂半島鮎ヶ崎は本州の最東端部となっている。北は田老町、西は岩泉町、新里村、南は山田町と境を接している。市内には閉伊川と津軽石川の2大河川が流れ、市街地はこの2大河川の河口部を中心にひろがる沖積地及びその支流の段丘上に形成されているが、近年ではこれらを取り囲む丘陵や山麓部を切り開いた人工的な改変地に新たな住宅地がつくられている。

本州最東端

閉伊川は宮古市の西部にひろがる北上山地の兜明神岳に源を発し、そのまま東流し川井村、新里村を経て宮古市に入り、市内を南北に2分するように宮古湾に至る。この閉伊川の流れに沿うようにJR山田線、国道106号線が走り沿岸部と県内陸部を結ぶ大動脈になっている。

閉伊川

花原市遺跡は、宮古市街地から約 10km 真西に離れたほぼ新里村との境に近いところにある。遺跡の南側はJR山田線、国道106号線により分断されており、遺跡内の東南端にJR花原市駅がある。残念ながらJR山田線、国道106号線建設に際しての発掘調査などを実施したというような記録はなく、また出土したであろう遺物も所在不明である。

遺跡は背後にひろがる中起伏山地から続く標高 $50\sim 10\text{m}$ の山麓及び緩斜面に立地し、ちょうど南東方向に尾根状に張り出した形をしており、その地形にあわせてように閉伊川も大きく蛇行している。遺跡の東側は背後の峠ノ神山山地から流れ出る沢によって、南から西側は閉伊川に囲まれるように区切られている。遺跡の現況は、現在は背後の山麓裾に所在する華嚴院の仏閣を中心とする集落が形成されているが、大半はとうもろこしや煙草などの畑地やりんごの小規模な果樹園などに利用されている。

華嚴院

今回の調査地点は、JR山田線花原市駅から西に約 100m 、JR山田線、国道106号線に接する遺跡のほぼ中央南端部で、標高 $22\sim 21\text{m}$ の緩斜面の下端部寄りにあたる。遺跡全体が南向きで日当たりが良く市中心部より幾分温暖なところである。

2 遺跡周辺の地形・地質（第3図、4図）

宮古市を含む岩手県沿岸部は、雄大な海岸線から陸中海岸国立公園に指定されている。しかしながら、その海岸線も当市付近を境としてその景観を異にしている。北部は断崖絶壁をなす直線的な海岸線であるのに対し、南部は複雑に入り組んだリアス式海岸となっている。つまり当市は地形的にも地質的にも北部と南部の地理学的境界に位置しているといえる。

地理学的境界

宮古市の地形は大きく分けて西部の北上山地から続く中・小起伏の山地帯とその縁辺部に形成された丘陵帯と東部の重茂半島域に2分され、更に市内を南北に分断するように東流する閉伊川と宮古湾奥に流れ出る津軽石川及びその流域に形成された谷底平野、河岸段丘などの平坦地に分けられる。

西部は山地帯は北上山地の東縁部にあたり、徐々にその高度を下げ標高 200m 付近で小起伏

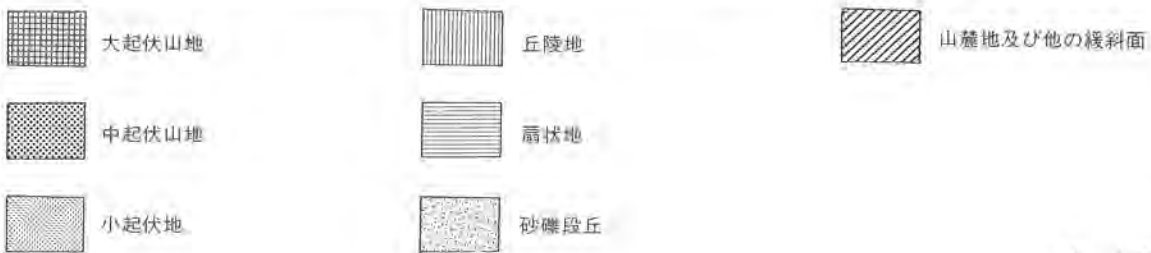
となり、この縁辺に標高100 m前後の丘陵帯が形成されているが、いずれも河川や沢などによる開析度が高くその平面形は樹枝状の尾根状の形態を呈している。また河川沿いを中心に形成されている段丘面も小規模なものが多く、面的な連続性にも欠け現河道に傾斜している場合が多い。遺跡の大半は山地帯から続く小起伏の山地、段丘や緩斜面状の山麓部や段丘上に立地している。

このような遺跡の立地する面は、河床からの比高差によりⅠ～Ⅲ段に分類されている。一応これらの段丘は、一番下位に位置するのが標高20～60 mの津軽石段丘面、標高80～120 mの下閉伊段丘面、標高200 mの台地が宮古段丘面と呼称されている。これらの段丘は洪積世に形成されたとされているが、沖積世になってからの海進・海退により必ずしも上位のものが洪積世のものとは限らない。

花原市遺跡は、背後の中起伏山地の峠ノ神山山地から続く小起伏山地帯に立地しているが、地形的には、標高50～10 mの南側の閉伊川に向かってなだらかに傾斜する緩斜面である。しかし、この緩斜面も今回の調査地点付近で段差を有しており細かくみれば標高20 m付近を境とした2つの段丘から成り立っている可能性が高いが、その部分がちょうどJR山田線、国道106号線によって人工改変されており、その段差が不明瞭になっている。当遺跡からは縄文時代中期と晩期の土器が表面採取できるとあるが、今回の調査地点（標高の高い方）では晩期の遺構・遺物は検出しておらず、一段低い方も中期の土器片が多くて中期と晩期とで遺跡の立地がこの段差に関係しているか現段階では不明であるが、両者に立地条件の違いがある可能性も考えられるが、確証はない。

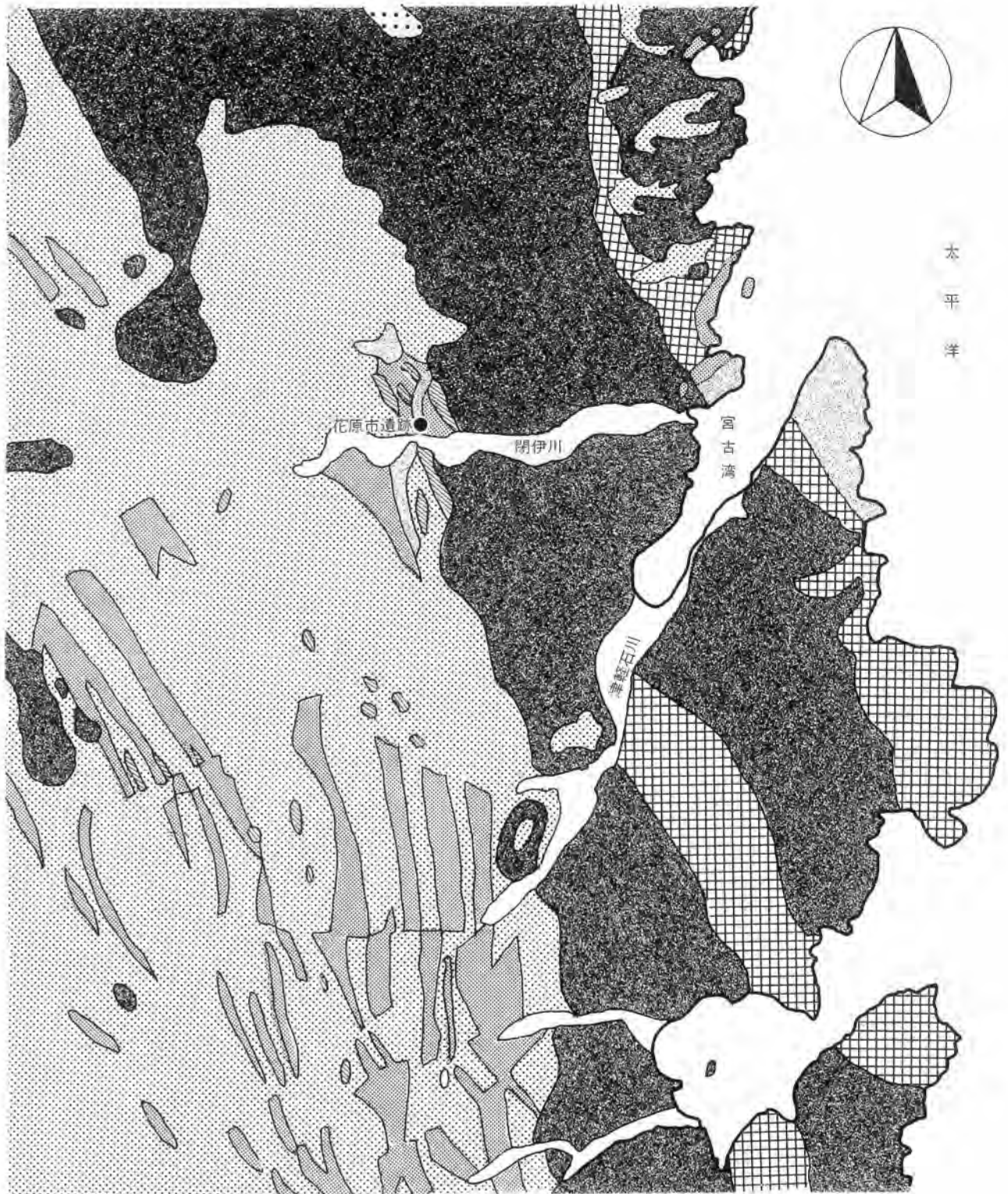
次に地質についてだが、西部の山地帯は中生界ジュラ系の北部北上山地から続く北部北上帯（岩泉帯）が基盤をなし、この中にはそれ以前の古生界ペルム系からの岩相が混在し砂岩・頁岩・火山岩類・チャートなどの堆積岩類がみられる。市北部の沿岸部には中生界下部白亜系下部の安山岩質の堆積岩からなる原地山層がひろがっている。また、市東部の重茂半島の海岸部にもそれとほぼ同時期に堆積したと考えられる重茂噴出岩類があり、やはり石英安山岩類などからなっている。そしてその間の市中央部から東部の重茂半島中央部にかけて南北に広く分布しているのが、中生界下部白亜系下部に進入した花崗岩類（宮古花崗岩体、田老花崗岩体）である。更に、この上に白亜紀前期の化石を産出することで有名な中生界下部白亜系上部の宮古層群（砂岩・礫岩・泥岩類）が堆積する。よって、宮古花崗岩体は原地山層と宮古層群の間に進入したもので層位的に極めて限定された時期に進入したものである。北上山地に多数知られている花崗岩のうちでもその進入時期が明確にわかっているのは、この宮古花崗岩体だけである。また、重茂半島中央部の花崗岩類は宮古花崗岩体進入後に貫入したものである。以上が、宮古市の基盤を構成する地質である。

花原市遺跡は、地質学上は西部の北部北上帯の上にある。当遺跡の東側にある小沢を山地帯へ向かい沢ぞいに登っていけば、通称“風穴（ふうけつ）”と呼ばれている石灰岩の洞穴があり、戦後まで蚕の卵を保存しておく冷蔵庫のかわりにしていたという。






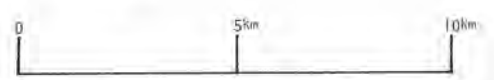
0 1 : 50000 10000 m

第3図 地形分類図



-  砂岩、頁岩、火山岩類
-  花崗岩
-  チャート
-  安山岩、石英安山岩、頁岩

-  石灰岩
-  酸性火山岩
-  砂岩、頁岩、チャート、火山岩類



第4図 地質分布図



第5図 花原市遺跡と周辺の遺跡

3 周辺の遺跡（第5図）

花原市遺跡の所存する宮古市最西部には、周囲が山地帯に囲まれているためか遺跡の立地条件としては適さないためか意外と周知の遺跡は少ない。

牛伏遺跡

当遺跡の立地する閉伊川北岸と対峙する南岸の扇状地状にひらけた牛伏地区に牛伏遺跡が知られている。『分布図 86』によれば土師器が表採されるとある。また、同様に川をはさんだ当遺跡の南東側には根城館跡がある。当館跡は標高100~120mの山地を切りひらいた山城で、鎌倉時代末期の南北朝時代の14世紀前半頃に閉伊十郎親光によって築城されたといわれている。この根城から閉伊川沿いに下っていくと、やはり閉伊氏によってつくられた根市館跡、老木館跡、田鎖館跡、松山館跡、千徳城跡と川をはさんで両岸に、そして支流の長沢川、近内川流域に花輪館跡や近内館跡などが点在し、鎌倉時代末から中世にかけて当地方を支配した閉伊氏の活動の拠点が残されている。各館跡については、『金浜館 85』や『熊野町 89』などの一覧表を参照されたい。また、当遺跡の範囲内にはその閉伊氏の菩提寺となっている華嚴院があり、往時は周囲に僧坊などがあり当地方第一の寺院として隆盛していたといわれている。今回の調査でも掘立柱建物跡や渡来銭である元の銭などが僅かながら出土しており、何らかの関連性を予測させるものであると考えられる。

根城館跡

千鶏遺跡

さて、市内の縄文時代の発掘調査された主な遺跡をみると前期初頭の竪穴住居跡30棟余を検出した重茂半島東岸の千鶏遺跡が、現在確認されているところ市内では最古の集落跡である（『千鶏 89』）。中期になると昭和61年（1986）から国庫補助を導入して範囲確認調査を実施している崎山貝塚が知られている（『崎山遺跡群 I~VIII』）。当貝塚はその保存状況が良く、しかも中央広場・環状遺構帯・住居跡・貝塚・湿地帯という特異な集落構造を呈しており現在も調査を継続中である。また、今回調査した花原市遺跡の内容とはほぼ同時期中期前半期の遺跡として、山口川沿いの段丘上に立地する高根遺跡などの調査例がある（『高根 89』、『高根 92』）。後期から晩期にかけて遺跡数が減る傾向にあるが、後期前半の遺跡としては白石遺跡（『崎山遺跡群 II~V』）、後半から晩期にかけては現在発掘調査中（94~97年までの予定）の近内中村遺跡、晩期の遺跡としては屈葬人骨を出土した大村遺跡などが調査されている（『大付 79』）。この他にも市内では、中期を主体とした幾つかの遺跡が調査されているが、小規模なものが多い。

崎山貝塚

高根遺跡

近内中村遺跡

Ⅲ 調査内容

1 調査の方法

調査対象面積が僅か100㎡と狭いため全面を発掘調査した。調査座標については、地形にあわせた任意のものとし座標軸は磁北より50° 30′ 西偏する。標高値については標高基点から移動しそのまま使用した。

遺構名は、報告書刊行の時点で次のとおり変更した。

調査時遺構名	新遺構名称	調査時遺構名	新遺構名称
L H	第1号竪穴住居跡	HP3	第1号土壇跡
H 1	第2号竪穴住居跡	H6	第2号土壇跡
H 5	第3号竪穴住居跡	H9	第3号竪穴跡
H P 4	第1号竪穴跡	P101 (H7)	第3号土壇跡
H P 2	第2号竪穴跡	P102	第4号土壇跡

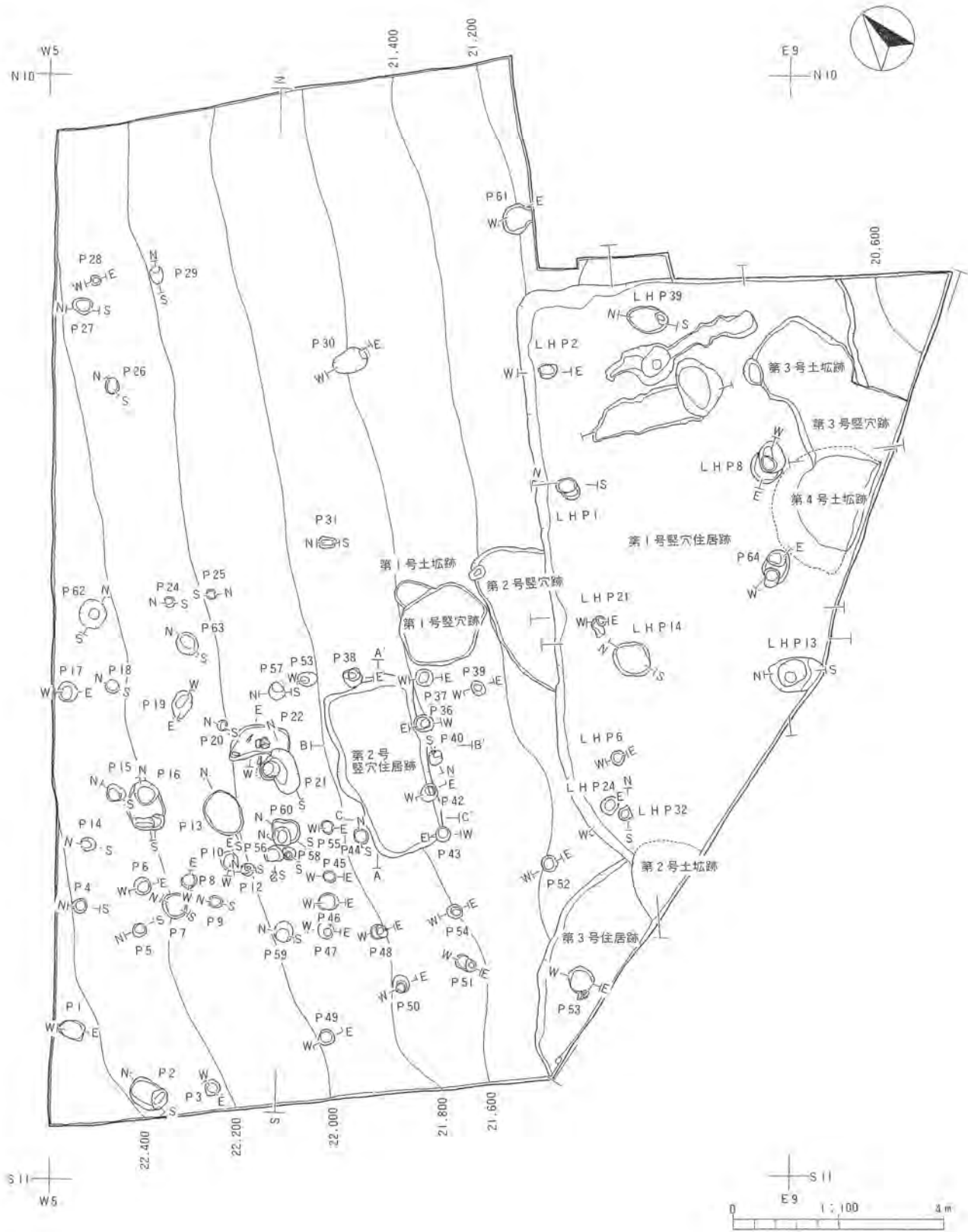
※出土遺物の登録は調査時遺構名で行っている。

第1表 遺構名新旧対応表

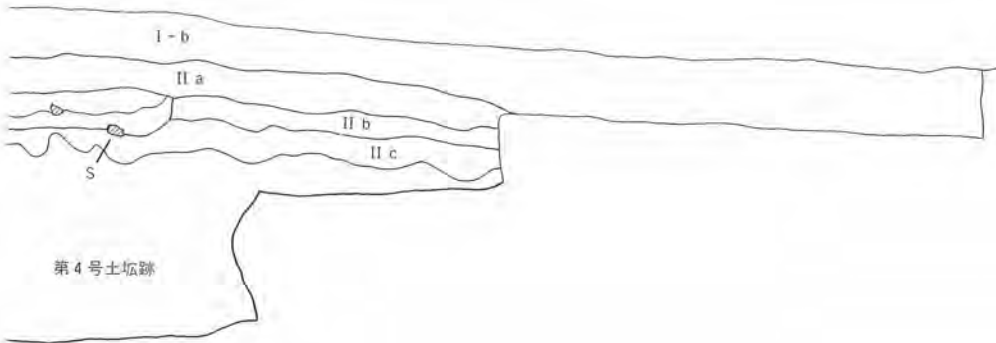
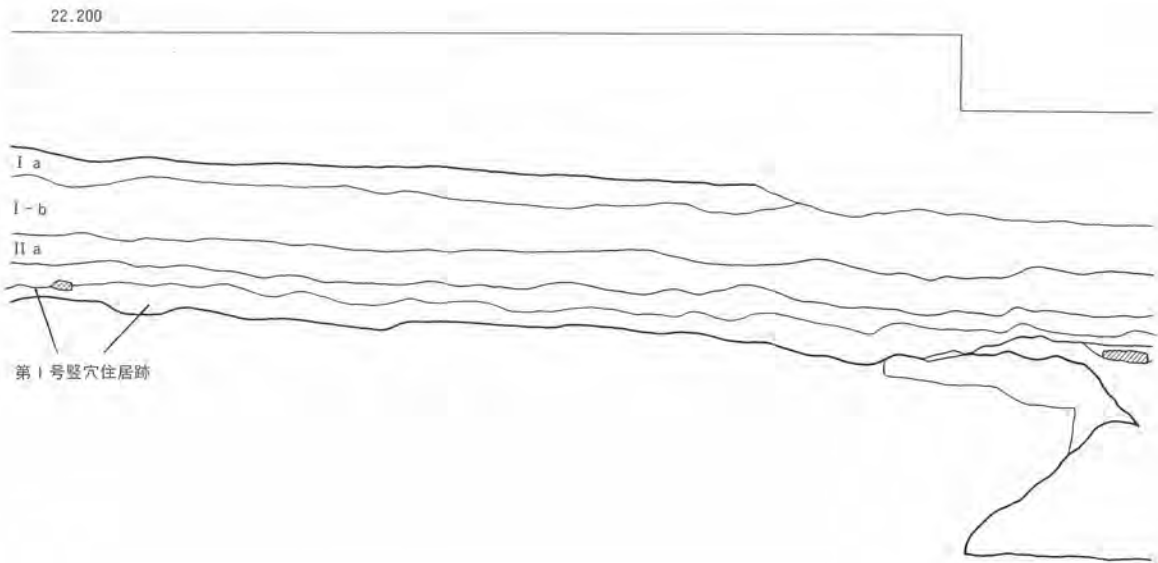
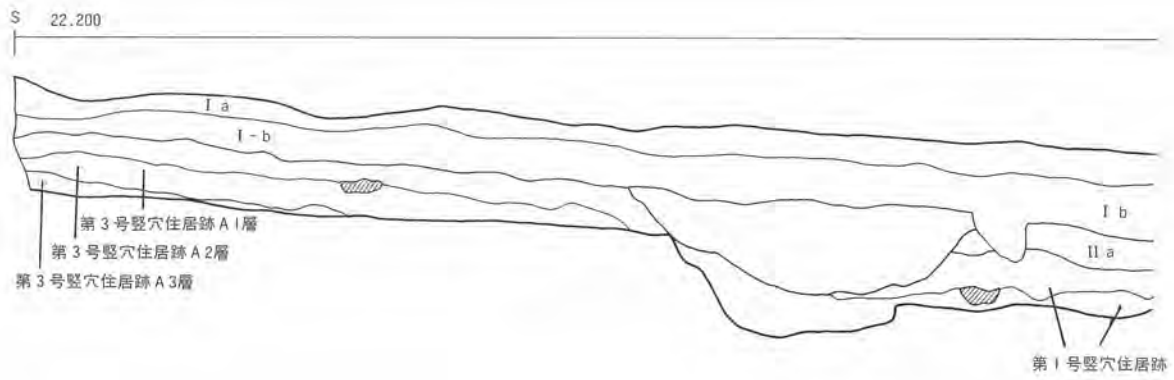
2 遺跡の層位

調査対象面積が僅か100㎡で調査区の東壁の土層断面観察によって確認された基本土層は次のとおりであった。

- I層 表土層。現耕作土層で暗褐色を基本とする固さ、しまりを欠く。土器、石器などの遺物を包含するが、量的には少ない。斜面下部（調査区東側）では厚くなる。
- II層 調査区の北東側で確認されたもので、そのまま調査区外へ延長する。黒褐色土を基本とし、固さ、しまり、混入土などの違いで3層に細別されたが、調査区の北東隅でだけ僅かに確認されただけの遺物包含層と思われる。
- III層 地山層。黄褐色から褐色を呈する固く、しまった土層で無遺物層である。



第6図 調査区全体図



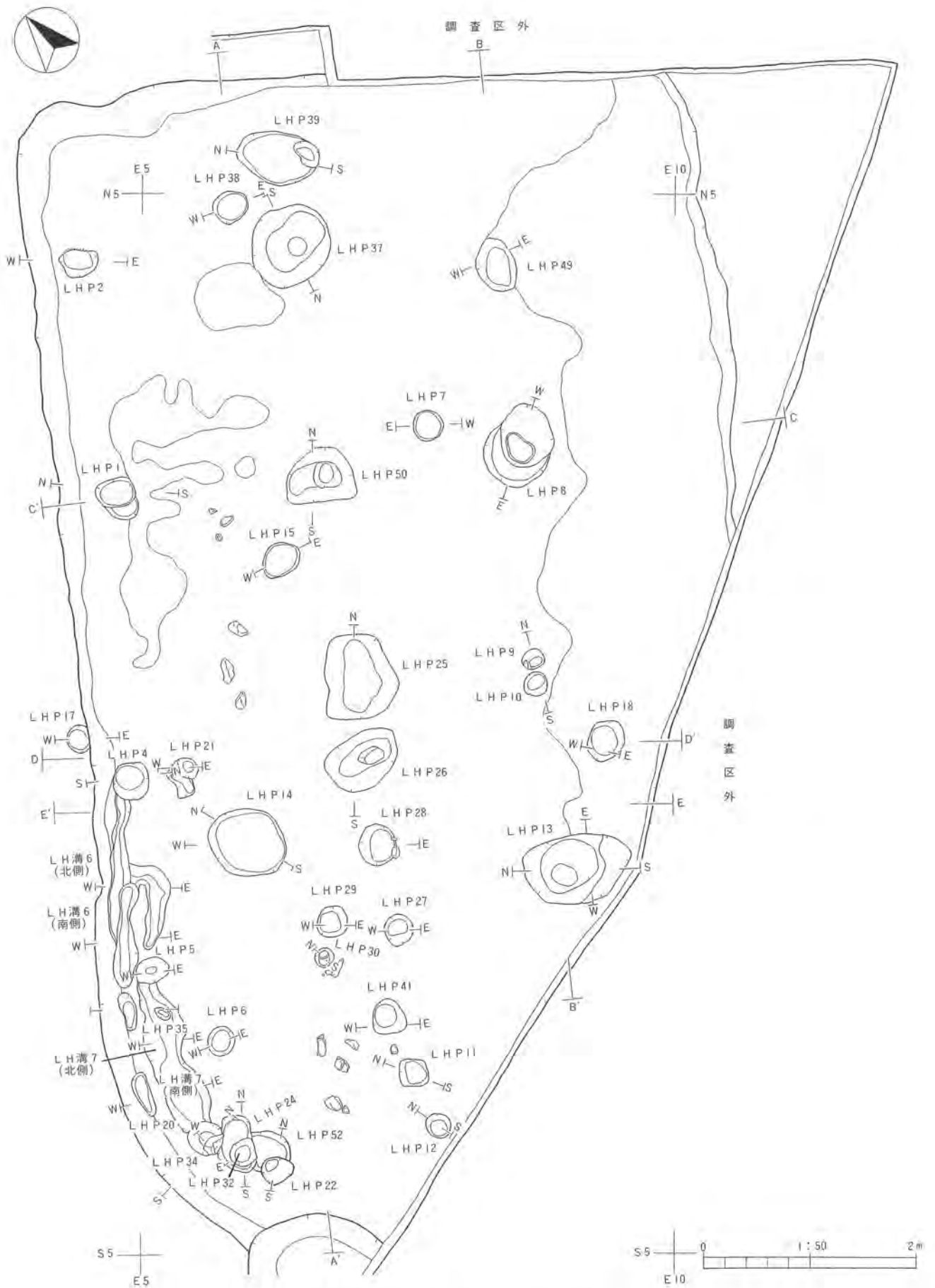
第7図 基本層序図（調査区東壁工層断面図）

3 検出した遺構・遺物

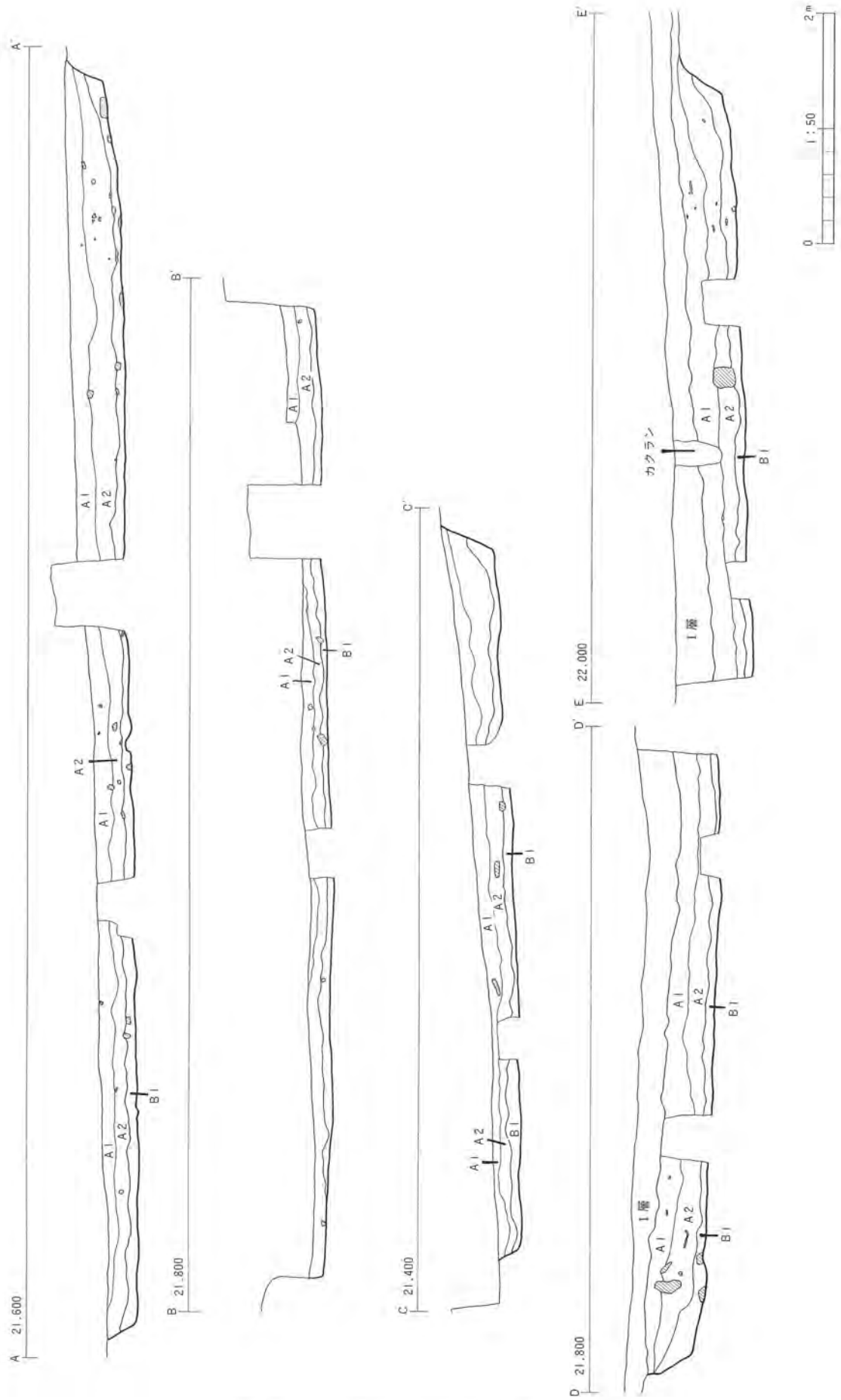
A 縄文時代の遺構・遺物

第1号竪穴住居跡（第8～27図）

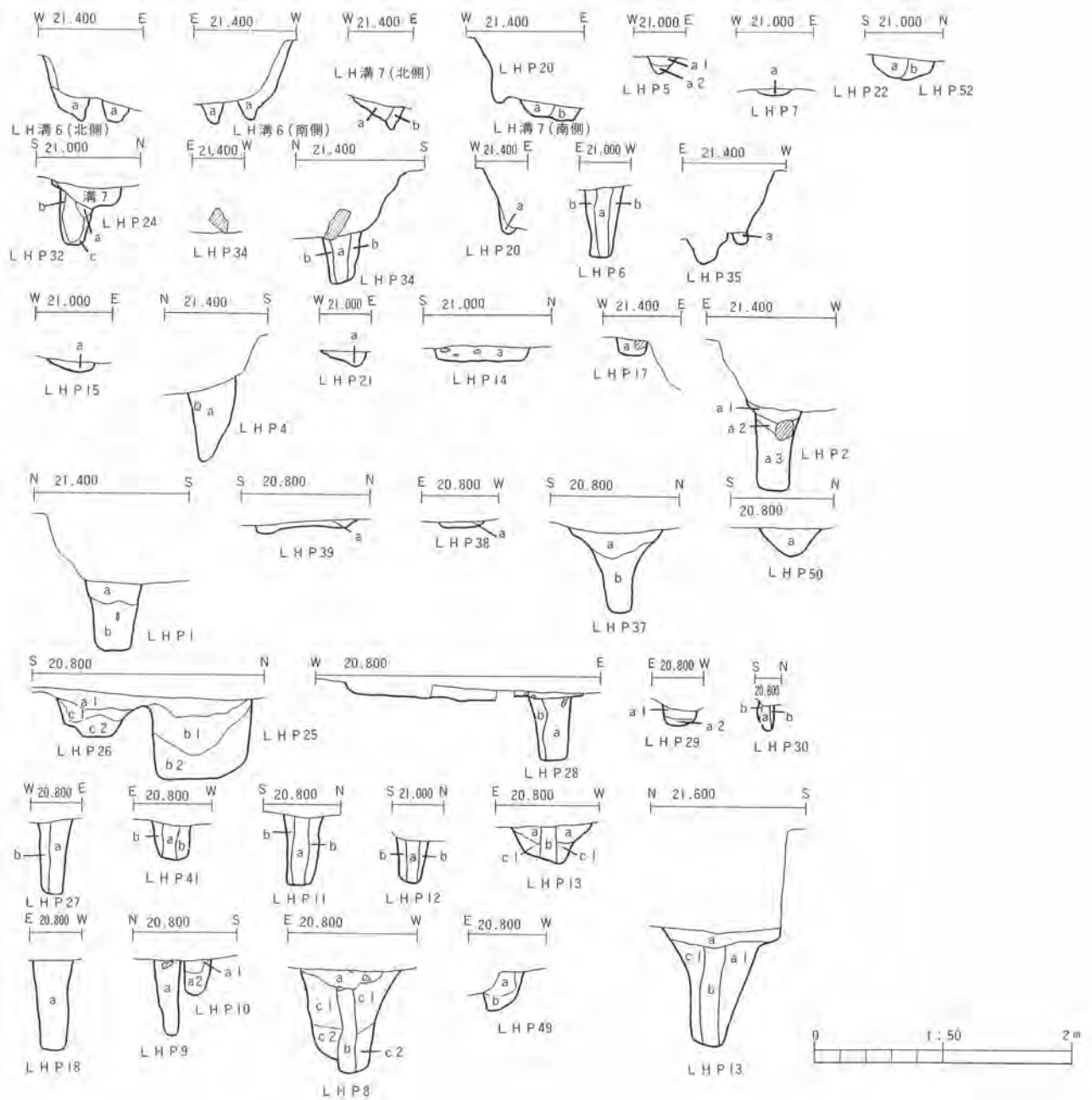
重複	調査区の北東側に検出し、一部は調査区外となる。南壁付近で第3号竪穴住居跡、第2号土坑跡、西壁中央付近で第2号竪穴跡、東壁付近で第3号竪穴跡や第4号土坑跡、北壁で調査区外に存在する遺構（精査せず一部断面だけで新旧を確認しただけ）と重複するが、南壁付近で重複している第2号土坑跡以外はすべて当遺構のほうが新しい時期のものである。
平面形	平面形は、東壁が一部分しか検出できないなど全貌が明らかでないが残存部分から判断すると南側が楕円形状で北側が方形を呈する砲弾形状になる。
規模	規模は長軸方向で11.3m、短軸方向で6.35m、深さは西壁側で0.45～0.50mをはかる。
埋土	埋土は2層に大別される。A層は竪穴上部から中位に堆積するもので、更に2層に細分された。A1層は暗褐色に近い黒褐色土を基本とし、I層（表土）下にあり畑作の影響、攪乱が顕著である。やや固く、しまりは中程度である。A2層は暗褐色土を基本とし、黒褐色土や黄褐色土を塊～粒状に混入する。比較的固く、しまっている。B層は竪穴の床面を覆うもので、明るい暗褐色土～褐色土を基本とし、黄褐色土を塊～粒状に比較的多く混入する。固さ、しまりとも中程度である。A～B層まではほぼ万遍なく土器・石器などの遺物を含んでおり、A1層の上面では銭や陶磁器類などの小破片も出土している。
床面	床面は、ほぼ平坦面で西壁側の一部に黄褐色の粘質土の貼床が確認された。また、東壁側は地山面ではなく古い遺構ないしは遺物包含層と思われる黒褐色土がひろがっていたが、建物工事による影響が及ばないため、精査は行わずそのまま埋め戻した。それ以外の部分は地山面をそのまま床面として使用している。東壁側はやや固さに欠けるが全体的には固くしまっている。
周溝	周溝は西南側に二重の短い周溝を検出した。幅が0.40～0.20m、深さ0.10～0.20mをはかるものである。埋土は暗褐色～褐色のややしまりのある土で、固さは中程度である。
柱穴	柱穴跡及び小土坑跡、小ピットが床面上に多数検出したが、LHP2、LHP1、LHP4、LHP6、LHP12、LHP18、LHP8が主柱穴に相当すると考えられるが、LHP13、LHP34なども深く柱痕跡が確認されている。具体的な柱配置は未調査部分もあり不明だが、LHP2、LHP1、LHP4などは西壁際沿いにあるが、東壁側のものは壁際から幾分離れている。また、LHP3には写真図版3のような全長約0.35mほどの多孔質の小礫の立石？が伴っていた。 炉跡らしき痕跡は床面上では確認されなかった。僅かにLHP49の南東に焼土のひろがりを見出したが、浅くほとんど焼けていない状態で炉跡とは断定しかねるものであった。
土器	遺物は床面、床面のピット、埋土中より土器・石器が多数出土したが土器で復元可能なものは1個体だけで大部分は小破片で占められている。また、今回の調査で出土した遺物の90%以上は当遺構からのもので占められている。 土器は第11図～第16図である。第11図1は唯一復元できた土器でほぼ床面上から写真図版5のような状況で出土したものである。底部から胴部、口縁部まではほぼ直線的に立ち上がり、口縁部と胴部の区別が不明瞭な深鉢形土器である。口縁部は帯状に肥厚し、横回転のLR縄文文



第8図 第1号竪穴住居跡



第9図 第1号竪穴住居跡土層断面図



第10図 第1号竖穴住居跡床面ピット土層断面図

施文後に下端部に円形の刺突列を施している。胴部には横回転、縦回転のLR、RL縄文施文後に4分の1周毎に縦位の円形刺突を施した隆帯が付されている。隆帯付近はかなり雑ながら若干の調整がなされているようで地文の縄文が消されている。中期初頭の大木7a～7b式に伴うものである。第12図2～20は床面～床直上から出土したものである。すべて深鉢形土器と思われる。2～8は床面、9～15はほぼ床面の床直上、16～20は貼床の下と東壁付近の地山面でない床面から出土したものである。2は2個一対の山形突起を有す口縁部片で縦位の撚糸文を施文する。3は口縁部上端が肥厚しその無文部に上下2段に刺突列を巡らせている。4は口縁部上端がひさし状に外反するもので刻目を施す。地文は横位のS字状連鎖文を施文する。5は口縁部に波状の貼付文を付すもの。6、7は口縁部上半が短く外傾する。6は口縁上部に円形の刺突列を巡らしその下に沈線による楕円形の区画を施しその内部にも波状の沈線を施文している。7も6と類似し円形刺突と波状沈線文がみられる。8は口縁部下部から胴部片で刺突を伴う隆沈線により楕円形区画を連結したものか。9は胴部から口縁部が外傾するもので、口縁部には平行する沈線間に刺突を施し胴部には木目状の撚糸文を施文している。10～12は口縁部が内湾気味となる器形のもので、10は山形状口縁となるものでその頂部を境とし隆線による楕円形の区画をつくりその内部に刺突列を施文している。11は口縁上端に突起を有すものでその突起から隆線による山形状ないしは三角形の区画文を施文するものか。12は隆沈線により楕円形ないしは三角形の区画文を施文するものか。13～15は胴部片。13は隆沈線文が施されている。14は網目状撚糸文、15は木目状撚糸文が施文されるもの。16は口縁部が外反するもので縄文のみの施文である。17は山形状口縁を呈すもので頂下に円形状そして連弧状の圧痕文を施文する。18は口縁部が内湾するもので隆沈線文で文様を描くもの。19は山形状の貼付文を付すもの。20は底部片で底部下端が張り出す。

21～25は床面の周溝、26～53は床面の柱穴や小土坑、小ピットから出土したものである。21は口縁上部が先細りとなるもので無文である。22は口縁部上端がひさし状に突出るもので口縁上面に縄文を施文する。22、23とも縄文のみの施文である。24は口縁が内湾し刻目を伴う隆沈線で文様を描く。25は垂下する蛇行貼付文を付す。29はLHP4出土で波状口縁を呈し最大突起の頂下に円形の貼付文を付し山形状から孤状の沈線文を施文している。30～34はLHP6出土で、30は大連孤状の沈線文と刺突を伴う隆線がみられる。31、33は沈線文で施文される。35～43はLHP14出土で、35は刻目を伴う太い隆線で文様を描く。36～39は隆沈線、沈線で施文するもの。40は刺突列を巡らせるもの。41～43は口縁部下部から胴部片。42は沈線下に刺突が、43は波状の沈線が施文される。44～46はLHP28出土で、44は波状沈線文、45は隆線で文様を施している。47～51はLHP48出土で、47、48は平行する沈線が施文される。52、53はLHP49出土で隆沈線が施文される。

以上の土器は床面～床直上、周溝、ピットなどから出土したものでほぼ第1号竪穴住居跡の所属時期を反映しているもので、18、28、45、52は次型式の大木8a式の要素がみられるが、ほぼ大半が中期前半の大木7a～7b式に相当するものと思われる。よって当住居跡もこの時期に所属するものと考えられる。

第13図54～第16図195はB層、A層の埋土中から出土したもので、量的にも多い。54～92までがB層、93～130がA2層、130～195がA1層出土である。

B層の土器だが、54～78は口縁部が外傾～外反～直接的なものである。54～58は短原体圧痕列、刺突列、原体圧痕、波状沈線文により施文されるもの。59～62は円形刺突を伴う隆線が付されるもの。63～71、73は沈線、刺突などにより施文するもの。63、65、66、68、71は楕円形の区画をつくる。72は波頂部にの字状の隆帯をもつもの。73は連弧状の沈線文を施文するもの。75は口縁部上面に沈線を施している。76は口縁部直下より縄文を施文するもの。77は縦位の細沈線を施文する。78は口縁部上端に刻目を配し原体圧痕により文様を描く。79～84は口縁部が内湾するもの。79、80は沈線と短原体圧痕文により施文するもの。81はボタン状の突起を付し沈線で文様を構成するもの。83は連弧状の沈線文を施文するもの。84は隆沈線で文様を施文する。85は口縁部上部が外反するもので羽状縄文を施文している。86～92は口縁部下部から胴部片である。86は外反する口縁部に竹管による沈線文を施文するものか。88は刻目の伴う縦位の隆帯を付すもの。89は隆沈線で区画文を構成するもの。

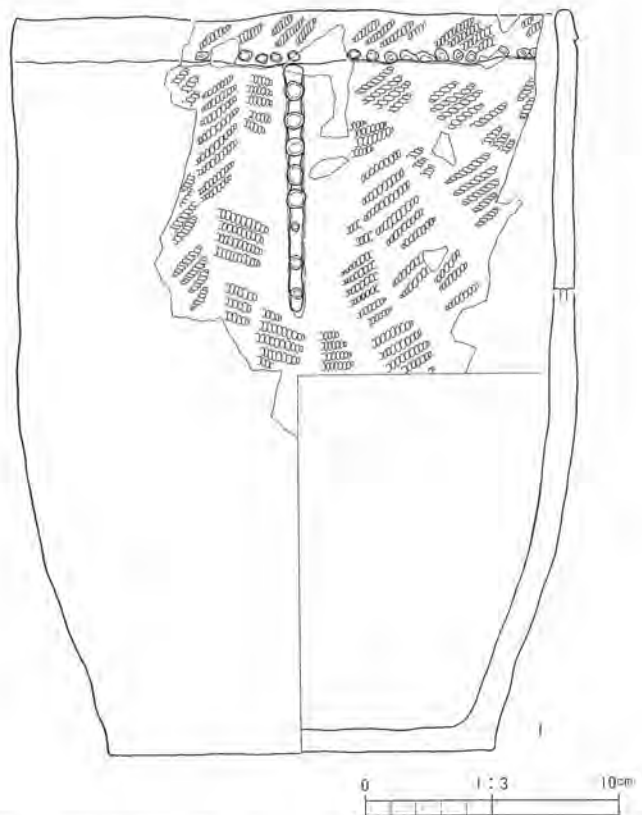
次にA2層から出土した土器だが、93～108は口縁部が直立ないしは外反、109～114内湾するもの。93～95、99、100は短原体圧痕、原体圧痕で施文する。96は竹管による沈線文を施文するもの。

97、98、109、110は沈線で施文するもの。101は円形刺突の伴う太い隆帯を貼付するもの。115～128は胴部片。115は横位の原体圧痕文を施文する。116は隆沈線間に竹管による刺突を施文するもの。117、118は沈線文。120は刺突の伴う太い隆帯を貼付し文様を構成する。

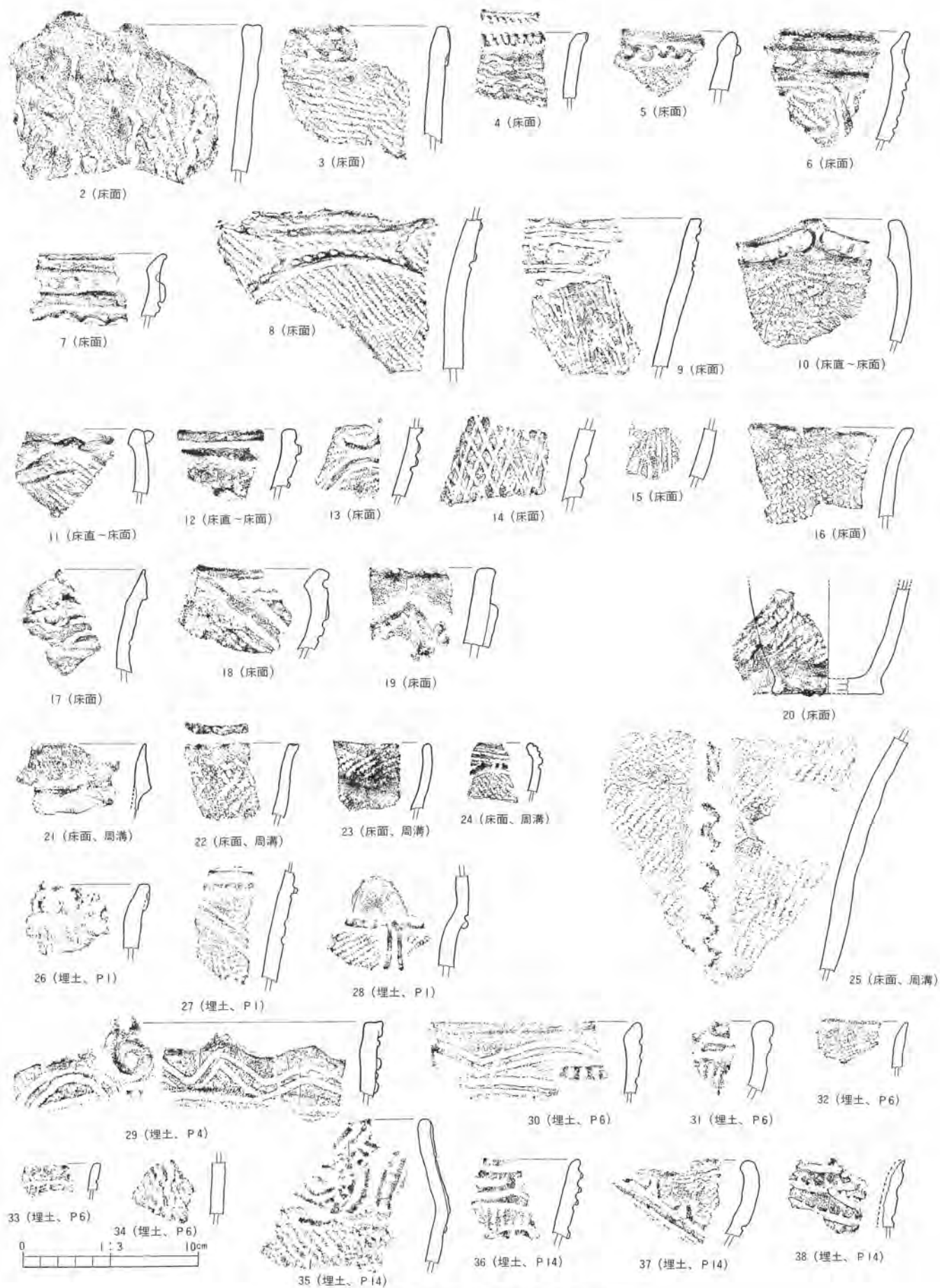
121～125は隆沈線で施文されるもの。129、130は平底の底部片である。

A1層から出土した土器は多い。131は不整撚糸文を施文するもの。132は網目状、133は木目状の撚糸文を施文するもの。134～136は縄文主体のもの。138はボタン状の突起が付されている。140～145は原体圧痕、短原体圧痕で文様を施文する。146沈帯と連続刺突により文様を描くもの。147は円形状の太い隆帯を付すもの。148～154は沈線で施文されるもの。

156は縄文を施文した隆帯で内外面に文様を構成するもの。158は内面に粘土紐を貼付している。159、160は楕円形の区画をつくるもの。163、165、168、170、171は隆沈線で施文するもの。172～193は胴部片。172は繊維を含むもの。181は原体圧痕文を施文する。182は波状の沈線を施している。184は沈線間に連続刺突を施文している。187～193は隆沈線で施文するもの。194、195は底部片。



第11図 第1号竪穴住居跡出土土器①



第12图 第1号竖穴住居跡出土土器②



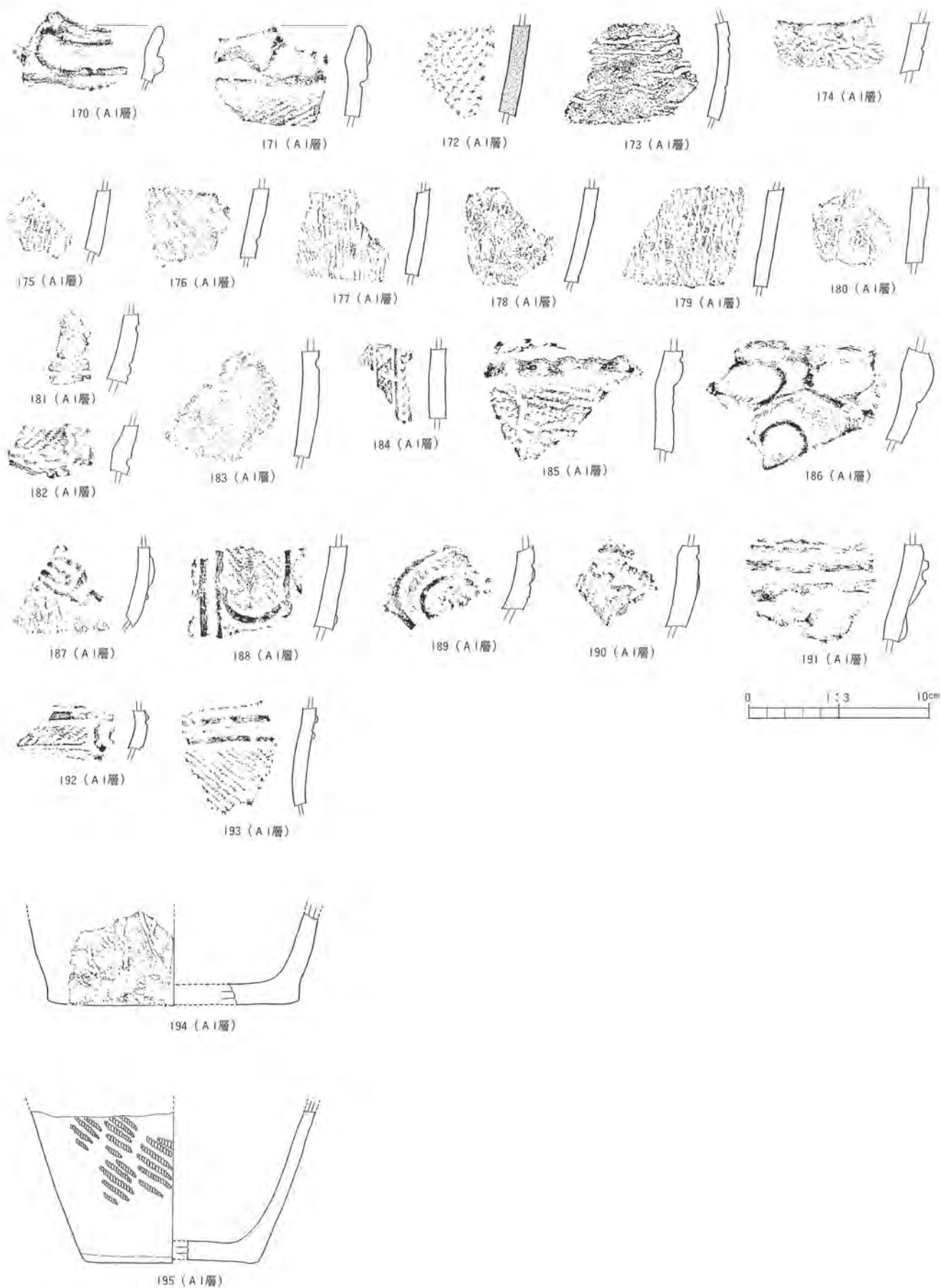
第13図 第1号竖穴住居跡出土土器③



第14图 第1号竖穴住居跡出土土器④



第15図 第1号竖穴住居跡出土土器⑤



第16図 第1号豎穴住居跡出土土器⑥

第17図～第27図が石器である。以下、剥片石器と礫石器に分けて記す。まず剥片石器（第17図～第22図）であるが、196～215までが床面、床面のビット、床面直上から出土したものである。196～204は石鏃である。196は基部が僅かに凹基となる三角形鏃で裏面に1次剥離面を残している。197～202は基部が抉入し凹基となるもので、197は脚部が丸みをもつ。201が正三角形形状となる以外は二等辺三角形形状の形態である。203は基部が有柄凸基となるもので全体的に丸みを有し、やや肉厚な剥片を使用している。204はやや不整形ながら平基の石鏃とした。裏面の一方の側縁部が縦に大きく剥離されている。205は推定で全長が12cmとなる木葉形を呈す両面調整の石槍（尖頭器）で、尖頭部先端を欠く。尖頭部は一方が直線的、もう一方はやや弧状に整形されており基部の下端部は原石面？を残している。206は縦型石匙で直線的な側縁部と湾曲する側縁部からなる。裏面はつまみ部分をつくり出すだけの調整剥離が施されているだけである。207は両面調整の石器で両側縁部とも両面からの調整剥離で刃部を作り出している。208は石錐の機能部である先端部を欠きつまみ部分だけを残すものである。209～215は削搔器類である。

216～222はB層から出土したものである。216～219は石鏃である。216は抉入に浅い無柄凹基のもの。217は無柄平基で両面に1次剥離面を残す。218は抉入の深い凹基となり一方の脚部を欠く。219は破損品。220は削器か。221は両側縁部のほぼ中央が抉入する片面調整の搔器で断面が台形状を呈する。222は削搔器類である。

223～225はA 2層から出土したものの。223、224は石鏃で223は無柄凹基、224は無柄平基で三角形の剥片に尖頭部を中心に調整剥離を加えただけのものである。225は薄い縦長の剥片を使用した石匙で、両面ともに大きく1次剥離面を残し縁辺部にのみ調整剥離を施している。226～249はA 1層から出土したものの。226～233は石鏃で226～231は無柄凹基で抉入の浅いものと深いものがある。228～230は細長い二等辺三角形形状に呈する。226の一方の側縁部は縦に大きく剥離（破損？）している。232、233は磨滅が著しい。234、235は石匙である。234は肉厚な剥片を使用した縦型のもので刃部が長方形形状を呈する。また、一方の側縁部が226のように縦に大きく剥離（破損？）している。235はつまみ部分付近だけを残した破損品。236、237は撥形を呈する篋状石器である。236は表面中央に原石面を残しており、刃部は搔器様に急斜度の調整剥離で断面が台形状で片刃状に整形している。237は表面が先端部と基部、裏面は全縁辺部に調整の剥離を施している。238は石錐の機能部を欠くもの。239～249は削搔器類と思われるものである。239は両面調整の石器で両側縁部に連続的な調整剥離で刃部を作り出した削器である。240は石錐の可能性が高い。241、242は削器と思われるが242は下端部を尖頭様に作りだしており、石錐の可能性も考えられる。243～247、249は急斜度の調整剥離で刃部を作っている搔器である。246は一方の側縁部が縦に剥離（破損？）している。248は側縁部にユーフレ的な細かい剥離がみられるものである。

250～274は出土層位が不明（多くは試掘トレンチからのもの）なものである。250～268は石鏃である。無柄平基と凹基、正三角形形状と二等辺三角形形状をていするものなどがある。256は全長僅か1.1cmと小型である。262は尖頭部を凹形に調整剥離されており石錐の可能性もある。268は尖頭部の作り出しが甘く石鏃の範疇にあてはまらないかもしれない。269～271は石匙で271は上部を欠く破損品である。269は直線的な側縁と湾曲する側縁からなり湾曲するほうは両

面からの調整剥離で刃部を作り出している。270は一応石匙としたが明確なつまみ部分の作り出しがみられず、搔器の類か。272は機能部を欠く石錐である。273、274はユーフレ的な細かい剥離が観察されたものである。

礫石器

次に礫石器（第23図～第27図）であるが、275～285は床面、床面ビット、床直上から出土したものである。275は磨石である。ほぼ中央部に磨面がみられる。276～280は楕円形ないしは円形の扁平な自然礫の側縁のほぼ中央部を剥離しただけの石錐である。281は打製石斧で大雑把に剥離で整形されており、表裏両面に原石面を残す。282は敲打痕跡が観察される石皿の破損品である。283、284は敲打磨石である。285、286は石皿で285には擦痕がみられる。

287～292はB層から出土したものである。287は長楕円形礫の短い方の側縁に敲打痕がみられる敲石である。288、292は楕円形の扁平礫の一面にひろく磨面のみられる磨石で292は小型である。289、290は敲打磨石の破損品で、290の方には敲打による剥離がみられる。291は敲打痕がみられる石皿の破損品である。

293～297はA2層から出土したものである。293、295は長楕円形礫一側縁部を使用した敲石である。294は敲打磨石。296は長楕円形礫の短い方の側縁に敲打痕がみられる敲石である。297は側縁部に原石面を残すだけで全体に敲打痕が観察される長方形のもの。

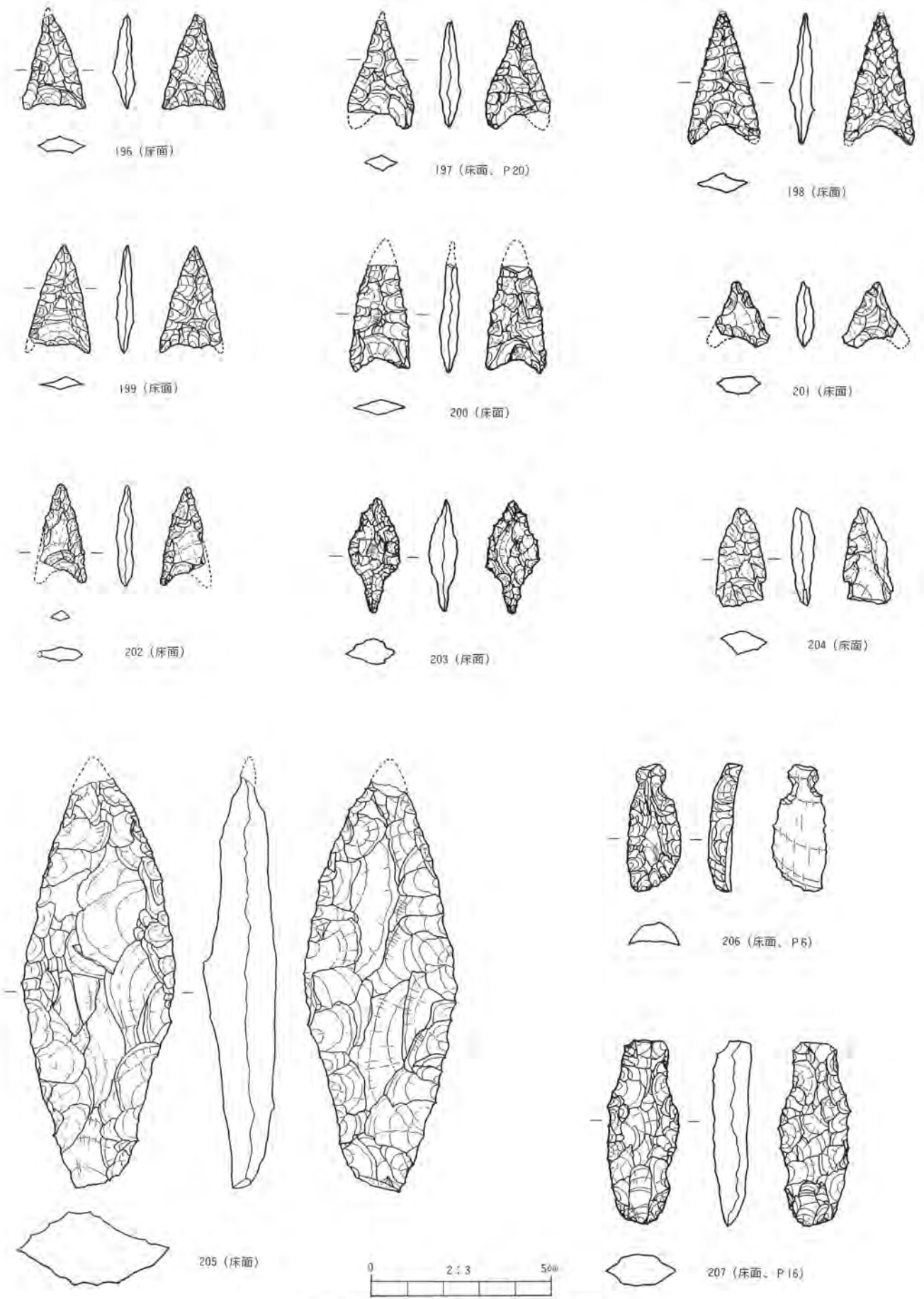
298～306はA1層から出土したものである。298は円形礫の側縁に剥離を施した石錐である。299は石器なのか断定できなかったが、扁平な小楕円形の片方の側縁にだけ剥離がみられるものである。今回の調査ではこのような小さな楕円形礫、円形礫が数例あったが石器と考えるならば石錐に相当するものと考えられる。300、301は磨製石斧の破損品である。どちらも刃部の破片である。302、303は敲打磨石で302の側縁には敲打痕も認められる。304、305は敲石で304は敲打磨石で302の側縁には敲打痕も認められる。304、305は敲石で304は敲打部が幅ひろい。306は石皿の破損品である。

307～310は東側壁付近の地山面ではなく古い遺構ないしは遺物包含層と思われる黒褐色土がひろがっているところから出土したものである。307、308は石錐で308の一方の側縁は磨面状になっている。309、310は敲石で309は長い方、310は短い方の側縁を使用している。

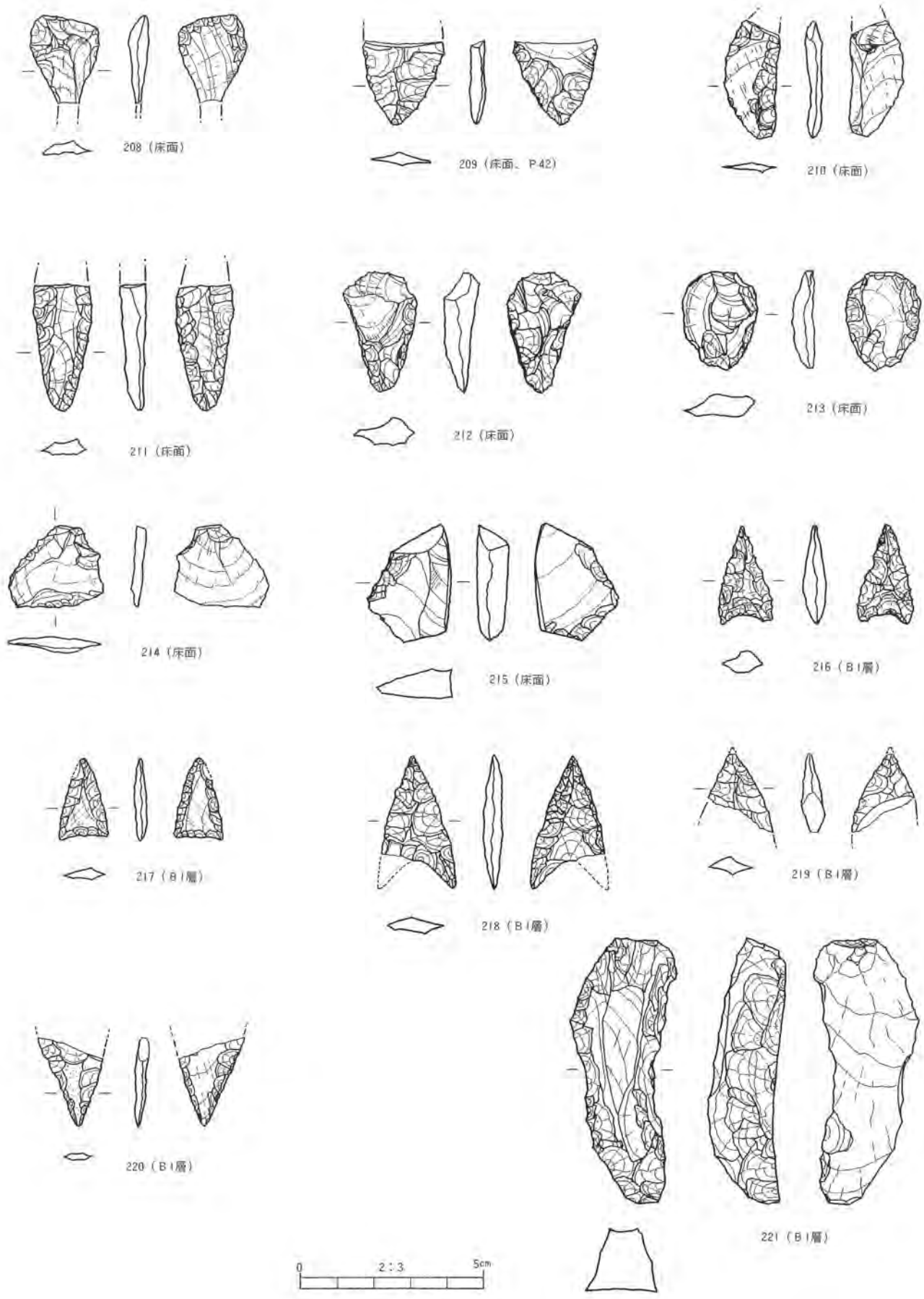
309は敲打痕がみられない側縁部が大きく剥離しており、両面使用のものであったと考えられる。

土製円盤

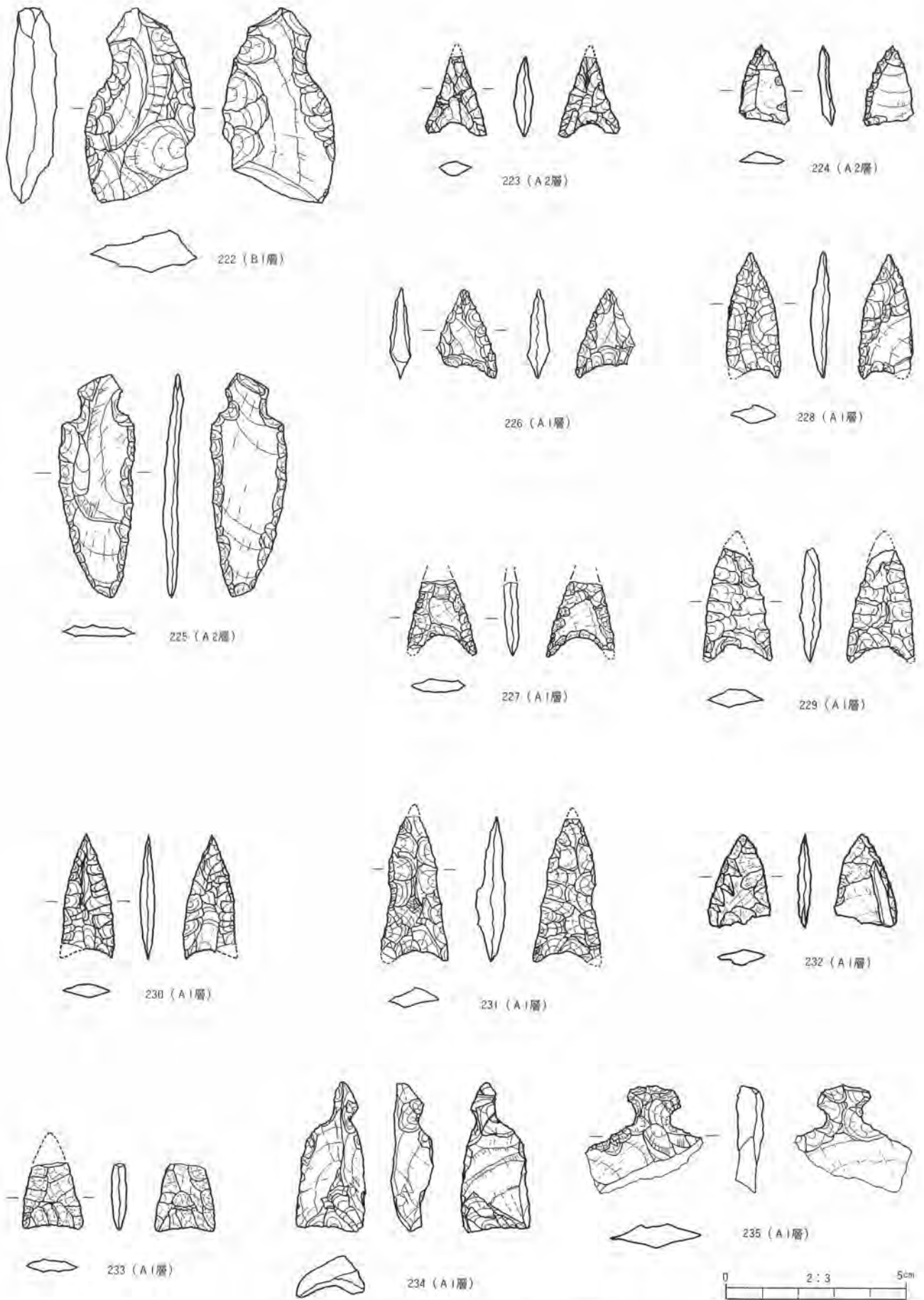
土器・石器以外の遺物としては第50図の土製円盤が1点だけ出土している。直径3.0cmと小型のものである。



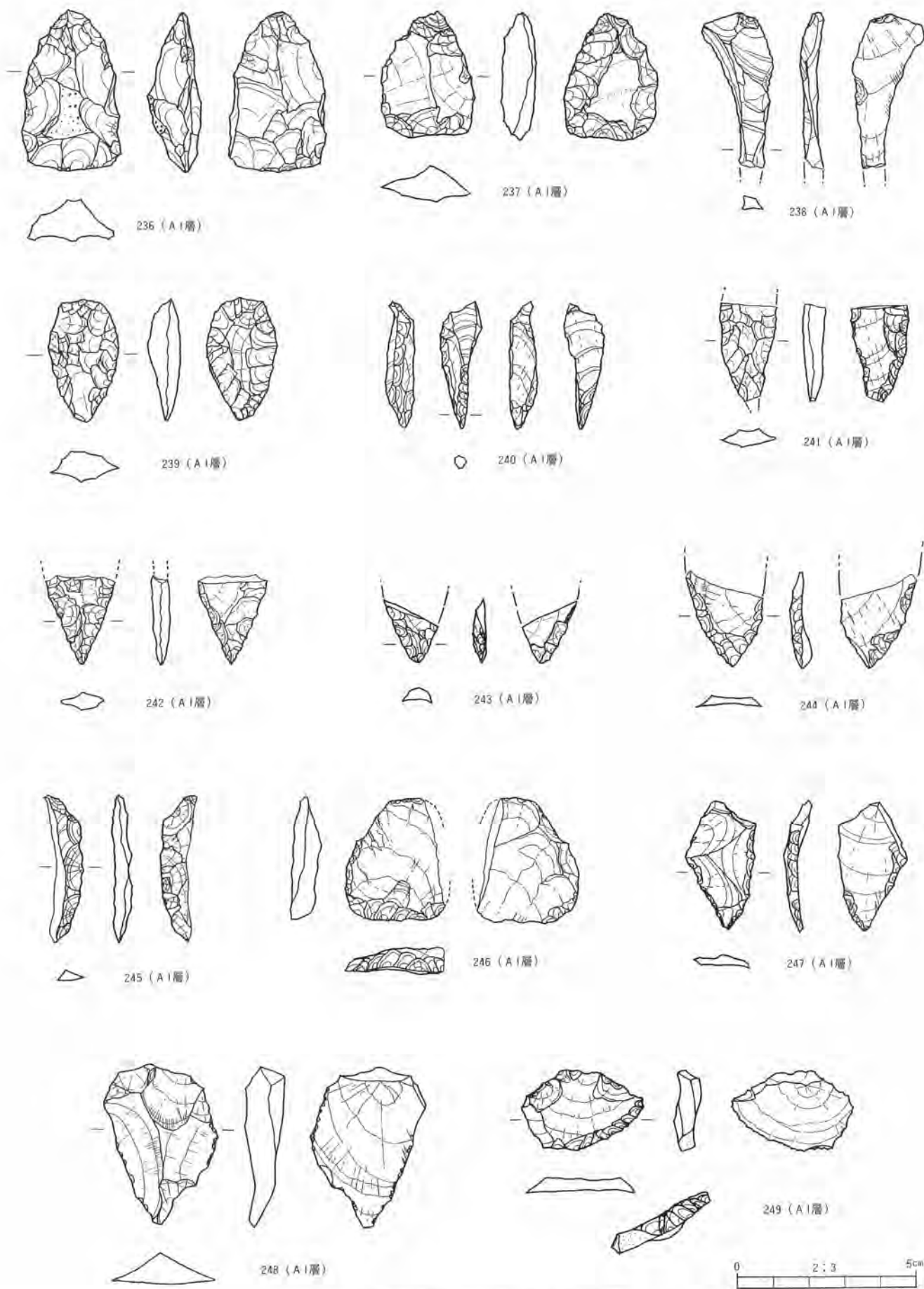
第17图 第1号竖穴住居跡出土石器①



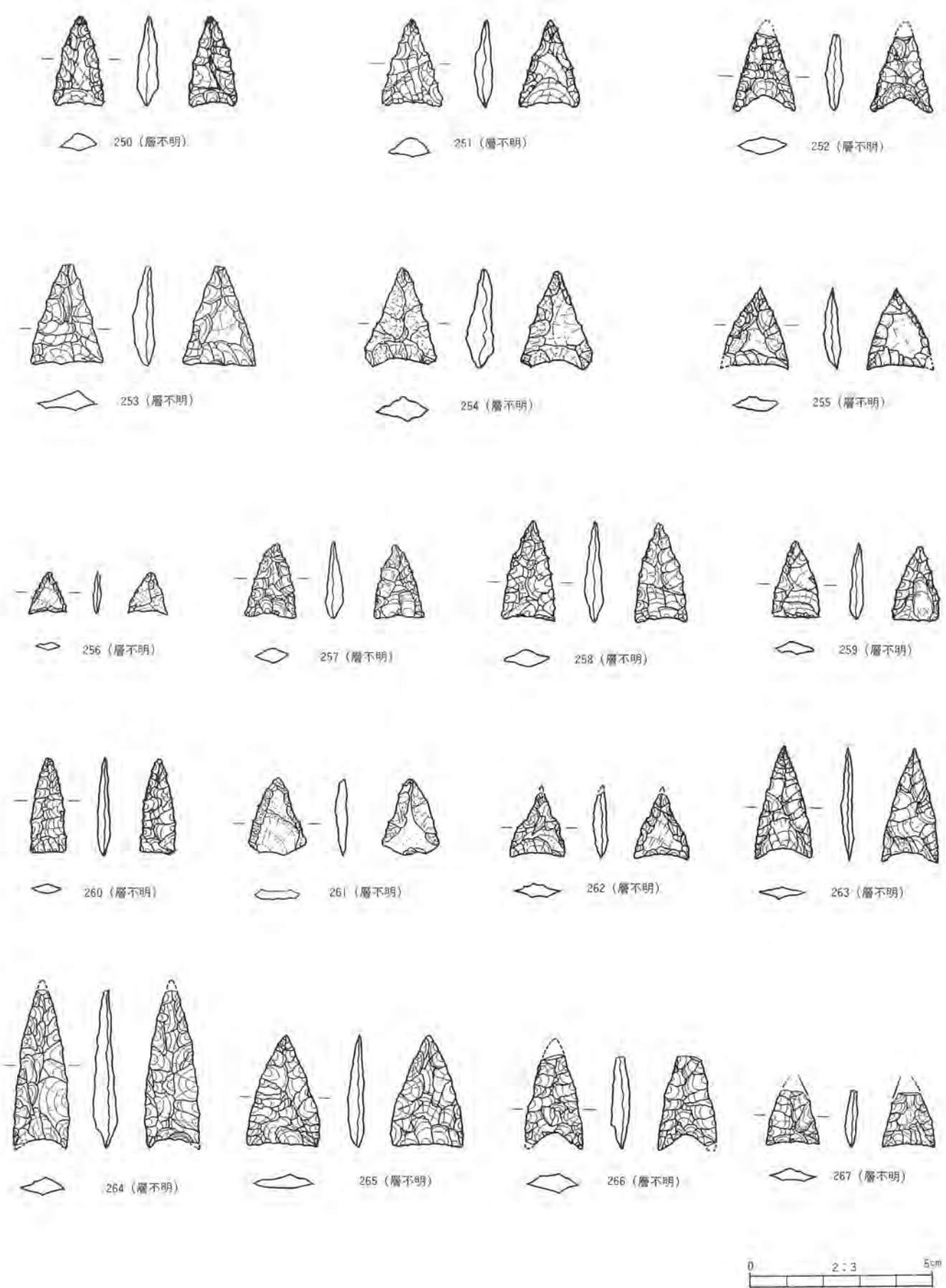
第18図 第1号竖穴住居跡出土石器②



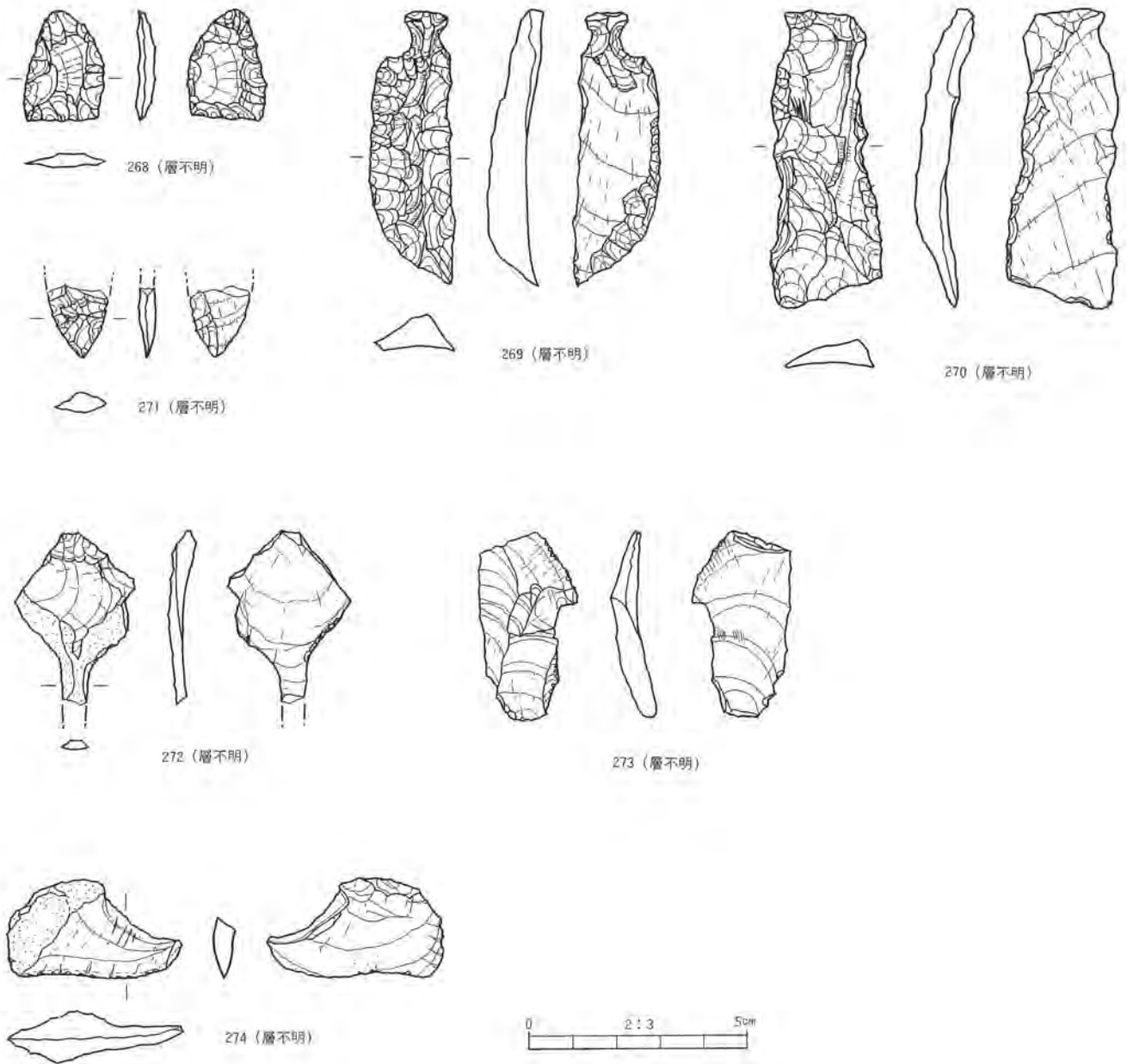
第19図 第1号竪穴住居跡出土石器③



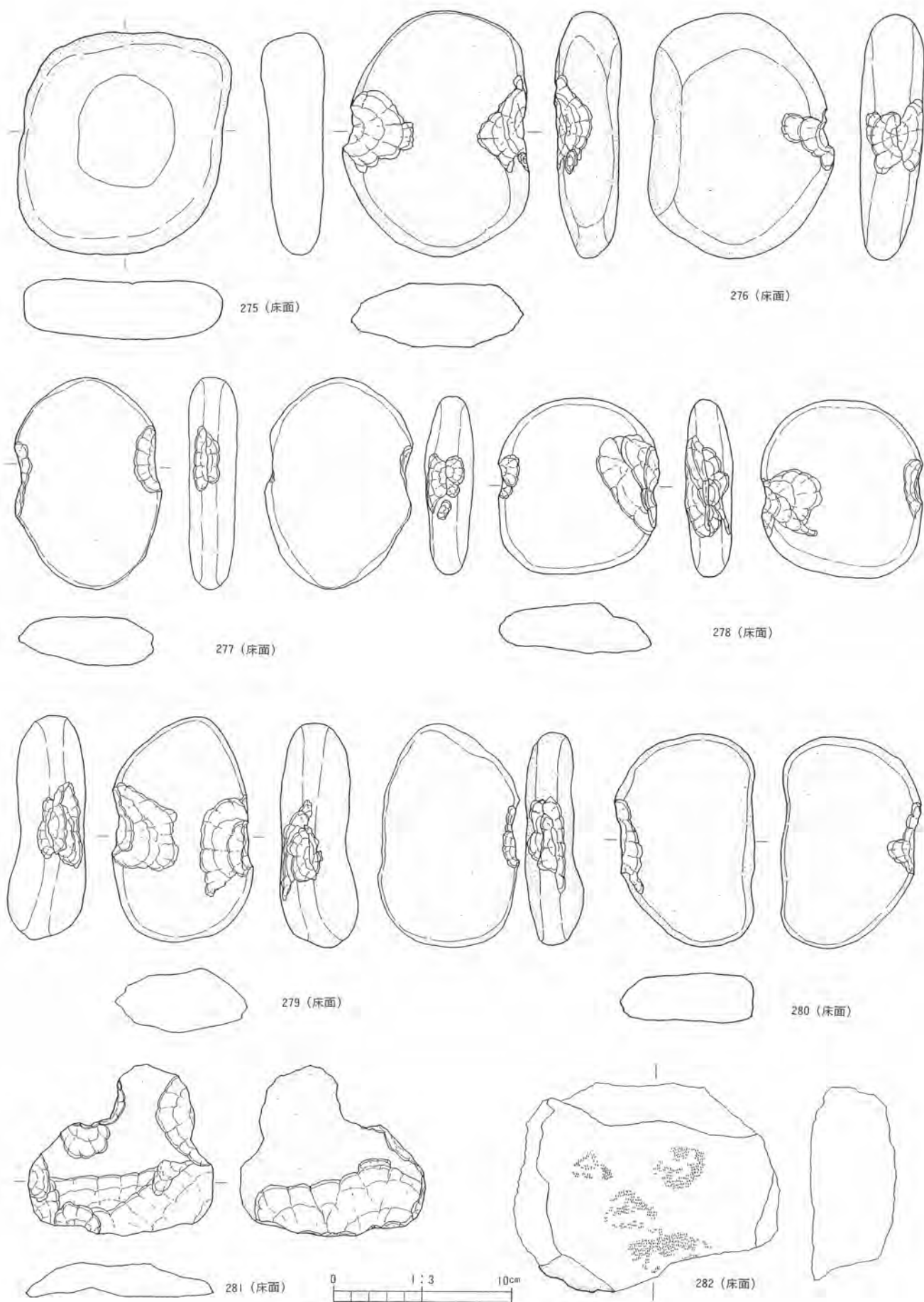
第20図 第1号竪穴住居跡出土石器④



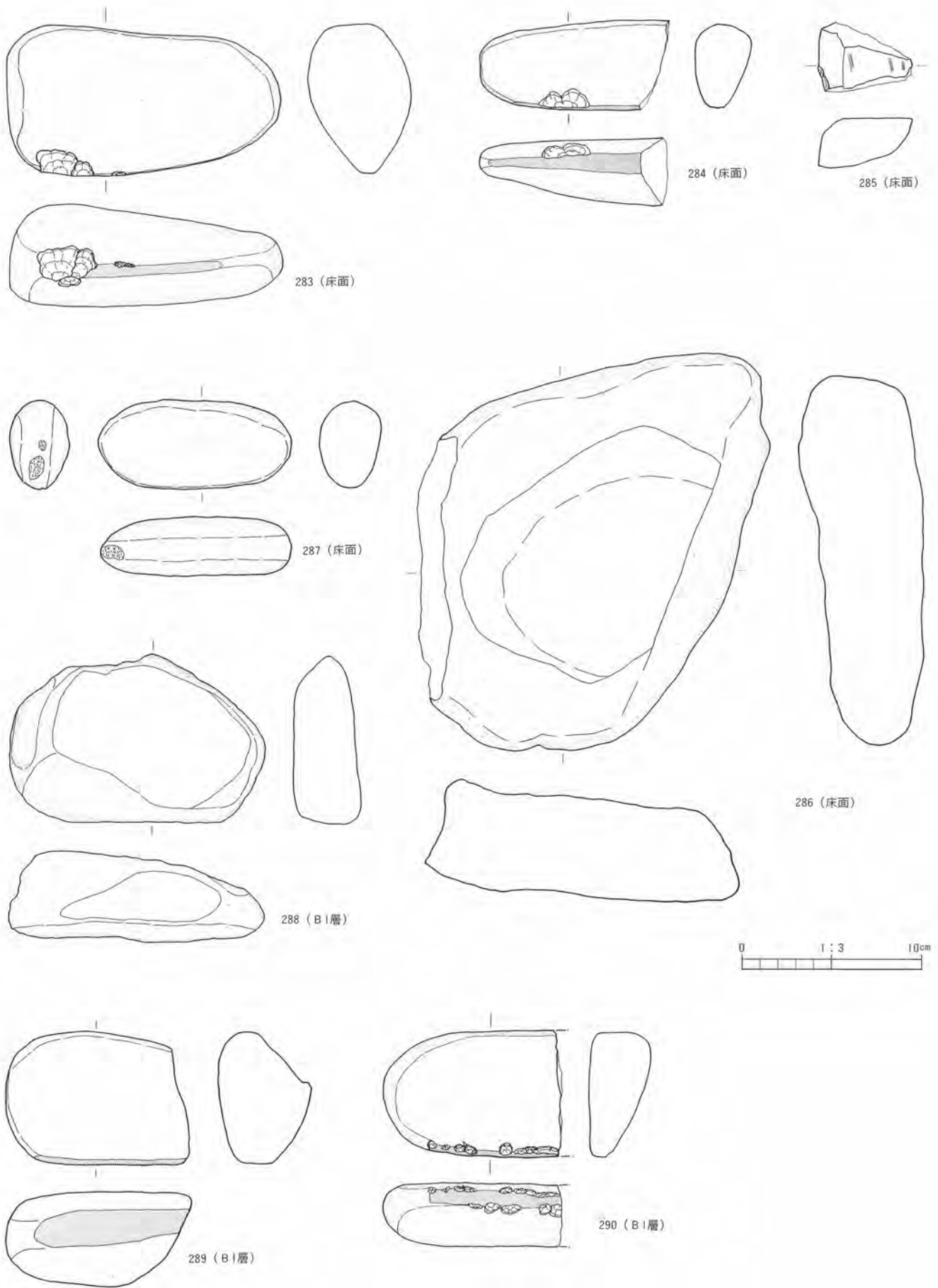
第21図 第1号竖穴住居跡出土石器⑤



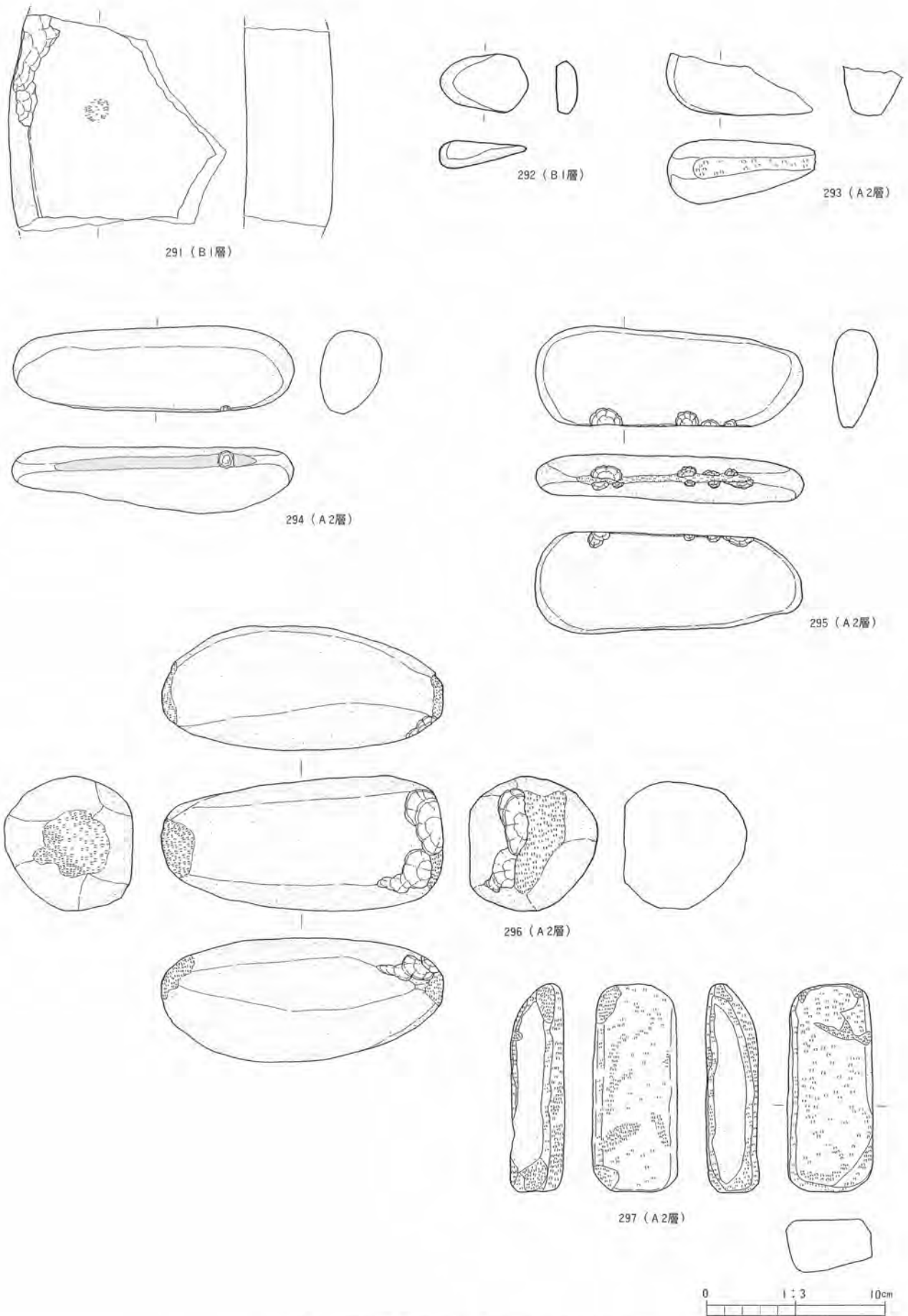
第22図 第1号竖穴住居跡出土石器⑥



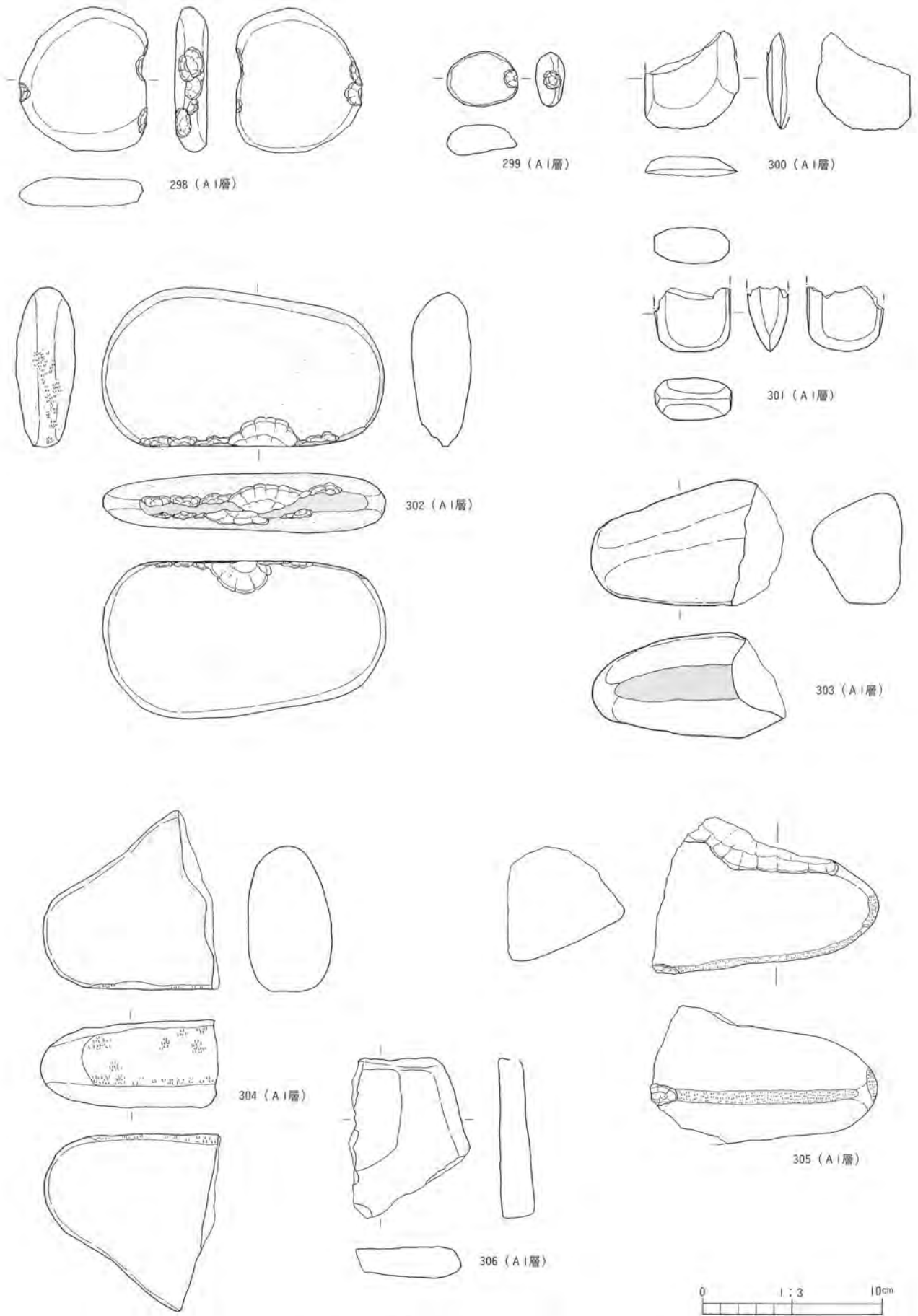
第23图 第1号竖穴住居跡出土石器⑦



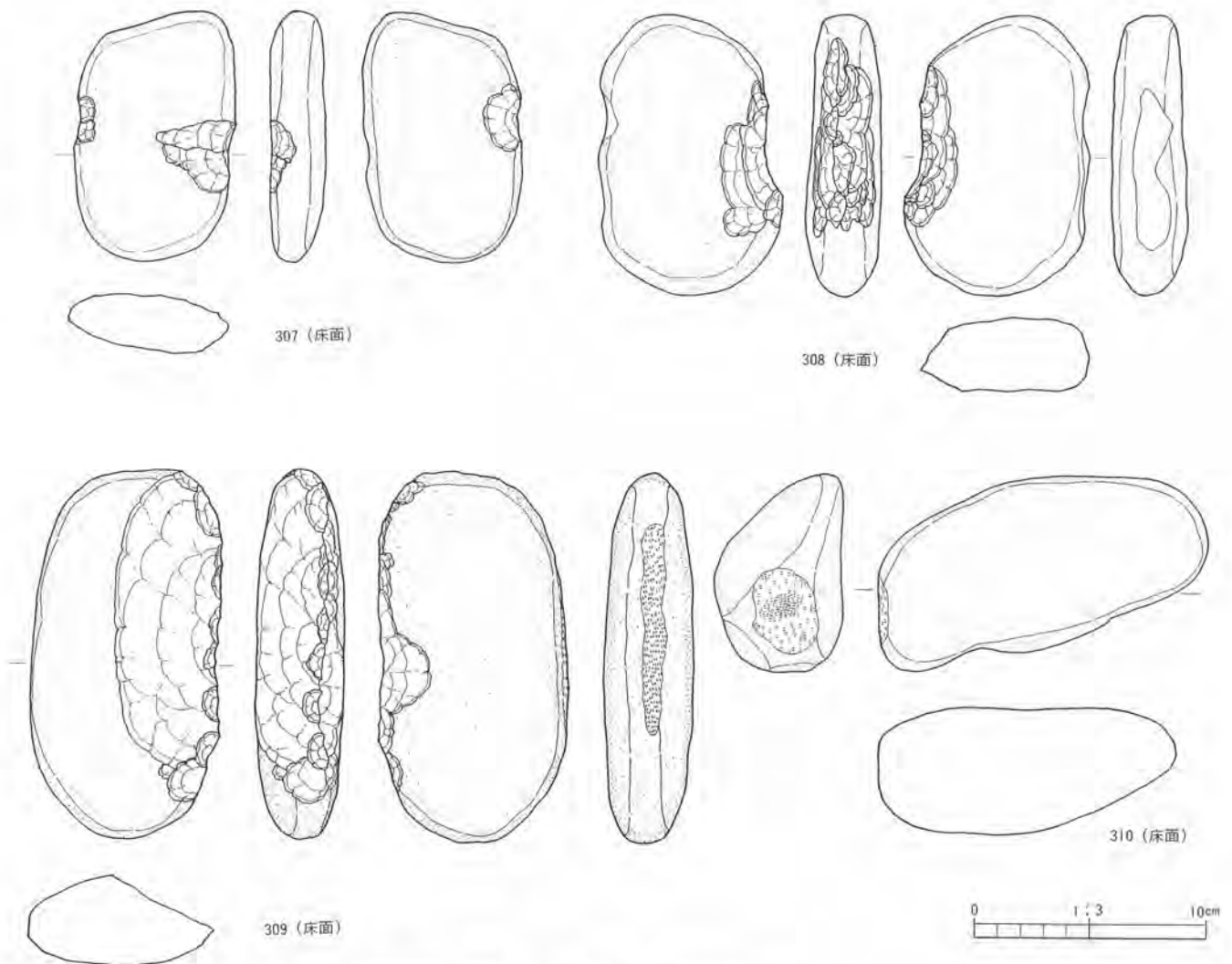
第24図 第1号竖穴住居跡出土石器⑧



第25図 第1号竖穴住居跡出土石器⑨



第26図 第1号竖穴住居跡出土石器⑩



第27図 第1号竪穴住居跡出土石器⑪

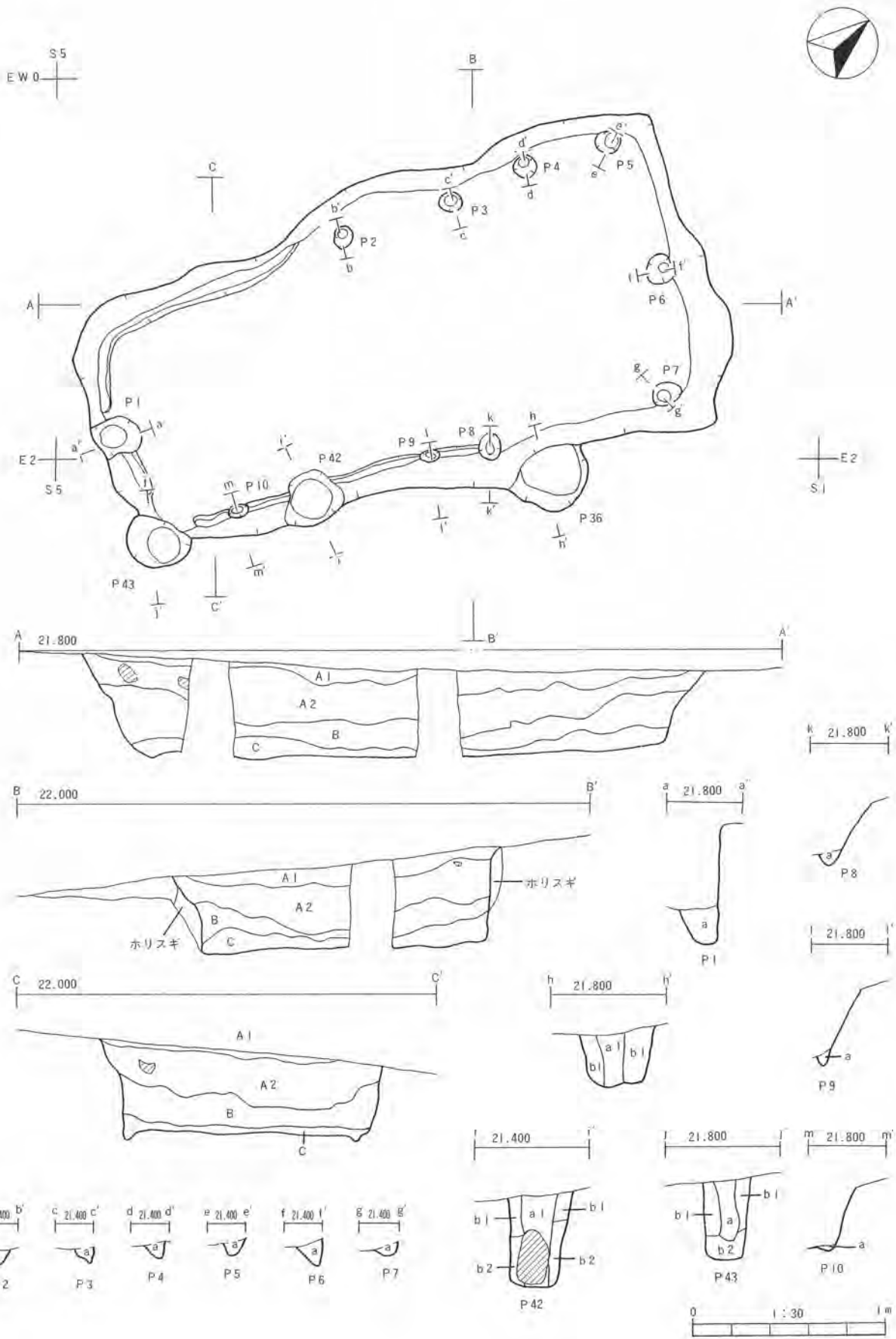
第2号竪穴住居跡

調査区のほぼ中央に検出した。第1号掘立柱建物跡の柱穴跡などのピットと重複しているが、**重複**
これらに切られる古い時期のものである。

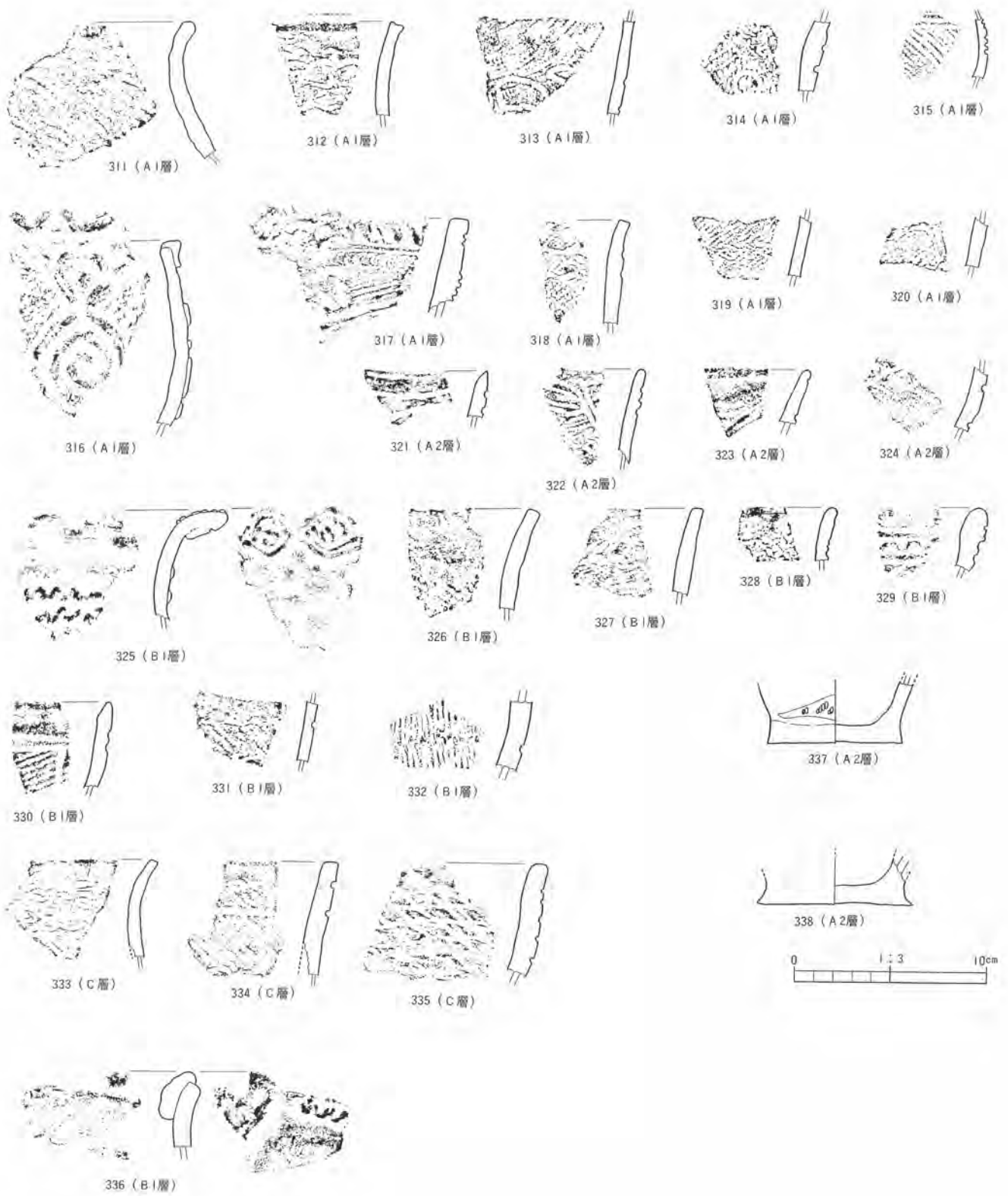
平面形はやや不整ながら長方形状を呈す。規模は長軸が3.3m、短軸が1.7m、検出面からの**平面形・規模**
深さ0.5mをはかる小規模な竪穴である。壁はほぼ直壁である。

埋土は3層に大別される。A層は竪穴上部から中位まで覆うもので2層に細分される。A1 **埋土**
層は暗褐色～黒褐色土を基本とし僅かに黄褐色土が粒状に混入する。非常に固く、しまっている。また、炭化物片が比較的少量に含まれる。A2層は暗褐色土を基本とし黄褐色土を塊～粒状に少量混入する。A1層同様固く、しまっている。炭化物片も含まれる。B層は竪穴の中位から下部を覆うもので、褐色土を基本とし黄褐色土を小塊状～粒状に多く混入する。固さ、しまりはA層ほどではないが固くしまっている。C層は黒色土に近い黒褐色土を基本とし少量ながら黄褐色土を混入する。固さ、しまりとも中程度である。

床面は地山面をそのまま使用しており、ほぼ平坦でたたくしまっている。また、床面の南側 **床面**
に半周するような浅い周溝が巡る。炉跡などの施設は確認できなかった。



第28図 第2号竪穴住居跡



第29図 第2号豎穴住居跡出土土器

柱穴

柱穴は壁際を巡るようにP1～P10を検出したが、いずれも小規模な小杭状のものである。遺物は各層より出土しているが、床面からは出土していない。

土器

第29図 311～338は土器だが、いずれも小破片で全体の器形が判明するものは出土しなかった。311、338はA2層から出土したものである。311は胴部が脹らむ器形となるもので、口縁部に横位の燃糸文圧痕文を施している。312は口縁部上面に沈線を施し、口縁部には不整燃糸文を施文する。313は縄文施文後に楕円形状の沈線文を施しているが、沈線は浅く無調整の雑なものである。314は棒状のもので円形の沈線文を施すもの。315は平行する沈線文で施文するもの。316は口縁部上面に蛇行する粘土紐を付し口縁部も粘土紐の張り付けで渦巻き状の文様などを施文している。317は山形口縁となるもので頂部には原体圧痕文を施し、沈線と刺突文で施文するもの。318は312と類似し口縁部に不整の燃糸文を施文する。319、320は同一個体片と思われる。321は沈線で、322は原体圧痕文で、323は隆沈線文が施文されるもの。324は網目状燃糸文が施文されるもの。以上がA層から出土したものであるが、321～323などは中期前半の大木7b式、316、317などはその前の大木7a式、それ以外のは大木7a式以前の前期に相当するものと思われる。

325～332、336はB層から出土したものである。325は口縁部が大きく外反するもので、細い粘土紐を小波状に横位に、また内面にも細い粘土紐を貼付している。326は内面に横方向の条痕がみられる縄文主体のものである。327は口縁上部に不整の燃糸文を施文するもの。328は横位に原体圧痕を施文するもの。329は口縁部が肥厚するもので平行する隆線間に小波状の隆線を施文する。330、331は原体圧痕文が施文される。332は胴部片。336は口縁部上端の内面に突起状の貼付と細い粘土紐を小波状に貼付するもの。以上のB層出土の土器は、325、336は前期の大木5式～6式に、326～331は中期の大木7a～7b式に伴うものと思われる。

333～335fC層から出土したものの。333はゆるやかに外反する口縁部に横位に不整の燃糸文を施文するもの。334は原体圧痕を施文するもの。335は網目状燃糸文が施文されるもの。

333、335は前期後半、334は中期の大木7式に伴うものである。

以上の土器から当竪穴住居跡は、床面出土の土器がなく断定できないが、前期の土器片も比較的多く出土しており、前期の後半～中期初頭までのいずれかに所属するものであると考えられる。

石器

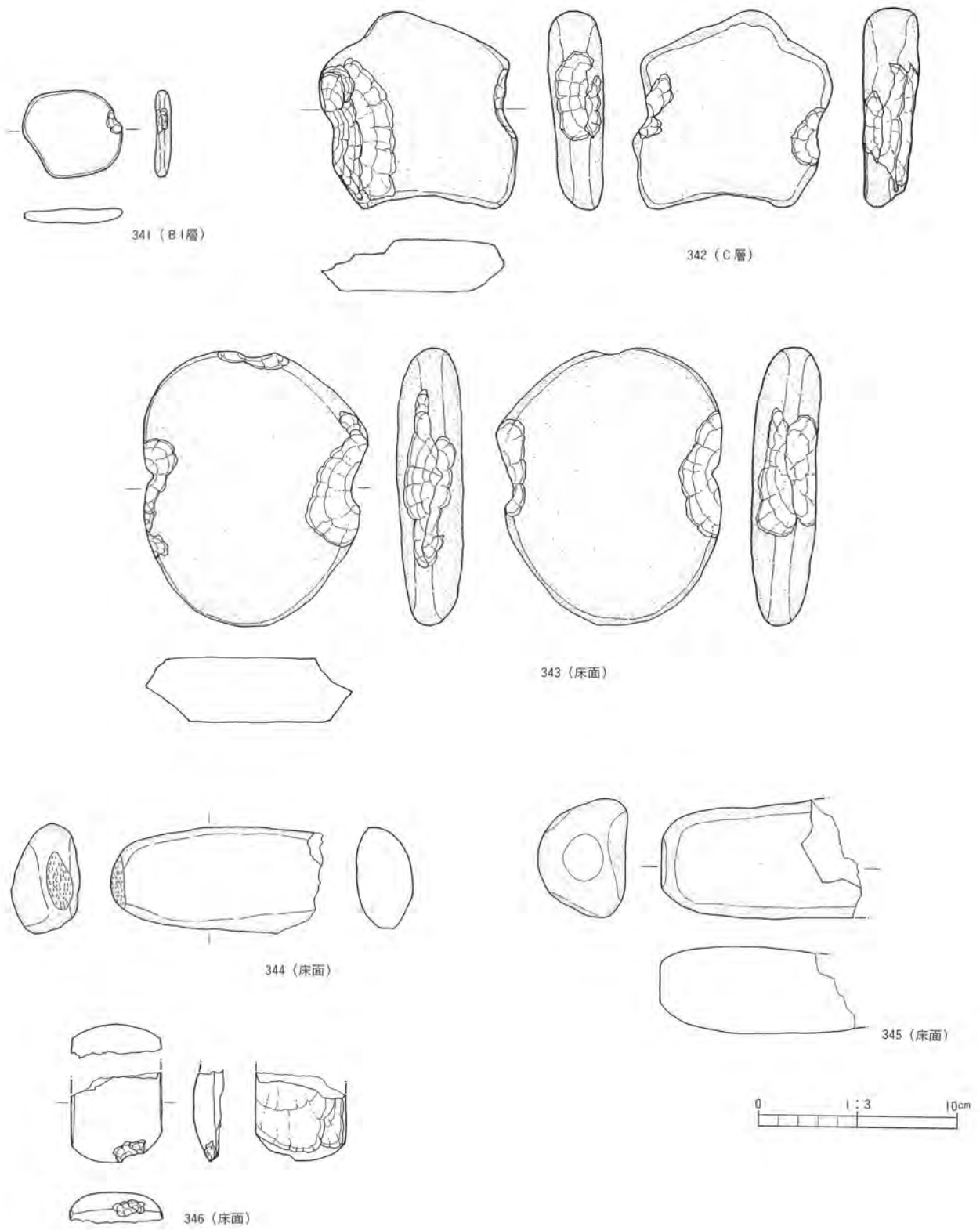
次に石器だが第31図339は不定形な剥片を使用した片面調整の削器である。裏面にバブルが残っている。第31図341、342は礫石器で、341は一方の側縁にだけ剥離を加えただけのもので342は両側縁に剥離を施したもので石錘である。



339 (第2号竪穴住居跡、B1層)

340 (第3号竪穴住居跡、層不明)

第30図 第2号竪穴住居跡出土石器



第31図 第2号竪穴住居跡及び第1号～第3号竪穴跡出土石器

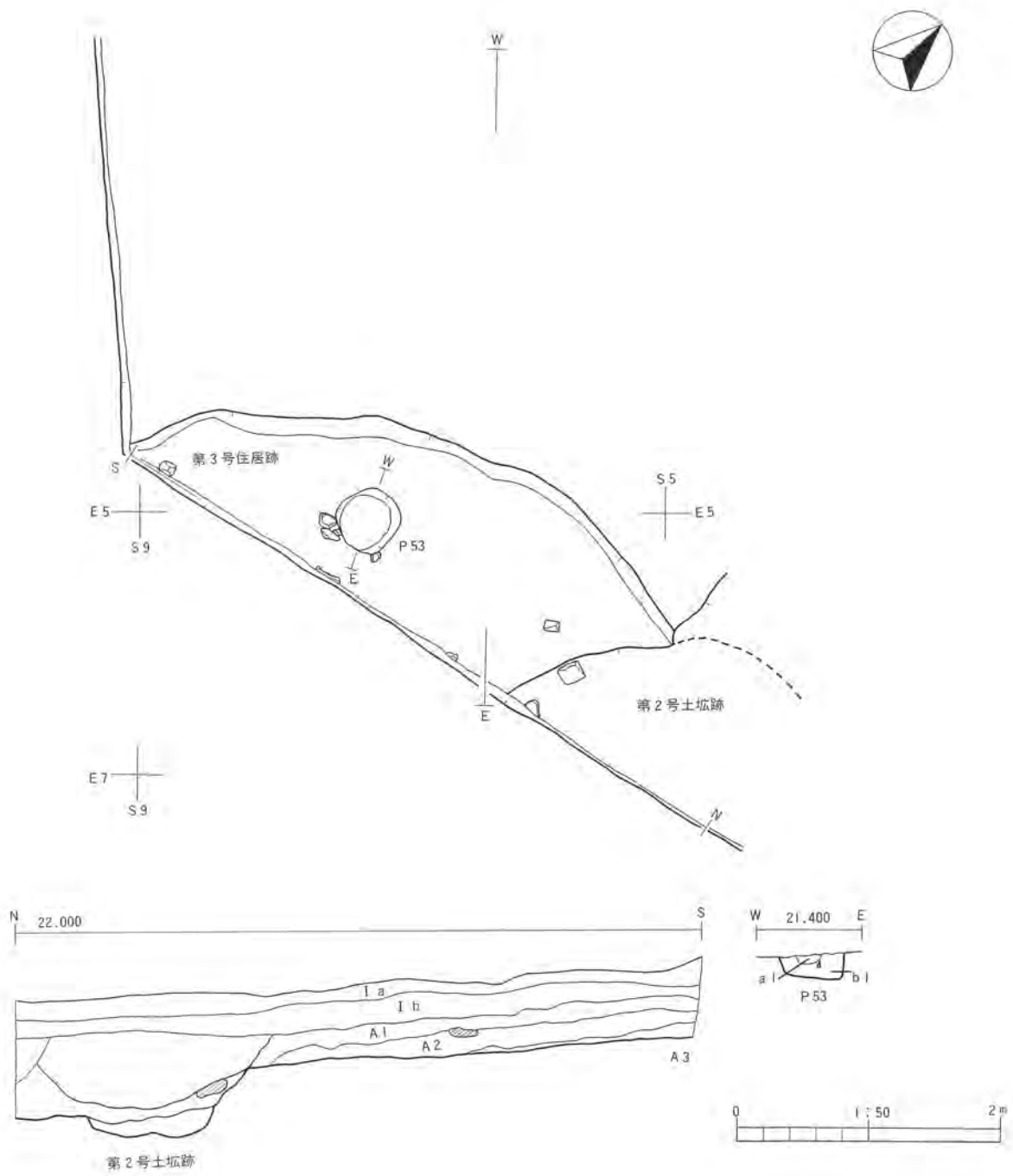
第3号竪穴住居跡（第32図）

- 重複** 調査区の南東端に西側の一部を検出ただけで大半は調査区外である。第1号竪穴住居跡と第2号土坑跡と重複しているが、どちらにも切られる古い時期のものである。
- 平面形** 平面形は大半が調査区外で不明だが、西側の一部から楕円形ないしは円形になるものと推測される。
- 埋土** 埋土は1層からなり更に3層に細分された。いずれも褐色土を基本とし暗褐色土や黄褐色土の混入の割合などからA1～A3層に細分される。A1層は暗褐色土の割合が、A2層は黄褐色土の割合が高い。いずれも固さはあるが、しまりは中程度である。
- 床面** 床面は地山面をそのまま使用しており、北側に若干傾斜している平坦面である。炉跡などの施設は確認できなかった。床面上で直径が0.5mをはかるピットを1個検出したが、柱穴になるものではない。
- 土器** 遺物は土器・石器が出土しているが、量は少ない。
土器は、第33図357～359が第3号竪穴住居跡埋土から出土したものである。357は埋土上部から出土したもので、口縁部上端に液状に粘土紐を貼付し屈曲する口縁部は無文となるもので中期前半の大木7b～8a式にともなうものか。358は口縁下部から胴部にかけての破片で口縁下部が無文となる。359は胎土中に植物繊維を含むもので、約束する羽状縄文を施文するもので前期初頭～前半に伴う。
- 石器** 石器は、第31図340の1点が出土している。縦長の無柄凹基の石鏃だが抉入は浅い。裏面の基部付近に大きく1次剥離面を残している。
第1号竪穴住居跡に切られていることから、中期初頭の大木7式以前の遺構と思われる。

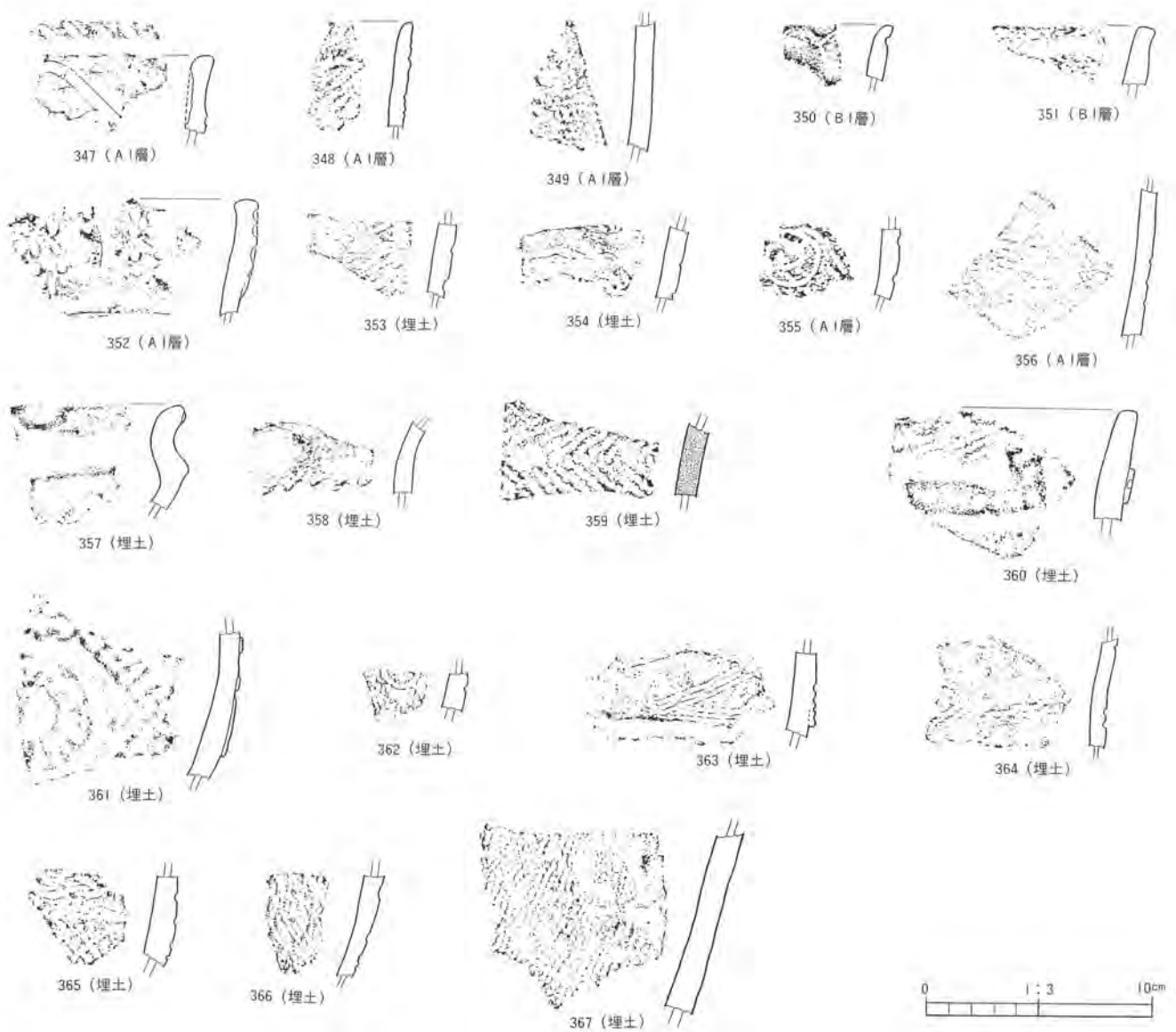
第1号竪穴跡（第34図）

竪穴跡としたのは、竪穴住居跡のように床面にピットや柱穴、周溝、炉などの施設が何も確認できなかった竪穴状の落ちこみを竪穴跡とした。

- 重複** 第1号竪穴住居跡の西に位置する。第1号土坑跡と重複するが、これよりも新しい時期のものである。
- 平面形** 平面形は不整な楕円形上を呈す。規模は長軸が2.05m、短軸が1.75m、深さ0.2mをはかる。
- 埋土** 埋土は1層からなり更に2層に細分される。A1層は褐色土を基本とし僅かに黄褐色土を塊～粒状に混入する。固さ、しまりとも欠く。A2層は暗褐色土を基本とし黒褐色土と黄褐色土を少量混入する。やはり固さ、しまりを欠く。
- 床面** 床面は地山面で固くしまっている。床面上に小杭状のP1、P2を検出したが、埋土がI層の表土と同じで、当竪穴跡に伴うものではない攪乱穴の可能性が高い。
遺物は少量ながら土器・石器が出土している。
- 土器** 土器は、第33図347～349が当竪穴跡埋土から出土したものである。347は口縁部上面に刻目を施し、口縁部には沈線を施している。348、349は縄文主体のものである。
- 石器** 石器は、第31図343の礫石器が1点だけ出土している。楕円形の扁平礫の両側縁を剥離した石錘である。



第32図 第3号竖穴住居跡



第33図 第3号竖穴住居跡及び第1号～3号竖穴跡出土土器

第2号竖穴跡（第34図）

- 重複** 第1号竖穴住居跡の西に重複して位置する。これよりも古い時期のものである。
- 平面形** 平面形は重複により切られ半分程度が不明であるが、楕円形状を呈すものと考えられる。
- 埋土** 埋土は1層からなる。褐色に近い暗褐色土を基本とし、比較的多く黄褐色土を塊～粒状に混入する。固さ、しまりはともに欠く。
- 床面** 床面は地山面で固くしまっている。
遺物は少量ながら土器が出土している。
- 土器** 第33図352～356が当竖穴跡埋土から出土したものである。352は波状口縁となるもので、口縁部が肥厚する。口縁部には縦位に刺突列を施している。353、354、356は捺糸文、357は隆沈線で渦巻き状の文様を施文するものである。

第1号土坑跡（第34図）

第1号竪穴跡の北壁で重複して位置する。第1号竪穴跡に切られる古い時期のものである。

平面形は楕円形を呈するものと思われる。深さ0.1mと浅いものである。

埋土は1層からなる。黒土に近い黒褐色土を基本とし黄褐色土を粒状に僅かに混入する。やわらかく、しまりは中程度である。若干の炭化物を含んでいる。

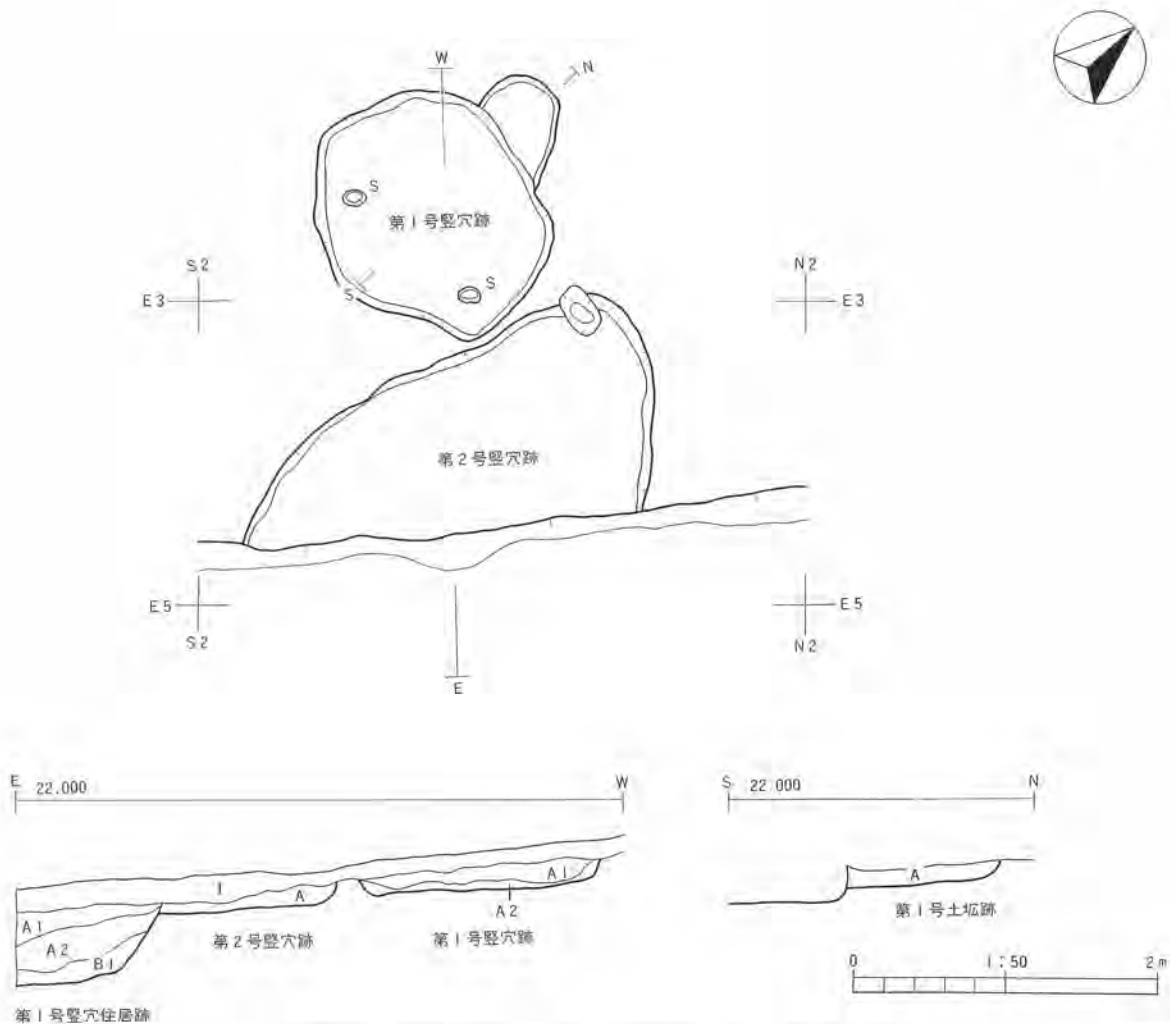
底面は地山面のままでほぼ平坦である。

遺物は埋土中より土器片が数点出土している。第31図350、351である。350は浅い沈線を施すもの。351は口縁部上端から縄文を施文するものである。

第3号竪穴跡（第35図）

第1号竪穴住居跡の北東部に重複して位置する。第3号土坑跡、第4号土坑跡とも重複しているが、第1号竪穴住居跡と第4号土坑跡には切られない古い時期のものだが第3号土坑跡を切る新しい時期のものである。調査期間の関係上、現状保存される北側部分については発掘せずそのまま埋め戻した（更に北側で他の遺構と重複している可能性があったため。）

平面形は楕円から円形状になるものと推測される。規模などは不明である。



第34図 第1号、2号竪穴跡と第1号土坑跡

埋土

埋土は2層からなる。A層はやや粘性のある黒褐色土を基本とする。固さ、しまりともに中程度である。B層は2層に細分され、B1層は暗褐色土を基本とし僅かに黄褐色土を粒状に混入する。やや固く、しまっている。B2層は暗褐色土～褐色土を基本とし黄褐色土を塊～粒状に混入する。固さ、しまりとも中程度である。

床面

床面は地山面をそのまま使用しているが、北側の方では地山面ではなくやや黒っぽい土がひろがり、他の遺構が存在しそうである。炉跡、柱穴などは確認されなかった。

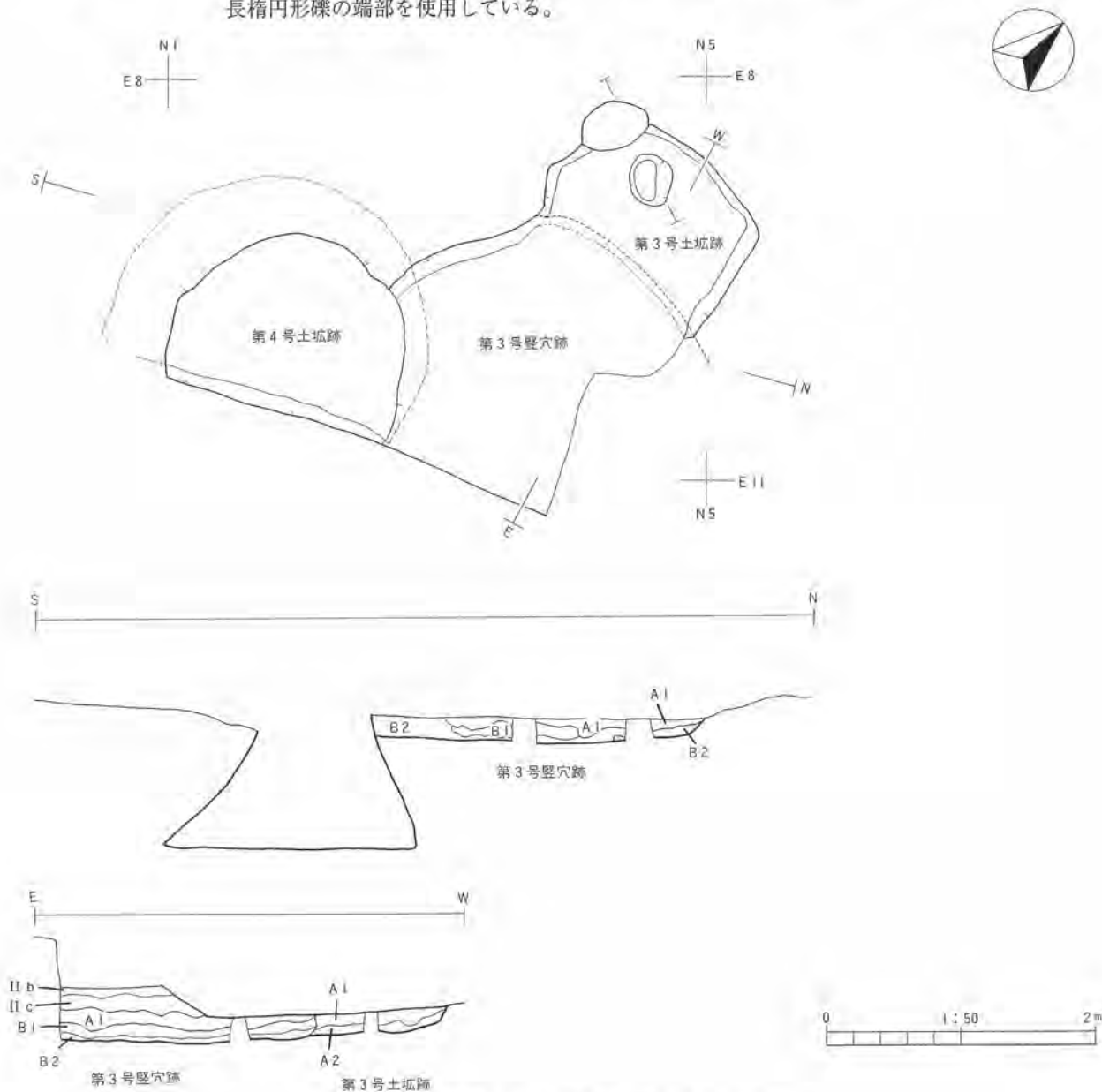
遺物は埋土中より土器・石器が出土している。

土器

土器は第33図360～367までが当遺構から出土したものである。360は刺突を伴う太い粘土紐を貼付し文様を構成するもの。362は細い粘土紐を格子状に貼付し1本の隆帯として円形文などを構成するもので、大木6～7a式に伴うものと思われる。362、363は沈線で文様を描くもの。364、365は不整然糸文、366は網目状然糸文、367は縄文施文のものである。

石器

石器は礫石器が2点出土している。第31図、344、345で敲石、345は磨石である。どちらも長楕円形礫の端部を使用している。



第35図 第3号竖穴跡と第3号土坑跡

第3号土坑跡（第35図）

第1号竪穴住居跡の北東部に重複して位置する。第3号竪穴跡とも重複しているが、第1号竪穴住居跡と第3号竪穴跡のどちらにも切られる古い時期のものである。

平面形は方形から楕円形状になるものと推測される。規模などは不明である。

埋土は1層からなり更に2層に細分された。A1層は黒褐色土を基本とし暗褐色土や黄褐色土を僅かに混入する。固さ、しまりともに中程度である。A2層は暗褐色土を基本とし黄褐色土を塊～粒状に混入する。固さ、しまりともに中程度である。

底面は地山面をそのまま使用している平坦面である。

遺物は出土しなかった。

第2号土坑跡（第36図）

第1号竪穴住居跡の南壁に重複して位置する。第1号竪穴住居跡よりも新しい時期のものである。当初は重複しているのがわからず、断面の観察によりその存在を確認したものである。

平面形は半分弱が調査区外だが、ほぼ楕円形状を呈するものである。推定で長軸が2.5m、短軸が1.4m、深さが0.5mをはかる。

埋土は2層からなる。A層は黒褐色に近い土を基本とする。固く、しまりは中程度で、第36図のようなⅠ、Ⅱ期の集礫状況がみられた。Ⅰ、Ⅱ期の集礫から2分されたかもしれない。B層は黒色に近い黒褐色土を基本とする。やや固さに欠け、しまりも中程度である。第36図のようなⅢ期の集礫状況がみられた。これらのⅠ～Ⅲ期の集礫は明かに人為的なもので、Ⅰ期では人頭大の角礫も混入しているが、Ⅲ期の底面ではほとんどが扁平な楕円形礫だけである。（写真図版8～9）

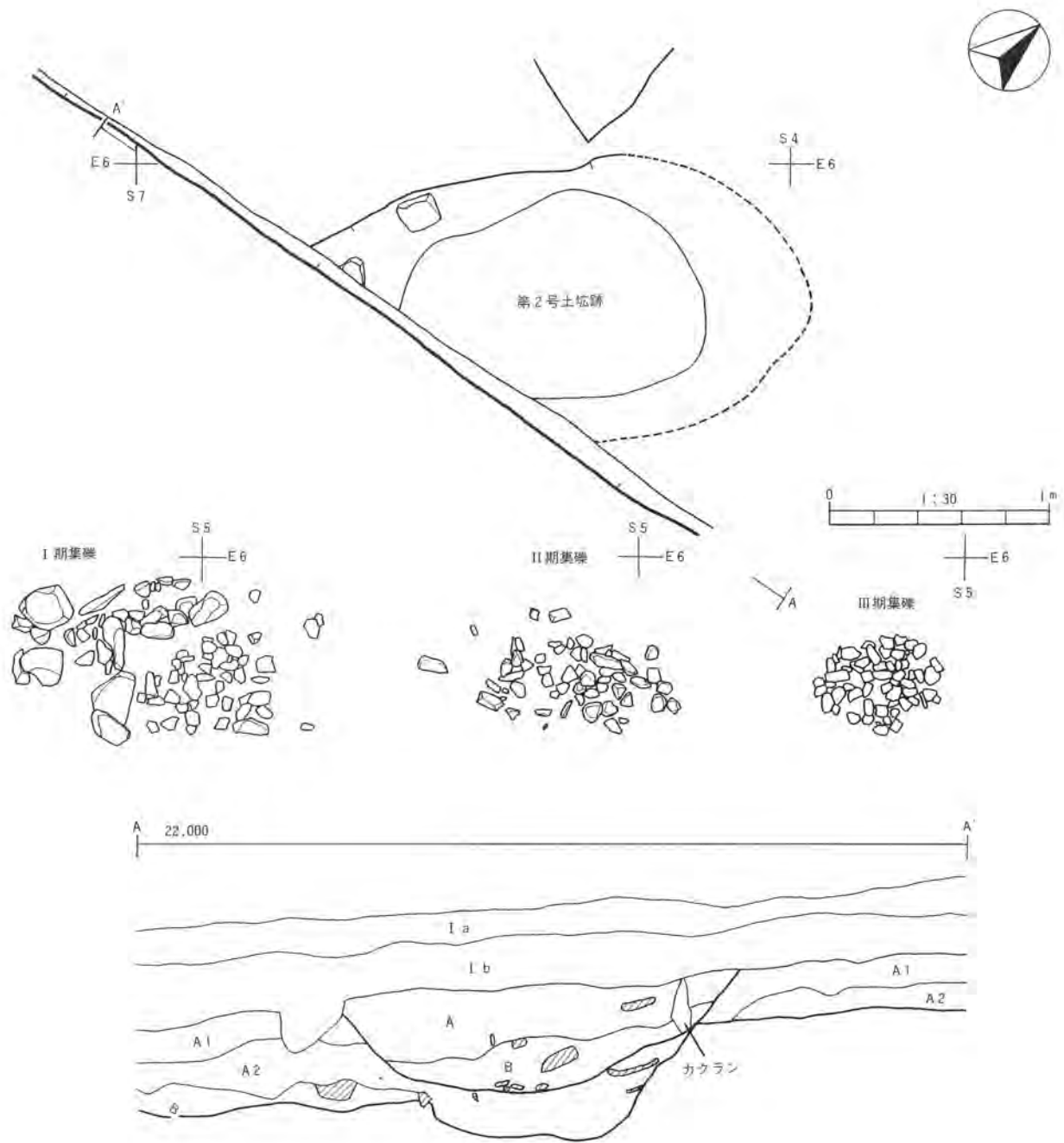
遺物は埋土中から土器・石器が出土している。

第37図368～382が土器である。368は隆線と山形状沈線で施文するもの。369大波状口縁となるもので沈線が施文されている。370、371は頂部にの字状、円形文を施文するもの。372～374は沈線で施文されるもの。375は原体圧痕文を施文するもの。376は沈線と円形刺突で文様を構成する。378は口縁部が内湾するもので隆起する突起から隆沈線で文様を構成するもの。379も口縁部が内湾するもので上下に沈線を施すもの。380は口縁部下部から頸部にかけての破片で、口縁部には隆線で明瞭な楕円形の区画文を施文するもので頸部は無文となる。381、382は底部片で縄文のみの施文である。これらの内371、378～380などは中期中葉の大木8a～8b式期にそれ以外のものは中期前半の大木7a～7b式に伴うものである。

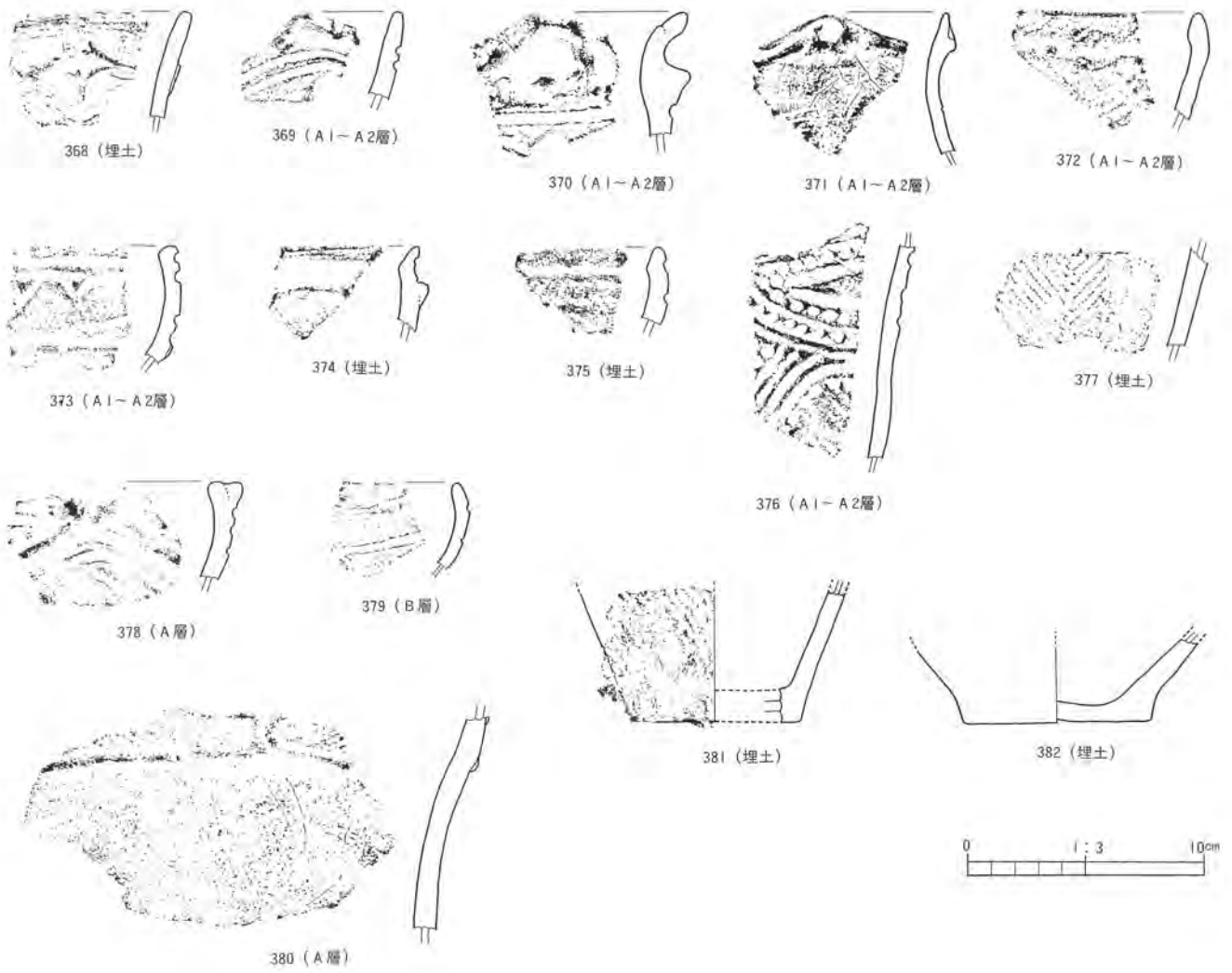
石器は第38図383～391までだが、すべて礫石器である。堆積していたほとんどの礫は使用痕の無い自然礫でそのなかにこれらの石器が混じっていた。383は敲打痕跡の認められる敲石と敲打磨面の認められる敲打磨石である。384～387は側縁部及び表裏面に敲打痕が認められる敲石である。388、389は一部に磨面が認められる磨石である。磨面は平坦面となっている。

390は表裏面ともに側縁部だけに剥離調整を加えただけの打製石斧と思われるものである。

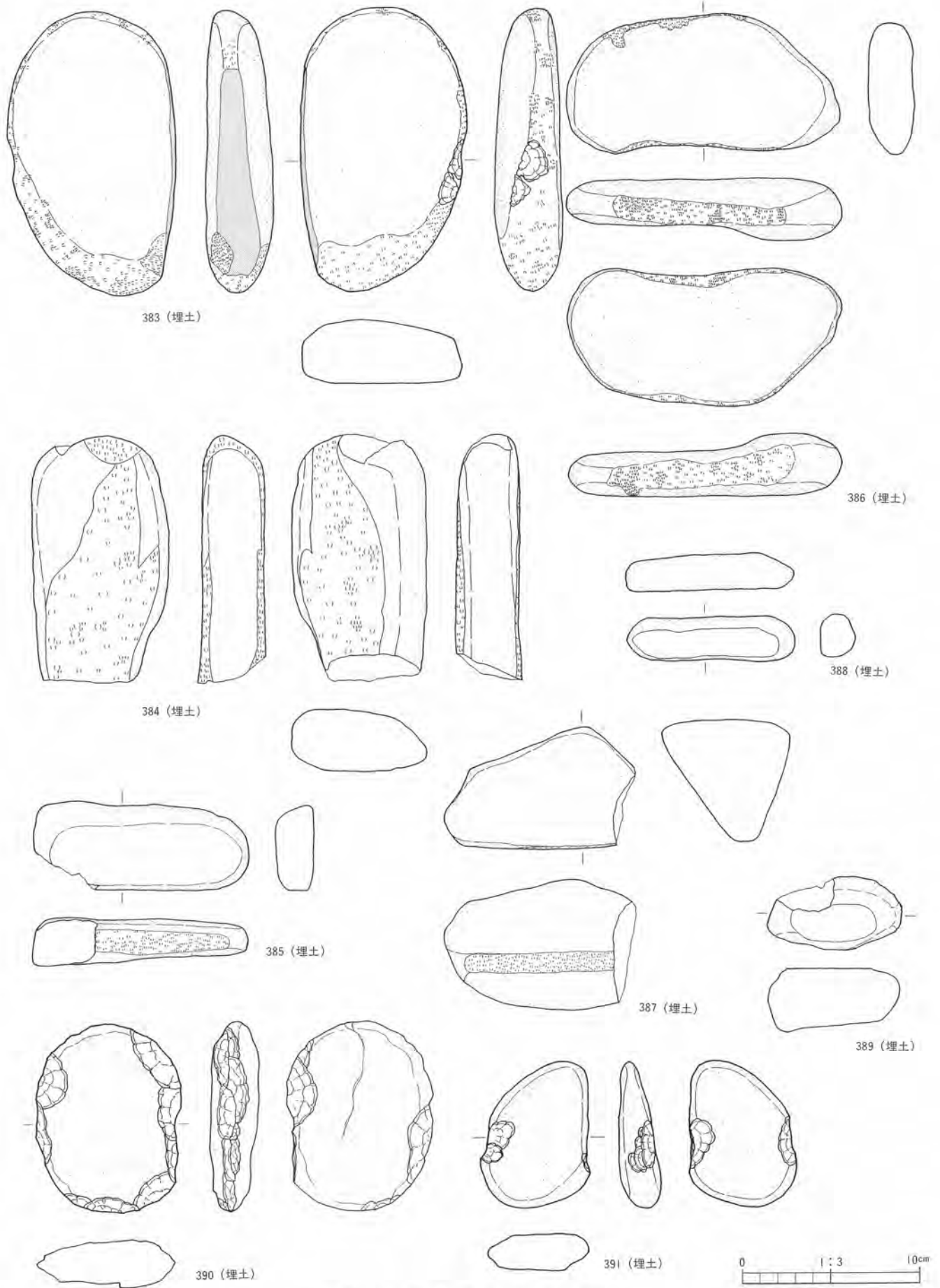
391は不製の楕円形の扁平礫の側縁部中央に剥離をした石錘である。



第36図 第2号土坑跡



第37図 第2号土坑跡出土土器



第38图 第2号土坑出土石器

第4号土坑跡（第39図）

第1号竪穴住居跡の北東部に重複して位置するフラスコピットである。第3号竪穴跡とも重複しているが、第1号竪穴住居跡より古く、第3号竪穴跡よりは新しい時期のものである。更に、南側で第1号竪穴住居跡と当土坑跡より古い遺構（未調査）が調査区外にひろがっている。

平面形は全体の半分が調査区外であるが、開口部、底面ともほぼ円形状になるものと推測される。規模は開口部で直径1.7m、底面で直径2.3m、深さ1.0mをはかる。

埋土は3層からなる。A層は開口部から上部を覆うもので、3層に細分された。A1層は褐色土を基本とし黒褐色土を小塊状に混入する。固さは中程度だが、しまっている。A2層も褐色土を基本とするが焼土の塊や黒褐色土を塊状に混入する。比較的固く、しまっている。A3層はやや暗い褐色土を基本とし少量の黄褐色土を粒状に混入する。固さは中程度だが、しまっている。B層は壁際や土坑中位にかけて堆積するもので、6層に細分された。B1層は黒色土に近い黒褐色土を基本とし灰白色の火山灰（安家火山灰）を大塊状に混入する。固さ、しまりとも中程度である。B2層は褐色～暗褐色土を基本とし黄褐色土塊を多量に混入する。固く、しまりは中程度である。B3層は暗褐色土を基本とし黄褐色土を塊～粒状に少量混入する。固さ、しまりとも中程度である。B4層も暗褐色土を基本とし僅かに黄褐色土を粒状に混入する。固く、しまっている。B5層はやや粘性のある暗褐色～褐色土を基本とし黄褐色土塊を比較的多く混入する。固く、しまっている。B6層は褐色土を基本とし黄褐色土塊を多量に混入する。固く、しまりは中程度である。C層は下位から底面を覆うもので、3層に細分される。C1層はやや粘性のある黒褐色土を基本とし黄褐色土塊を比較的多く混入する。また、炭化物片が含まれている。固く、しまっている。C2層もやや粘性のある暗褐色～褐色土を基本とし黄褐色土塊を少量混入する。やはり炭化物片を含む。固く、しまっている。C3層もやや粘性のある褐色土を基本とし黄褐色土を極く僅か混入する。やはり炭化物片を含む。固さ、しまりは中程度である。以上の土層のうちC層以外は2次的に動かされていると思われる。

壁は南側の方が約45度くらいにだらだらと立ち上がるが、それが北側の方へ巡るに従い直壁気味となってくる。

底面は地山の平坦地で、ピットなどは確認されなかった。

遺物は埋土中から土器片を中心に出土しているが少量である。

土器は第40図392～414が当土坑跡から出土したものである。

392～398はA1層、A2層から出土したものである。392は口縁部上端がひさし状に突出するもので不整撚糸文を施文する。393は大波状口縁となるもので口縁上端から木目状撚糸文を施文するもので、内外面に炭化物が付着している。394は口縁部上端が僅かに外反するもので口縁直下から縄文を施文する。395は縦位に短沈線を施文するもの。396は原体圧痕文で施文するもの。397は異なる原体の縄文を施文している。398は上下を沈線で区画し斜位に短沈線を交互に施文するもの。

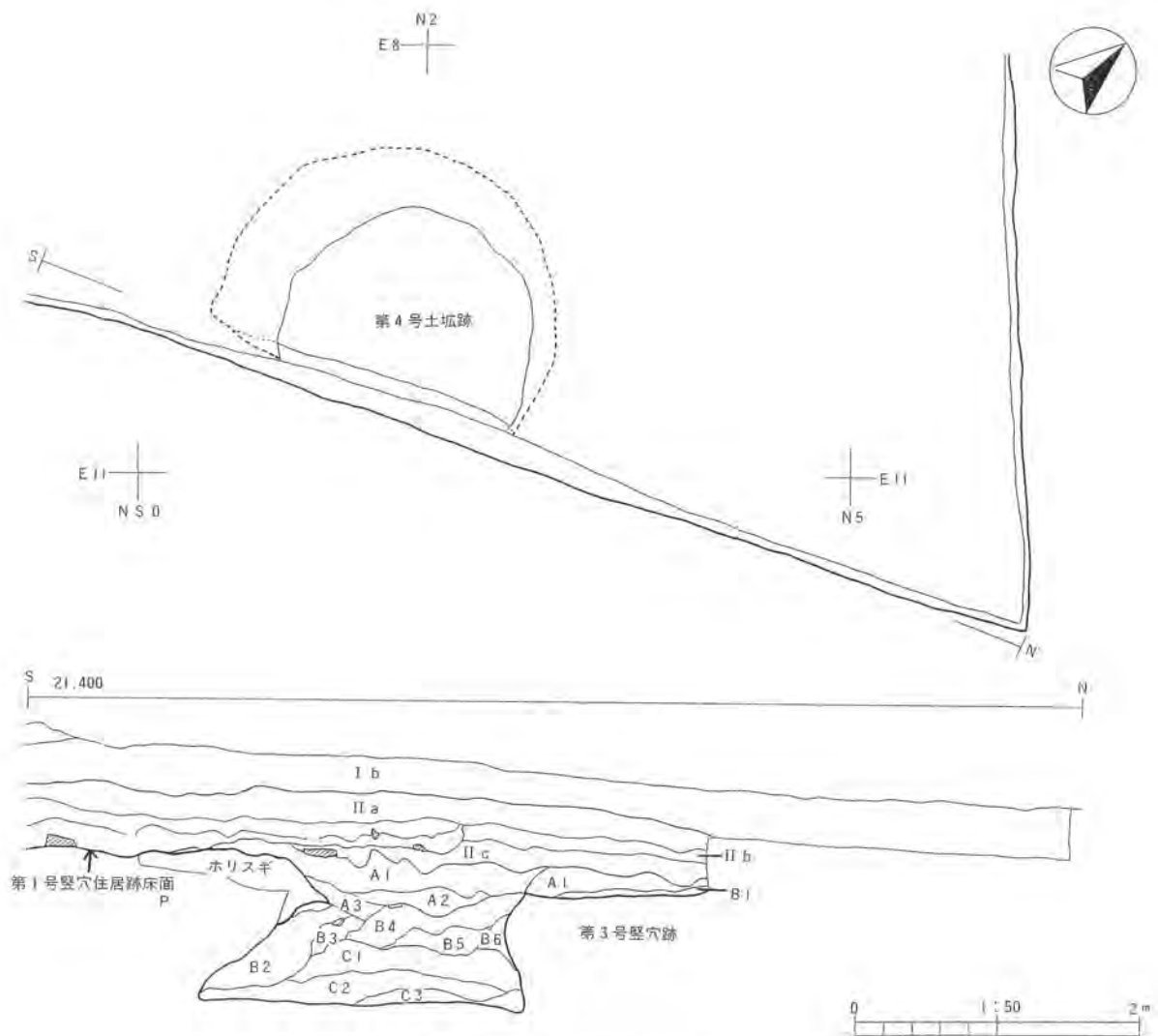
399～402、406は下層から出土したものである。399～401は口縁部に不整撚糸文を施文するもの。402は網目状撚糸文を施文するもの。406は刻目を施したブリッチ状の小突起を貼付し矢羽根状の沈線が施文されるもの。

403～405、407～410は埋土中（層位不明）から出土したものである。403は口縁部上面に蛇行する粘土紐の突起を貼付し口縁部は無文である。404は口縁部上部に2本の刻目を施した隆線を巡らせるもの。405、407は口縁上部を肥厚させており、その直下より細沈線で文様を描くもの。408は口縁部が内湾するもので隆沈線で渦巻文を施文する。410は沈線が施文された胴部片である。

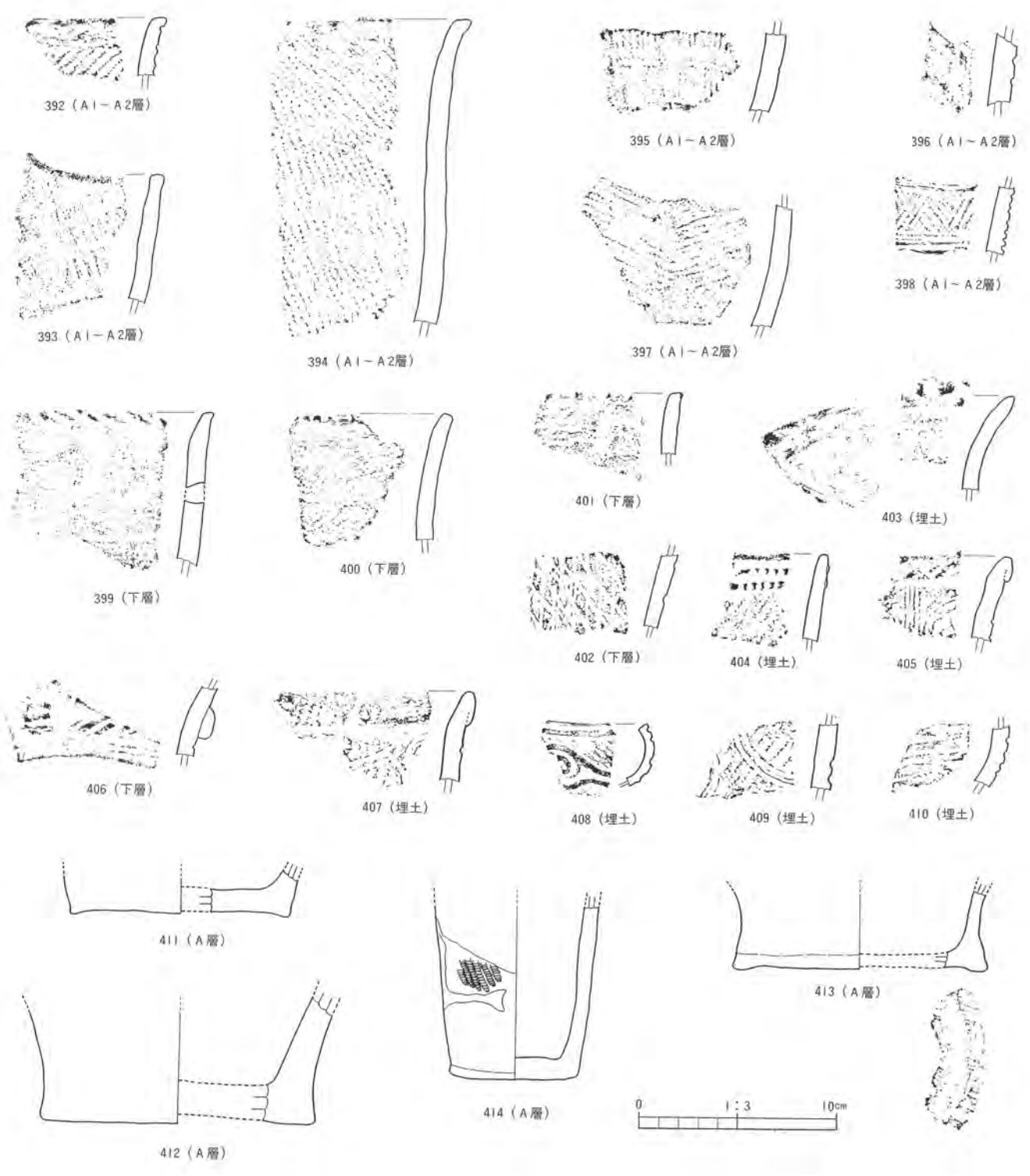
411～414は胴部から底部にかけての破片である。いずれもA層から出土したもので、413の底面には縄文が施文されている。

以上の土器は中期の大木8式に伴う408を除き中期初頭の大木7 a 式ないしはそれ以前のものに伴うと思われる。

次に石器だが、第41図415と416の石鎌が2点と第31図346の磨製石斧が出土している。415の石鎌は一方の側縁部が縦に大きく剥離（破損？）している。416は抉入の深い凹基となるもので先端部を欠く。346は刃部のみを残す磨製石斧で裏面も大きく欠いている。



第39図 第4号土壇跡



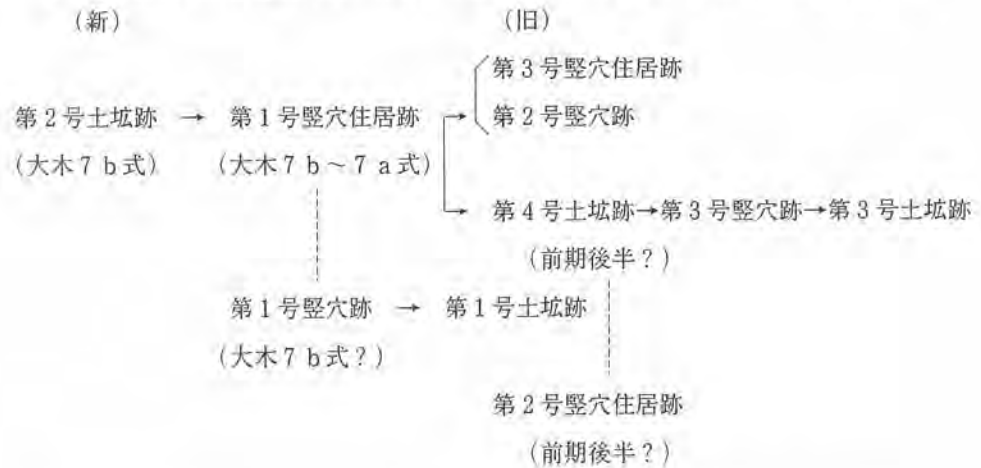
第40図 第4号土坑跡出土土器



第41図 第4号土坑跡出土石器

以上が、縄文時代に所属する遺構・遺物であるが、狭い範囲に重複して存在しておりここで遺構の重複関係について少し整理しておく。

遺構の新旧関係は、遺構同士の切合いや土器群の様相などから次のとおりとなる。



直接重複しているものはその切り合い関係により明確に把握されるが、それ以外のものは土器群の様相から第1号堅穴住居跡に並行ないしはそれ以前の前期にまでさかのぼる可能性が考えられる。

この中でポイントとなるのは、IV章の調査のまとめの項で詳述するが、その年代が明らかな安家火山灰(約5500年前の縄文時代前期末頃)である。第4号土坑跡の開口部に近いところに二次的に動かされた再堆積の状態であることと、中期初頭の大木7式に伴う第1号堅穴住居跡に切られているということから、この第4号土坑跡は中期初頭以前の前期に伴うものと考えられる。また、第2号堅穴住居跡はその形態や前期の土器を比較的多く出土しており、本文中では前期後半から中期初頭までの幅ひろく考えると記したが、前期後半から末くらいまでと考えたい。ただし、第2号堅穴住居跡と第4号土坑跡がセット関係にあるのかまでは言及できない。

以上のことから、今回の調査内では前期後半から中期初頭、前半までの遺構群と位置づけた

B 縄文時代以降の遺構・遺物

縄文時代の遺構と重複し、それらより新しい時期の遺構として確認されたのは第1号掘立柱建物跡だけであった。この時期については柱穴跡からの出土遺物が皆無であるので不明であった。このことについては最後の考察とまとめの項で触れたい。また、この建物跡以外にも多数の柱穴跡や小ピットを検出したが、建物跡としては確認できなかった。それらについては次項で記述する。

第1号掘立柱建物跡（第42図）

縄文時代の第2号竪穴住居跡を取り囲むように位置する。当初はこの第2号竪穴住居跡に伴うものかと考えたが、P38、P40が完全に第2号竪穴住居跡の壁を切っておりこれよりも新しい時期のものである。

建物は東西列3間で約4.55m（15尺）、南北列2間だが、北西隅の柱穴P57が柱列からはずれているが、約3.30m（11尺）をはかる。

柱間寸法は西側でP59、P56間が1.55m（5尺）、P56、P21間が1.60m（5尺）、P21、P57間が1.50m（5尺）をはかる。東側でP54、P43間が1.55m（5尺）、P43、P40間が1.55m（5尺）、P40、P37間が1.55m（5尺）をはかる。南側でP59、P48間が1.80m（6尺）、P48、P54間が1.50m（5尺）をはかる。北側でP37、P38間が1.35m（4.5尺）、P38、P57間が現状で1.55m（5尺）をはかる。現状では北側柱列が南側列に対して約0.40m（1.5尺）短い。

柱間寸法

柱痕跡はすべての柱穴で確認され、柔らかくしまりのない黒褐色土で掘り方内には暗褐色土～褐色土が堆積している。

柱穴

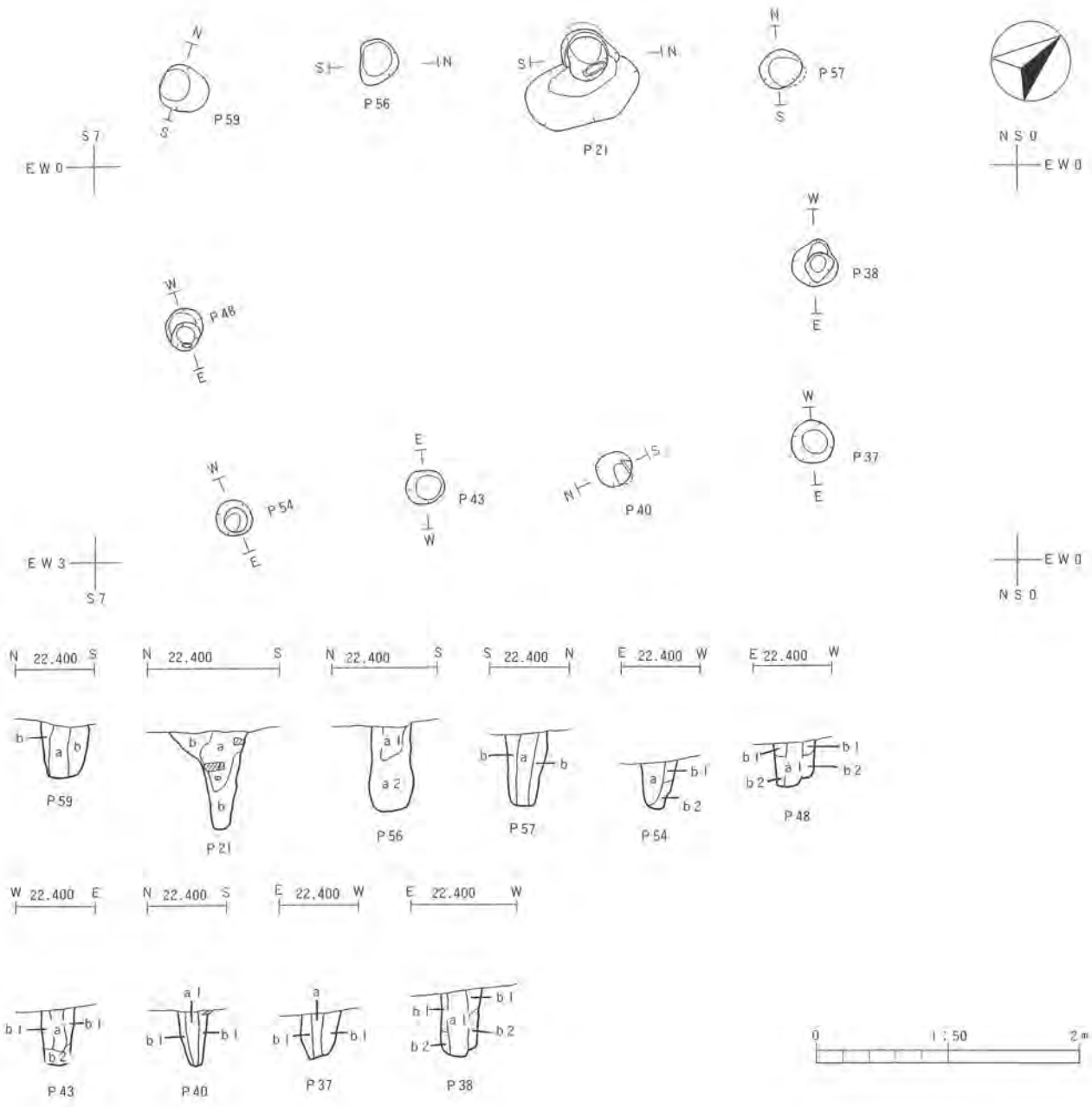
遺物はP48などから縄文土器片が1、2点出土しているが、いずれも縄文のみのものである。この掘立柱建物跡の所属時期については、最後の第IV章の調査のまとめで検討したい。

その他調査区内のピット（第6図、第43図）

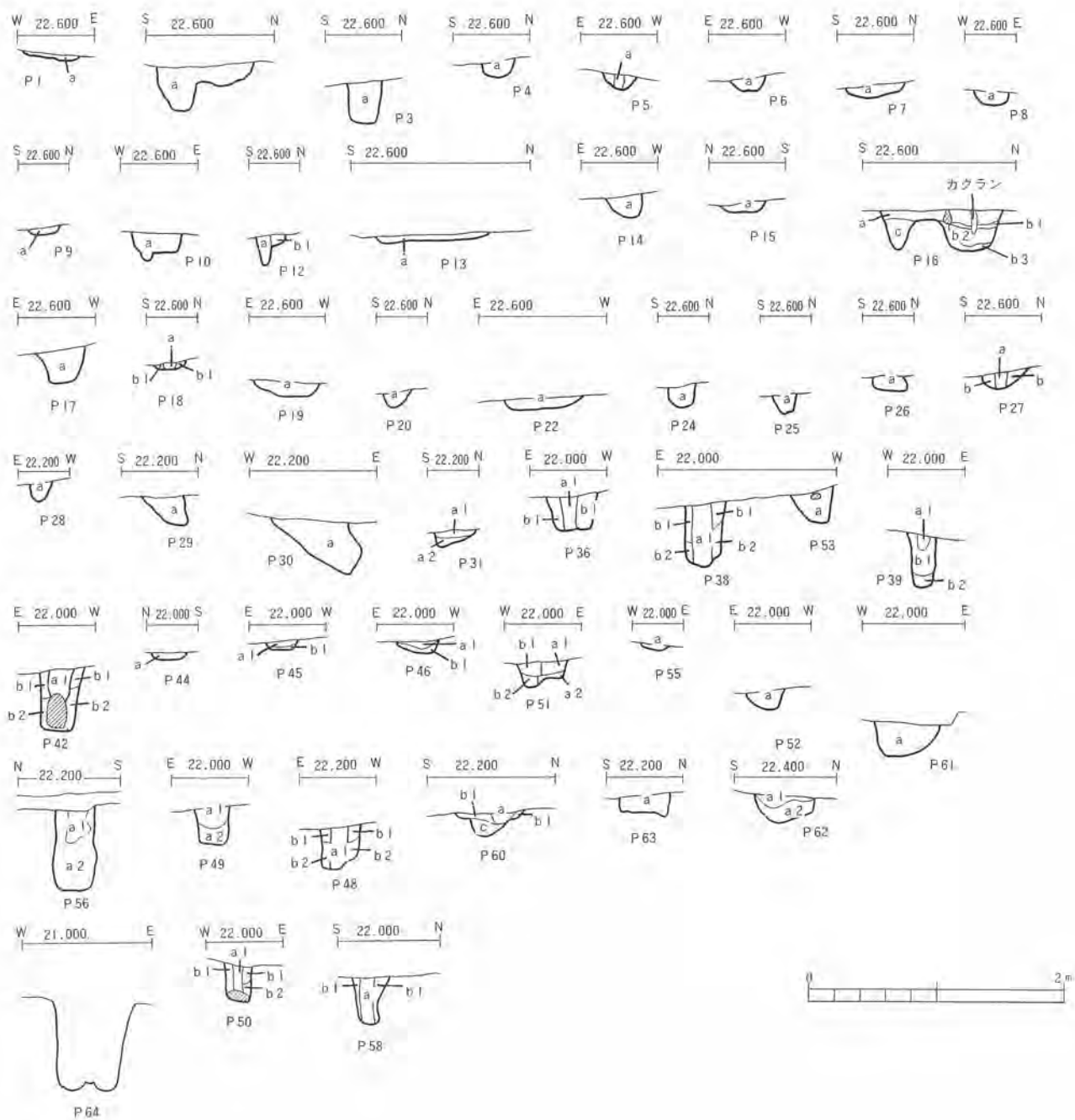
今回の調査区内では大小、深浅を含め遺構に伴わない柱穴跡、小土坑跡、小ピットを多数検出したが、中には攪乱穴と思われるものもあるが、逆に明瞭な柱痕跡が確認され掘立柱建物跡の柱穴として遜色のないものもある。形状、規模などの一覧表により詳細は割愛する。

遺物は幾つかのピットから出土しており第44図に一括した。個々の詳述は行わず特徴的なものを中心に記述する。417はP4から出土したもので、指頭圧痕を施した太い隆帯を巡らせるもの。425はP21出土で、沈線による楕円形の区画文を構成するもの。427、428、434は細い粘土紐を貼付するもの。438は口縁部内面に細い粘土紐の貼付により文様を施文している。

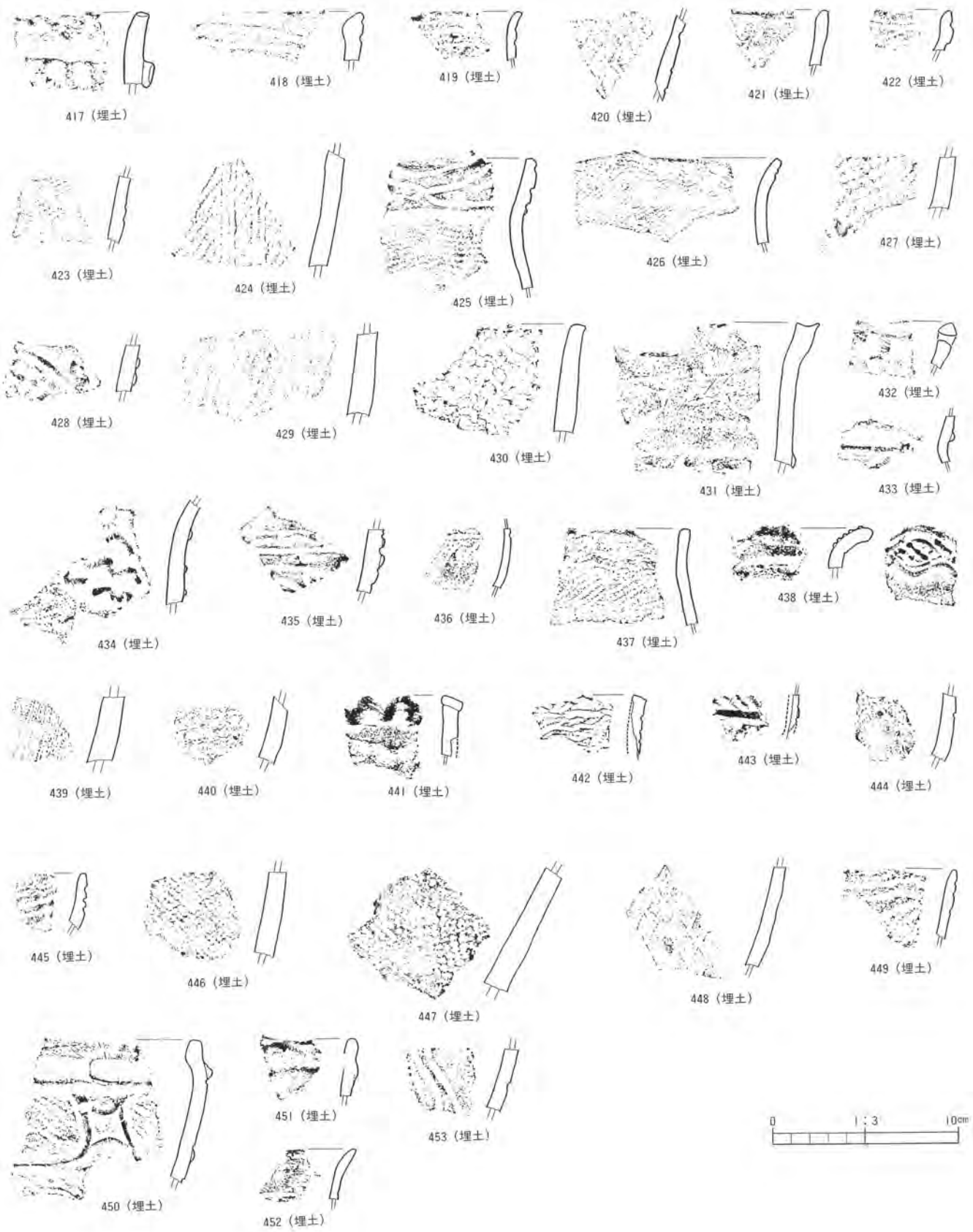
445、449は原体圧痕により文様を描くもの。450は隆沈線により文様を構成するものである。



第42図 第1号掘立柱建物跡



第43図 その他調査区内のピット断面図



第44図 その他調査区内のピット出土土器

遺構番号	形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	遺物
P 1	楕円形	0.50	0.35	0.04	第44図417
P 2	〃	0.72	0.50	0.34	
P 3	円形	0.28	0.28	0.33	
P 4	〃	0.30	0.30	0.14	
P 5	〃	0.27	0.26	0.10	
P 6	〃	0.32	0.32	0.10	
P 7	楕円形	0.50	0.46	0.10	
P 8	楕円形	0.30	0.30	0.10	
P 9	楕円形	0.25	0.22	0.05	
P10	〃	0.35	0.31	0.20	
P12	〃	0.25	0.20	0.22	
P13	〃	0.90	0.66	0.04	
P14	〃	0.30	0.25	0.18	
P15	〃	0.36	0.31	0.10	
P16	〃	0.98	0.70	0.32	
P17	円形	0.38	0.38	0.29	
P18	〃	0.26	0.24	0.04	
P19	楕円形	0.55	0.35	0.12	
P20	楕円形	0.20	0.18	0.12	
P22	楕円形	1.20	0.55	0.09	
P24	円形	0.20	0.20	0.16	
P25	〃	0.19	0.18	0.16	
P26	楕円形	0.30	0.25	0.12	
P27	〃	0.38	0.30	0.14	
P28	円形	0.20	0.20	0.14	
P29	楕円形	0.34	0.24	0.22	
P30	〃	0.62	0.45	0.40	
P31	〃	0.35	0.25	0.12	
P36	〃	0.42	0.32	0.28	
P37	円形	0.32	0.32	0.33	
P39	楕円形	0.30	0.24	0.40	
P40	楕円形	0.28	0.26	0.42	
P42	楕円形	0.34	0.28	0.48	
P43	〃	0.30	0.26	0.43	
P44	〃	0.30	0.26	0.04	
P45	〃	0.25	0.20	0.08	
P46	〃	0.38	0.34	0.10	
P47	円形	0.30	0.28	0.56	
P48	楕円形	0.32	0.28	0.33	
P49	楕円形	0.30	0.30	0.30	
P50	楕円形	0.36	0.30	0.24	
P51	〃	0.42	0.25	0.19	
P52	円形	0.30	0.28	0.15	
P54	〃	0.28	0.28	0.36	
P55	楕円形	0.28	0.22	0.04	
P56	〃	0.36	0.30	0.63	
P57	〃	0.34	0.30	0.55	
P58	〃	0.28	0.24	0.38	
P59	円形	0.38	0.38	0.40	
P60	楕円形	0.60	0.54	0.18	
P61	〃	0.60	0.55	0.46	
P62	円形	0.52	0.50	0.22	
P63	楕円形	0.44	0.40	0.19	
P64	〃	0.74	0.50	0.64	

第2表 調査区内ピット及び小土坑跡一覧表

C 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は量的には少ないが、遺構検出時に出土したものが大半である。ここでは、このようなものもすべて一括して遺構外出土遺物として記述する。

① 縄文時代の土器（第45図）

454、455は口縁部上部を肥厚させた複合口縁となるもので、454は縄文主体、455はS字状連鎖文を施文する。456～459は沈線文で施文するもの。前期末～中期初頭の大木6～7式に伴うものでせある。460、462は粘土紐の貼付されるもので前期後半の大木5～6式に伴うものか。463～473、476、477は原体圧痕文や沈線、短原体圧痕文、刺突などにより文様を構成するもので、中期前半大木7b～8a式に伴うものである。474、475、478～481は隆沈線で施文されるもので、中期前半の大木8a～8b式に伴うもの。482、483は地文のみのものである。484は底部片である。

以上が遺構外から出土した土器であるが、総じて前期後半～中期前半期までのものである。

② 縄文時代の石器（第46～49図）

第46図～第48図 485～530は剥片石器である。

485～515は石鎌である。すべて無柄のもので基部が平基、挟入の浅い凹基、挟入の深い凹基に分けられる。更に、正三角形状、二等辺三角形状、縦長の二等辺三角形状の形態のものに分けられ、これらの組合せで分類される。今回の調査では所謂定形的な石器の中では遺構内外を含め石鎌の出土点数が圧倒的に多い。516、517は石匙で516は今回出土した石匙の中では唯一の横形のものである。518、520は石錐と思われるものである。521～524は両面あるいは片面調整の削器と思われるものである。525～530は原石面を残したりするもので、刃部が急斜度で調整された搔器と思われるものである。

第49図534～543は礫石器である。534～536は石錘だが、536は長軸方向に剥離を加えただけのもので若干の疑問も残る。537～539は敲石で539は短軸方向、537、538は長軸方向を使用している。540は敲打磨石である。542は石皿で中央に磨面がみられる。541は両面加工の打製石斧である。

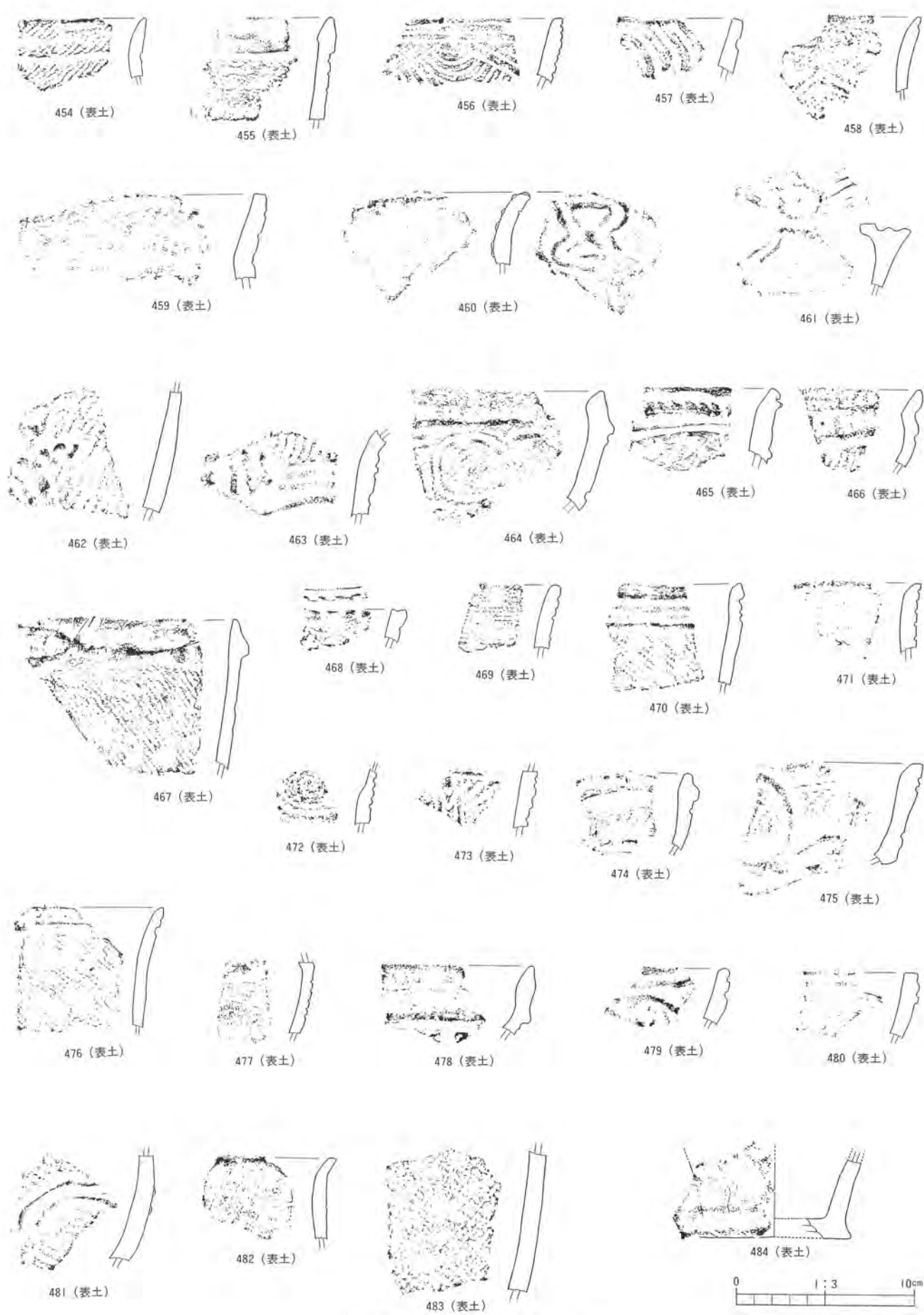
543は磨製石斧の破損品である。

③ 縄文時代の石製品（第18図）

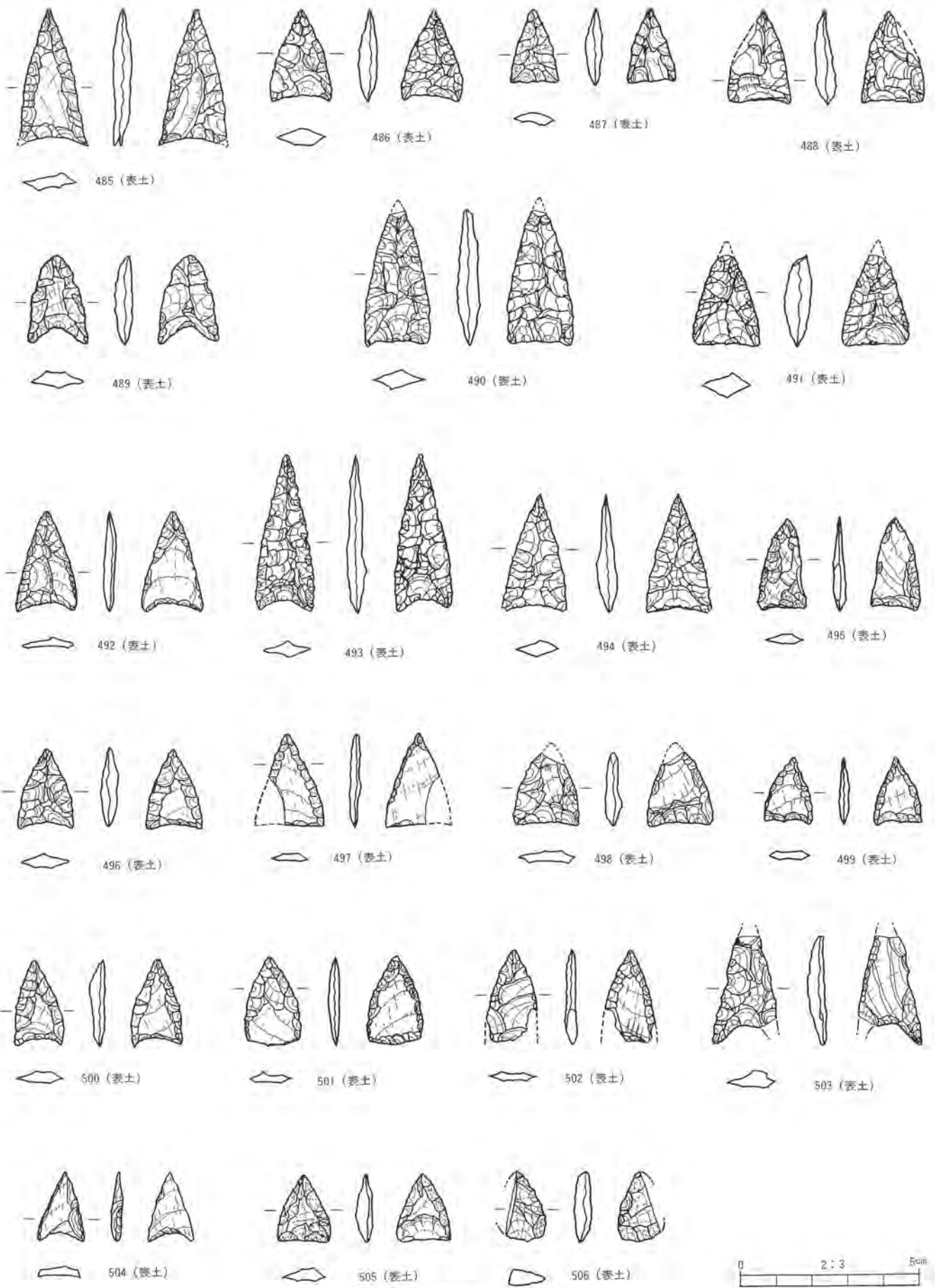
第48図531、532の2点出土したが、いずれも玦状耳飾の破損品である。533は化石である珪化木を素材とした棒状のもので用途、名称不明で石製品でない可能性もある。

④ その他出土品

その他として縄文時代以外のものとして僅かに出土している。第50図545は「至大通寶」で（初鑄が1309年）が1点出土している。これは、中国の元の時代に鑄造されたものである。また、第50図546は青磁の碗で蓮弁文を施した龍泉窯産の14世紀のものである。



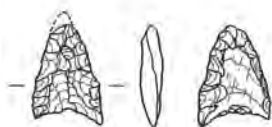
第45図 遺構外出土土器



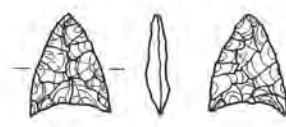
第46图 遺構外出土石器①



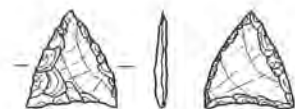
507 (表土)



508 (表土)



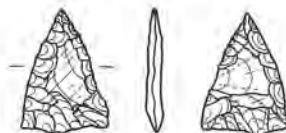
509 (表土)



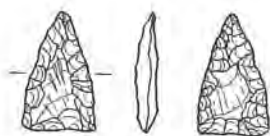
510 (表土)



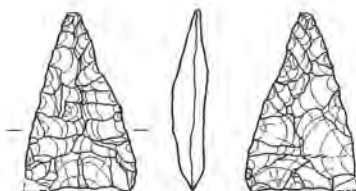
511 (表土)



512 (表土)



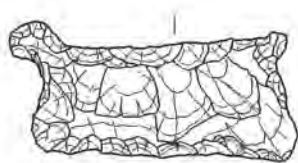
513 (表土)



514 (表土)



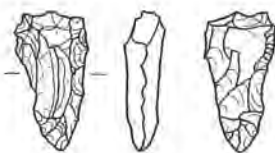
515 (表土)



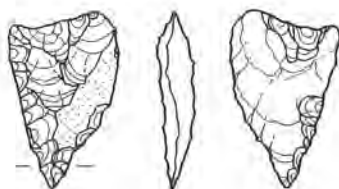
516 (表土)



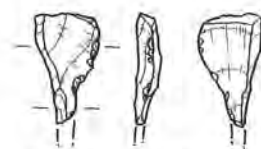
517 (表土)



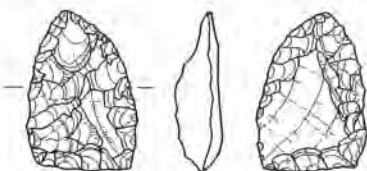
518 (表土)



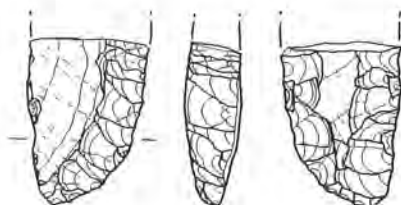
519 (表土)



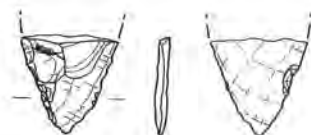
520 (表土)



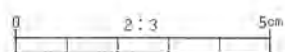
521 (表土)



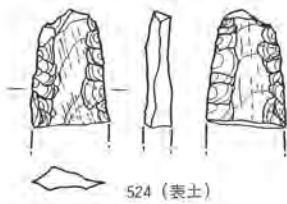
522 (表土)



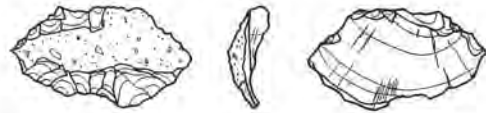
523 (表土)



第47図 遺構外出土石器②



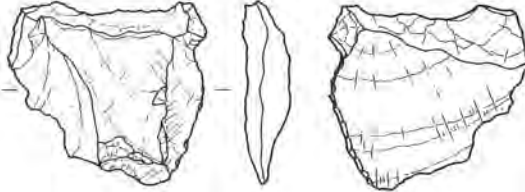
524 (表土)



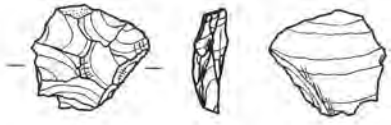
525 (表土)



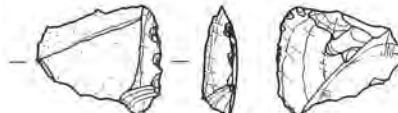
526 (表土)



527 (表土)



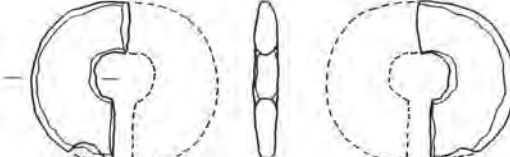
528 (表土)



529 (表土)



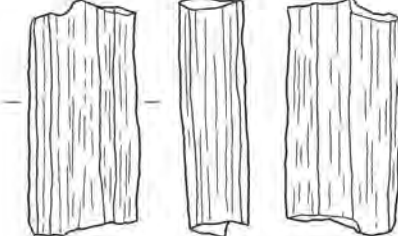
530 (表土)



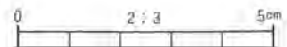
531 (表土)



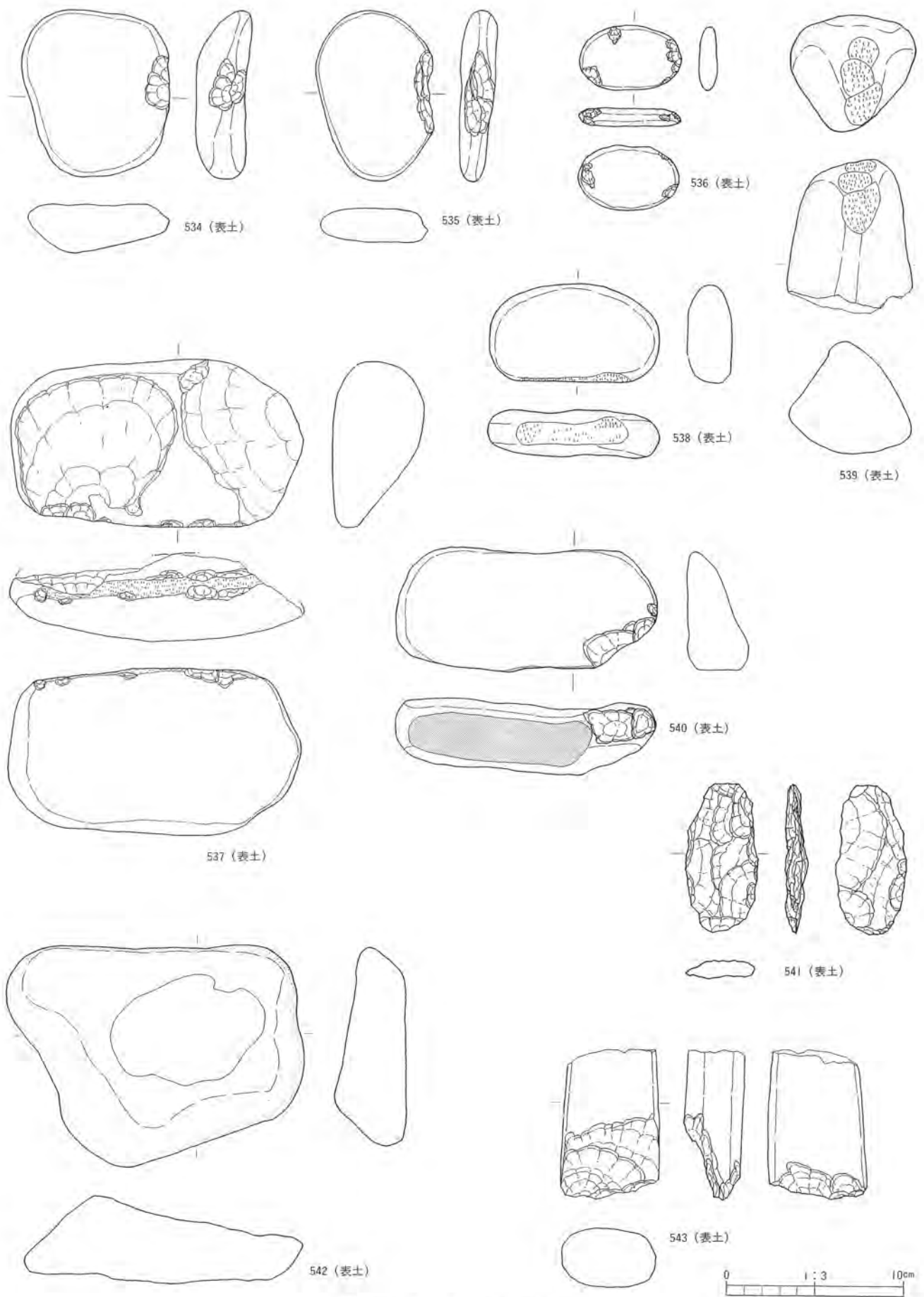
532 (表土)



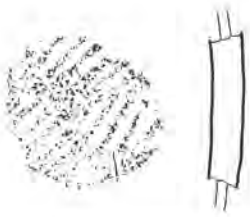
533 (表土)



第48図 遺構外出土石器・石製品③



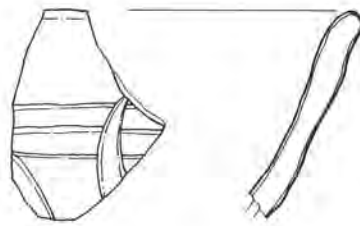
第49図 遺構外出土石器④



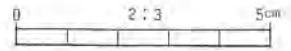
544 (第1号竖穴住居跡、A2層)



545 (表土)



546 (表土)



第50図 土製品・陶磁器、銭などの出土遺物

No.	登録番号	遺構名	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	1 0 0 1	構1号竪穴住居跡	床直上～床面	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第17図198	(36.5)	19.5	6.5	(2.5)	無柄凹基
2	1 0 0 2	遺構外	試掘トレンチ	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図251	24.0	16.0	6.0	1.3	無柄凹基
3	1 0 0 3	遺構外	試掘トレンチ	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第21図250	24.5	(14.0)	6.5	(1.4)	無柄凹基
4	1 0 0 4	遺構外	試掘トレンチ	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第30図340	30.0	(17.5)	5.0	(1.5)	無柄凹基
5	1 0 0 5	第1号竪穴住居跡	A 1層	石匙	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第19図285	(32.5)	(25.0)	8.0	(4.1)	楕形石匙?
6	1 0 0 6	第1号竪穴住居跡	A 1層	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第19図286	24.0	16.0	6.0	1.6	無柄凹基
7	1 0 0 7	第1号竪穴住居跡	層不明	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図252	(21.0)	17.5	5.5	(1.1)	無柄凹基
8	1 0 0 8	第1号竪穴住居跡	床直上～床面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第17図203	32.0	16.0	8.0	2.0	無柄凹基
9	1 0 0 9	第1号竪穴住居跡	床直上～床面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第17図200	30.0	17.0	5.0	(2.4)	無柄凹基
10	1 0 1 0	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図254	26.0	(20.0)	8.0	(2.4)	無柄凹基
11	1 0 1 1	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第21図261	21.0	16.0	3.0	1.0	無柄凹基
12	1 0 1 2	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第21図260	27.0	10.0	3.5	0.8	無柄凹基
13	1 0 1 3	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第21図259	21.5	13.0	4.0	0.9	無柄凹基
14	1 0 1 4	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図258	28.0	14.5	5.5	1.6	無柄凹基
15	1 0 1 5	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第21図257	20.5	14.5	4.0	0.9	無柄凹基
16	1 0 1 6	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図256	12.0	11.5	2.5	0.2	無柄凹基
17	1 0 1 7	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石匙の破損品?	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第22図271	(16.5)	(14.5)	3.0	(0.7)	
18	1 0 1 8	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	削器類	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第22図273	43.5	23.5	6.5	4.0	
19	1 0 1 9	第1号竪穴住居跡	A 1層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第19図282	(25.0)	(17.0)	3.5	(1.4)	無柄凹基?
20	1 0 2 0	第1号竪穴住居跡	A 2層	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第19図280	34.0	(14.0)	4.0	(1.4)	無柄凹基
21	1 0 2 1	構1号竪穴住居跡	床直上～床面	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第17図201	18.0	(15.0)	5.0	(1.0)	無柄凹基
22	1 0 2 2	第1号竪穴住居跡	床直上～床面	削器	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第18図215	32.0	22.5	8.5	6.1	
23	1 0 2 3	第1号竪穴住居跡	床直上～床面	搔器	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第18図214	22.5	26.0	4.0	2.2	凹形搔器
24	1 0 2 4	第1号竪穴住居跡	A 2層	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第19図223	(22.0)	17.0	5.0	(1.1)	無柄凹基
25	1 0 2 5	第1号竪穴住居跡	A 2層	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第19図224	21.5	14.0	3.5	0.9	無柄凹基?
26	1 0 2 6	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第21図255	22.0	(18.0)	5.0	(1.2)	無柄凹基
27	1 0 2 7	第1号竪穴住居跡	埋土	石匙	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第17図206	36.0	15.0	6.5	3.2	楕形
28	1 0 2 8	P16	埋土	削器	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第17図207	51.5	20.0	10.5	11.6	
29	1 0 2 9	第1号竪穴住居跡	床面直上	石槍	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第17図205	(114.0)	43.0	20.0	(78.0)	
30	1 0 3 0	第4号土城跡	埋土	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第41図416	(22.0)	14.0	6.0	(1.4)	無柄凹基
31	1 0 3 1	第4号土城跡	埋土	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第41図415	21.0	(14.5)	5.5	(1.0)	無柄凹基
32	1 0 3 2	第1号竪穴住居跡	A 1層	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第19図228	(34.5)	14.5	5.0	(2.1)	無柄凹基
33	1 0 3 3	第1号竪穴住居跡	A 1層	石匙	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第20図242	(25.0)	(19.5)	5.5	(1.8)	
34	1 0 3 4	第1号竪穴住居跡	B 1層	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第18図216	27.0	15.0	6.5	1.6	無柄凹基
35	1 0 3 5	遺構外	遺構検出面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図494	32.0	18.0	5.5	2.1	無柄凹基
36	1 0 3 6	遺構外	遺構検出面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第46図495	25.5	13.5	3.5	1.0	無柄凹基
37	1 0 3 7	遺構外	遺構検出面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図493	44.0	16.0	5.0	2.3	無柄凹基
38	1 0 3 8	遺構外	遺構検出面	削器	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第47図523	(20.0)	(19.5)	2.0	0.8	
39	1 0 3 9	遺構外	遺構検出面	削器	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第48図529	22.0	25.0	6.5	3.4	
40	1 0 4 0	遺構外	遺構検出面	石鏃?	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		(31.0)	17.5	7.0	2.8	

第3表 剥片石器計測値一覧表①

No.	登録番号	遺構名	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
41	1041	遺構外	遺構検出面	搔器	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第48図527	36.5	38.0	8.5	9.6	
42	1042	遺構外	遺構検出面	剥片	黒耀石	不明	第48図528	21.0	23.0	96.0	2.5	
43	1043	第1号竪穴住居跡	床面直上層	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第17図202	(28.0)	(14.0)	4.0	1.3	無柄凹基
44	1044	第1号竪穴住居跡	床面上層	削掻器	チャート	岩泉	第18図213	26.0	20.5	5.5	3.2	
45	1045	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第19図227	(20.5)	(18.5)	3.5	1.3	無柄凹基
46	1046	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第20図238	(44.0)	17.0	5.5	(2.6)	
47	1047	第1号竪穴住居跡	A1層	鏃状石器	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第20図236	45.0	27.0	14.5	15.6	
48	1048	P20	埋土	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第17図197	(30.0)	18.0	6.0	2.0	無柄凹基
49	1049	第1号竪穴住居跡	A1層	削掻器	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第20図249	22.5	34.0	6.5	3.9	
50	1050	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃or石槍?	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第20図239	35.0	20.0	8.5	5.3	
51	1051	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第19図229	(31.0)	18.5	5.0	(2.6)	無柄凹基
52	1052	第1号竪穴住居跡	A1層	削器	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第20図243	(17.5)	(12.0)	3.5	(0.7)	
53	1053	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第47図516	57.0	35.0	10.0	15.7	
54	1054	遺構外	基本層序II層	石匙	流紋岩・浄土ヶ浜古第三系		57.5	25.0	8.5	11.8	槽形	
55	1055	第1号竪穴住居跡	A2層	軽石	安山岩溶岩・第四紀火山	不明	60.0	40.0	31.0	40.0		
56	1056	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	剥片	チャート	岩泉	42.5	32.0	6.0	9.8		
57	1057	第1号竪穴住居跡	A2層	石匙	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第19図225	62.0	21.0	4.0	5.6	縦形
58	1058	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面	削掻器類	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第18図211	(34.0)	15.5	7.0	(3.2)	
59	1059	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第19図231	(40.5)	18.5	7.5	(3.8)	無柄凹基
60	1060	第1号竪穴住居跡	床面	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	(17.0)	17.0	4.0	0.8	無柄凹基	
61	1061	第1号竪穴住居跡	A1層	削掻器類	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	45.0	28.5	9.5	10.2		
62	1062	第1号竪穴住居跡	A1層	鏃片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	(28.0)	20.0	(5.0)	(4.0)		
63	1063	遺構外	不明	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図491	(25.0)	18.5	7.0	(2.8)	無柄平基
64	1064	遺構外	不明	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	22.0	17.0	2.5	0.9		
65	1065	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	チャート質泥岩・中生界	岩泉	28.5	19.5	10.5	7.7		
66	1066	第1号竪穴住居跡	A1層	搔器	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	40.0	9.0	4.5	1.4		
67	1067	第1号竪穴住居跡	不明	軽石	安山岩溶岩・第四紀火山	不明	55.0	47.0	19.5	63.1		
68	1068	遺構外	遺構検出面	削掻器類	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	(22.0)	12.0	4.0	1.0		
69	1069	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第19図233	(18.0)	16.5	4.0	(1.4)	無柄凹基
70	1070	遺構外	検出面	剥片	黒耀石	不明	第48図525	36.0	20.0	5.0	3.2	
71	1071	遺構外	検出面	状耳飾の左側部分	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第48図531	31.0	(18.0)	4.5	(4.0)	
72	1072	遺構外	検出面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図499	18.5	14.0	2.5	0.8	無柄平基
73	1073	第4号土坑跡	埋土	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	30.0	17.5	8.5	5.3		
74	1074	第1号竪穴住居跡	B層	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	36.5	20.5	9.5	5.4	無柄凹基	
75	1075	第1号竪穴住居跡	B層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	(36.0)	(19.5)	5.0	(2.4)	無柄凹基	
76	1076	第1号竪穴住居跡	B層	削器	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	(25.0)	(18.0)	2.5	(0.9)		
77	1077	第1号竪穴住居跡	B層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	22.0	(18.0)	3.5	(0.8)	無柄平基	
78	1078	第1号竪穴住居跡(P42)	埋土	削掻器類	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	(22.5)	22.0	4.0	(1.9)		
79	1079	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図264	(43.5)	15.5	6.0	(3.7)	無柄凹基
80	1080	遺構外	検出面	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	19.5	(11.5)	4.5	(0.9)	無柄平基	

第4表 剥片石器計測値一覧表②

No	登錄番号	遺構名	出土層位	器種	石質	石材產地	掲載図版	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
81	1 0 8 4	遺構外	検出面	削接器類	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第48図530	(28.5)	20.0	8.0	3.8	
82	1 0 8 2	遺構外	検出面	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		24.0	17.0	3.5	1.4	
83	1 0 8 3	遺構外	検出面	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第46図485	(37.5)	(18.5)	5.0	(2.6)	無柄凹基
84	1 0 8 4	遺構外	検出面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図489	24.0	17.0	5.0	1.8	無柄凹基
85	1 0 8 5	遺構外	検出面	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		22.5	17.0	3.0	1.2	
86	1 0 8 6	遺構外	検出面	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第46図486	25.0	17.0	5.0	1.7	無柄凹基
87	1 0 8 7	遺構外	検出面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第46図502	(26.0)	(14.0)	3.0	(1.0)	無柄凹基
88	1 0 8 8	遺構外	検出面	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第46図488	25.5	(18.0)	5.5	(1.8)	無柄凹基
89	1 0 8 9	遺構外	検出面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第46図487	20.0	13.5	4.0	1.1	無柄平基
90	1 0 9 0	遺構外	検出面	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		20.5	16.0	3.0	1.1	
91	1 0 9 1	遺構外	検出面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第46図500	24.0	14.0	4.0	1.3	無柄凹基
92	1 0 9 2	遺構外	検出面	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉	第46図497	26.0	(11.0)	3.0	(1.0)	無柄平基
93	1 0 9 3	遺構外	検出面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第46図496	22.5	15.5	4.0	1.3	無柄凹基
94	1 0 9 4	遺構外	基本層序Ⅱ層	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		22.5	16.0	4.5	1.8	
95	1 0 9 5	遺構外	基本層序Ⅱ層	剥片	チャート質泥岩・中生界	岩泉		18.5	17.0	6.0	1.8	
96	1 0 9 6	遺構外	基本層序Ⅱ層	剥片	石英	不明		26.0	22.5	10.0	6.2	
97	1 0 9 7	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		42.0	36.0	7.5	10.5	
98	1 0 9 8	第1号竪穴住居跡	A1層	石匙	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第19図234	41.0	19.0	10.5	5.5	縦形
99	1 0 9 9	第2号竪穴住居跡	B層	磨製石斧	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		(37.0)	(33.0)	(31.0)	(16.3)	
100	1 1 0 0	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃or石槍?	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第20図237	35.0	26.5	8.5	8.3	
101	1 1 0 1	第1号竪穴住居跡	A1層	接器	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第20図244	(27.0)	21.0	4.0	(1.8)	
102	1 1 0 2	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃	チャート	岩泉	第22図268	25.0	17.5	3.5	2.0	無柄平基
103	1 1 0 3	第1号竪穴住居跡	床面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第17図196	(36.5)	17.0	5.0	(1.7)	無柄凹基
104	1 1 0 4	遺構外	表土	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図501	25.0	15.5	3.5	1.2	無柄平基
105	1 1 0 5	遺構外	表土	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		(32.0)	19.0	5.0	(1.4)	
106	1 1 0 6	遺構外	表土	削接器類	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第47図518	27.0	15.0	7.0	2.7	
107	1 1 0 7	第2号竪穴住居跡	B層	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		(22.5)	25.0	6.0	3.6	
108	1 1 0 8	第2号竪穴住居跡	B層	削接器類	チャート	岩泉		24.0	16.0	4.5	1.9	
109	1 1 0 9	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第21図265	30.5	19.0	3.5	2.1	無柄凹基
110	1 1 1 0	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図263	31.0	16.0	3.5	1.2	無柄凹基
111	1 1 1 1	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図262	18.0	15.0	3.5	0.7	無柄凹基
112	1 1 1 2	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	赤褐色凝灰岩・中生界	岩泉方面		58.0	38.0	10.0	19.6	
113	1 1 1 3	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		26.0	24.0	9.0	4.8	
114	1 1 1 4	第1号竪穴住居跡	A1層	接器	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第20図247	36.0	19.0	4.0	2.4	
115	1 1 1 5	第1号竪穴住居跡	A1層	削器	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第20図241	(27.5)	16.5	5.5	(1.7)	
116	1 1 1 6	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		50.0	(37.0)	11.0	(18.6)	
117	1 1 1 7	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		30.0	27.0	11.5	8.5	
118	1 1 1 8	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	石英	不明		33.0	15.0	11.0	6.0	
119	1 1 1 9	第1号竪穴住居跡	B1層	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		47.0	20.0	9.5	6.8	
120	1 1 2 0	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		50.0	20.0	6.5	6.2	

第5表 剥片石器評測値一覧表③

No	登録番号	遺構名	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
121	11121	第1号竪穴住居跡	床面直上~床面	削掻器類	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第18図212	32.0	21.0	9.0	4.4	
122	11122	第1号竪穴住居跡	床面直上~床面	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第17図204	27.5	18.0	6.0	1.8	無柄平基
123	11123	遺構外	表土	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		30.0	18.0	4.0	1.3	
124	11124	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		33.0	24.0	(4.0)	(4.5)	
125	11125	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第20図240	35.5	11.0	7.5	2.7	
126	11126	第2号竪穴住居跡	B層	剥片	黒耀石	不明	第30図339	26.5	16.0	5.0	1.6	
127	11127	第1号竪穴住居跡	B層	削掻器類	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第19図222	55.0	30.0	12.0	19.2	
128	11128	第1号竪穴住居跡	A2層	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		45.0	31.0	7.0	9.9	
129	11129	第1号竪穴住居跡	A2層	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		66.5	33.0	10.5	22.9	
130	11130	第1号竪穴住居跡	A2層	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		48.0	31.5	11.5	9.6	
131	11131	P7	埋土	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		36.0	21.5	5.0	3.7	
132	11132	第1号竪穴住居跡	検出面~床面直上	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第22図272	(39.0)	28.0	4.0	(3.8)	
133	11133	第1号竪穴住居跡	検出面~床面直上	削掻器類	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第22図274	40.0	22.0	11.5	6.1	
134	11134	第1号竪穴住居跡	検出面~床面直上	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		39.0	17.5	7.0	3.7	
135	11135	第2号土塚跡	埋土	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		(40.0)	27.5	8.5	(8.7)	
136	11136	第1号竪穴住居跡	A1層	石鏃or石槍?	凝灰質泥岩・中生界	岩泉方面	第20図246	35.0	(26.0)	6.0	(7.0)	
137	11137	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		48.0	35.0	9.5	11.2	
138	11138	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		27.5	22.0	5.0	2.8	
139	11139	第1号竪穴住居跡	A1層	剥片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		26.0	20.0	5.5	2.6	
140	11140	遺構外	検出面	瑛器	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第47図522	(33.0)	22.5	10.0	(8.4)	
141	11141	遺構外	検出面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第47図519	35.0	21.5	7.0	4.0	
142	11142	第1号竪穴住居跡	検出面~床面直上	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		28.0	16.0	3.5	1.6	
143	11143	第4号土塚跡	埋土	剥片	チャート	岩泉		24.0	21.0	5.0	1.7	
144	11144	第4号土塚跡	埋土	剥片	チャート	岩泉		41.0	25.0	13.0	14.4	
145	11145	第4号土塚跡	埋土	剥片	赤褐色凝灰岩・中生界	岩泉方面		31.0	26.5	9.0	7.4	
146	11146	遺構外	検出面	化石(珪化木)	珪化木	不明	第48図533	(47.0)	22.0	12.5	(19.3)	
147	11146	第2号土塚跡	埋土	剥片	チャート質泥岩・中生界	岩泉		32.5	23.5	11.0	7.9	
148	11148	遺構外	検出面	剥片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		52.0	36.0	10.0	20.2	
149	11149	遺構外	検出面	石匙	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第47図517	59.5	29.5	11.0	18.8	縦形
150	11150	第4号土塚跡	埋土	剥片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		50.5	32.5	9.5	15.4	
151	11151	遺構外	検出面	剥片	チャート質泥岩・中生界	岩泉		60.0	34.0	10.5	18.3	
152	11152	遺構外	検出面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図498	(20.0)	18.0	4.0	(1.7)	無柄凹基
153	11153	遺構外	検出面	削掻器類	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第48図524	(23.0)	15.0	5.0	(1.7)	
154	11154	遺構外	検出面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第47図521	32.0	22.0	8.0	5.6	無柄平基
155	11155	遺構外	検出面	剥片	チャート	岩泉		224.0	18.0	9.5	4.8	
156	11156	第1号竪穴住居跡	検出面~床面直上	剥片	チャート質泥岩・中生界	岩泉		30.0	15.0	4.5	1.6	
157	11157	遺構外	検出面	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第46図505	19.0	15.0	5.0	1.0	無柄平基
158	11158	遺構外	検出面	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第46図492	28.0	17.0	3.0	1.2	無柄凹基
159	11159	第1号竪穴住居跡	検出面~床面直上	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第21図266	(26.0)	16.0	5.0	(1.8)	無柄凹基
160	11160	第1号竪穴住居跡	検出面~床面直上	剥片	結晶質石灰岩・中生界	岩泉		70.0	59.0	19.0	82.5	

第6表 剥片石器計測値一覧表④

No.	登録番号	遺構名	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
161	1161	遺構外	基本層序II層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		50.0	20.0	7.0	5.0	無柄平基
162	1162	遺構外	基本層序II層	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		(23.0)	18.5	4.0	(1.5)	無柄凹基
163	1163	遺構外	表土	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第46図503	(31.0)	17.5	5.0	(2.1)	無柄凹基
164	1164	遺構外	表土	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第46図504	18.5	13.0	3.0	0.7	無柄凹基
165	1165	第1号竪穴住居跡	床面	削片器類	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第18図210	(32.0)	14.0	4.0	1.8	
166	1166	第2号土坑跡	埋土	状耳飾	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第48図532	20.0	(9.0)	3.5	(0.7)	
167	1167	第1号竪穴住居跡	層不明	挿器	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第22図270	68.0	25.5	7.5	13.8	
168	1168	第3号竪穴跡	A層	削片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		15.0	14.5	2.5	0.5	
169	1169	遺構外	表土	挿器	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第48図526	28.0	21.0	5.5	3.7	
170	1170	遺構外	表土	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第46図490	(38.0)	18.5	6.0	3.6	無柄平基
171	1171	第1号竪穴住居跡	B層	削片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		43.0	36.0	26.0	40.0	
172	1172	第1号竪穴住居跡	B層	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第18図219	(21.5)	15.0	5.5	(1.3)	基部破損
173	1173	第1号竪穴住居跡	B層	削片	赤褐色凝灰岩・中生界	岩泉方面		36.0	17.0	7.5	5.0	
174	1174	第2号土坑跡	埋土	削片	チャート質泥岩・中生界	岩泉		24.0	15.0	4.0	1.2	
175	1175	第1号竪穴住居跡(P13)	埋土	削片	凝灰質泥岩・中生界	岩泉		(23.0)	(25.0)	5.0	(2.9)	
176	1176	第1号竪穴住居跡(P13)	埋土	削片	石英	不明		2.8	15.0	6.0	2.7	
177	1177	第1号竪穴住居跡(P13)	埋土	削片	石英	不明		28.0	17.0	12.0	7.2	
178	1178	第1号竪穴住居跡	B層	挿器	チャート	岩泉	第18図221	72.5	25.0	17.5	37.8	
179	1179	第1号竪穴住居跡	B層	削片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		28.5	17.5	7.5	3.5	
180	1180	第1号竪穴住居跡	A2層	削片	黒耀石	不明		38.0	27.5	7.5	8.7	
181	1181	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第21図253	(28.0)	20.0	5.0	(2.5)	無柄平基
182	1182	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	削片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		28.0	16.5	4.0	1.8	
183	1183	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石匙	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第22図269	63.0	18.0	9.5	12.2	縦形
184	1184	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第21図269	(15.5)	14.0	3.0	(0.8)	無柄平基
185	1185	第1号竪穴跡	埋土	削片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		45.0	14.0	7.0	4.4	
186	1186	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	削片	結晶質石灰岩・中生界	岩泉		46.0	17.0	14.0	11.8	
187	1187	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	削片	結晶質石灰岩・中生界	岩泉		120.0	55.0	21.5	163.7	
188	1188	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面	削片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		42.0	31.5	8.5	9.3	
189	1189	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第18図208	(24.0)	19.0	5.0	(2.1)	
190	1190	遺構外	表土	石鏃	凝灰質泥岩・中生界	岩泉	第47図514	(35.0)	21.5	7.0	(4.1)	無柄平基
191	1191	遺構外	表土	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第47図507	25.5	13.5	5.5	1.4	無柄平基
192	1192	遺構外	表土	削片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		(17.0)	19.5	3.0	(1.4)	
193	1193	遺構外	表土	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第47図508	(20.0)	13.5	4.0	(1.0)	無柄凹基
194	1194	遺構外	表土	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第47図509	20.0	15.5	4.0	0.9	無柄凹基
195	1195	遺構外	表土	石鏃	硬質泥岩・中生内	岩泉方面	第47図510	19.0	18.0	2.5	0.7	無柄凹基
196	1196	遺構外	表土	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第47図511	22.5	17.0	5.0	1.2	無柄凹基
197	1197	遺構外	表土	削片	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面		22.0	11.0	2.5	0.8	
198	1198	遺構外	表土	削片	硬質泥岩・中生界	岩泉方面		16.0	12.0	2.0	0.3	
199	1199	遺構外	表土	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第47図512	24.0	17.0	3.0	1.2	無柄平基
200	1200	遺構外	表土	石鏃	泥質細粒凝灰岩・中生界	岩泉方面	第47図513	24.0	14.0	3.5	1.3	無柄平基

第7表 剥片石器計測値一覧表⑤

No	登録番号	遺構名	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
201	1 2 0 1	遺構外	表土	石鏃	チャート質泥岩・中生界	岩泉	第47図515	(17.0)	(15.0)	4.0	(0.6)	無柄凹基
202	1 2 0 2	第1号竪穴住居跡	床面直上~床面	石鏃	硬質泥岩・中生界	岩泉方面	第17図199	(30.0)	(17.0)	5.0	(1.7)	無柄凹基
203	1 2 0 3	第1号竪穴住居跡	A 1層	剥片	石英	不明		25.0	19.0	8.0	4.9	
204	1 2 0 4	第1号竪穴住居跡	A 1層	軽石	安山岩溶岩・第四紀火山	不明		43.0	32.0	18.0	25.7	
1	1	遺構外	検出面	敲石			第49図539	(87.0)	71.0	68.0	(491.3)	
2	6	遺構外	検出面	磨石			第49図536	58.0	32.0	5.0	33.3	
3	1 2	第2号土城跡	埋土	磨石			第38図388	95.0	26.0	20.0	81.1	
4	1 3	第2号土城跡	埋土	磨石			第38図389	74.0	(37.0)	35.0	(139.3)	
5	1 6	第2号土城跡	埋土	石皿			第38図384	(140.0)	76.5	36.0	714.7	
6	1 7	第1号竪穴住居跡	B層	石皿			第25図291	(123.0)	(122.5)	51.0	1379.8	
7	3 1	第1号竪穴住居跡	埋土	石皿			第24図286	222.0	157.5	64.0	3kg以上	
8	3 4	第1号竪穴住居跡	A 1層	石鏃			第26図299	39.0	31.0	16.0	25.7	
9	3 6	第1号竪穴住居跡	床面直上層	打製石斧			第23図281	104.0	98.0	29.5	156.0	
10	3 8	第1号竪穴住居跡	A 2層	敲打磨石			第25図294	159.0	48.0	37.5	404.2	
11	4 0	第1号竪穴住居跡	A 1層	敲石			第26図304	(99.0)	(98.5)	44.0	607.8	
12	4 2	第1号竪穴住居跡	B 1層	敲打磨石			第24図289	(102.5)	74.5	52.5	(554.3)	
13	4 3	第1号竪穴住居跡	床面直上層	敲打磨石			第24図284	(105.0)	50.0	37.0	(274.0)	
14	4 4	第1号竪穴住居跡	A 2層	敲石			第25図293	(82.0)	(35.0)	(36.0)	(87.3)	
15	4 9	第1号竪穴住居跡	層不明	敲石			第49図538	96.0	56.0	26.0	210.0	
16	5 3	第1号竪穴住居跡	B層	磨石			第25図292	49.5	33.0	16.0	26.8	
17	6 7	遺構外	表土	石鏃			第49図535	97.0	67.0	17.0	172.4	
18	6 9	遺構外	基本層序II層	石鏃			第49図534	94.5	84.0	29.5	323.1	
19	7 1	第1号竪穴住居跡	床面	敲石			第27図310	143.0	74.0	55.0	760.6	
20	7 2	第2号土城跡	埋土	敲石			第38図386	156.0	77.0	35.0	550.3	
21	7 3	第2号竪穴住居穴	C層	石鏃			第31図342	100.0	100.0	28.0	388.9	
22	7 4	第2号竪穴跡	埋土	石鏃			第31図343	139.0	113.0	32.0	713.8	
23	7 5	第1号竪穴住居跡	床面直上	石鏃			第23図276	143.0	105.0	37.0	663.1	
24	7 6	第1号竪穴住居跡	床面直上層	敲石			第24図287	108.0	49.5	33.0	291.8	
25	8 1	第1号竪穴住居跡(P3)	埋土	石皿			第23図275	125.5	110.0	35.0	774.2	
26	8 8	第2号竪穴住居跡	B 1層	石鏃			第31図341	50.0	44.0	7.0	22.8	
27	9 1	第2号土城跡	埋土	敲石			第38図385	121.5	50.5	(26.0)	(242.1)	
28	9 4	第2号土城跡	埋土	敲石			第38図387	(109.0)	69.0	73.0	(558.3)	
29	9 7	遺構外	表土	敲打磨石			第26図387	107.5	70.0	55.0	499.4	
30	9 8	第1号竪穴住居跡	床面	敲石			第49図537	(166.0)	95.0	(50.0)	(823.4)	
31	9 9	第3号竪穴跡	埋土	敲石			第31図344	(107.0)	54.0	33.0	(257.4)	
32	1 0 0	第3号竪穴跡	埋土	磨石			第31図345	(100.5)	61.0	45.0	(402.1)	
33	1 0 2	第1号竪穴住居跡	A 1層	敲石			第26図305	(127.0)	(87.0)	(69.0)	(725.8)	
34	1 0 3	第1号竪穴住居跡	A 1層	敲打磨石			第24図290	(100.0)	72.0	35.0	(426.9)	

第8表 礫石器計測値一覧表①

No.	登録番号	遺構名	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
35	1 0 5	第1号竪穴住居跡	床面直上層	石皿			第23図282	149.0	119.0	52.0	1246.4	
36	1 0 6	第1号竪穴住居跡	床面直上層	敲打磨石			第24図283	153.0	85.0	57.0	1010.4	
37	1 0 7	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上層	石皿			第24図285	(38.0)	(52.5)	(31.0)	(52.5)	
38	1 0 8	第1号竪穴住居跡	A 1層	敲打磨石			第49図540	147.0	68.0	38.0	539.3	
39	1 5 0 1	第1号竪穴住居跡	床面	石錘	流文岩	門神	第27図308	122.0	80.0	33.0	463.9	
40	1 5 0 2	第1号竪穴住居跡	床面	石錘	凝灰質硬砂岩	岩泉	第27図307	108.0	69.5	24.0	307.8	
41	1 5 0 3	第1号竪穴住居跡	磨石				第24図288	142.5	51.0	36.5	822.7	
42	1 5 0 4	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上		凝灰岩	岩泉方面		125.0	57.0	38.5	363.8	
43	1 5 0 5	第1号竪穴住居跡	検出面～床面直上	磨製石斧	凝灰岩	岩泉方面	第49図543	(85.0)	54.5	33.0	(236.9)	
44	1 5 0 6	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面	石錘	粘板岩・古生界	閉伊川	第23図278	101.0	100.5	37.0	375.5	
45	1 5 0 7	第1号竪穴住居跡	A 1層	敲打磨石	凝灰質硬砂岩	岩泉	第26図302	158.0	89.0	33.5	753.4	
46	1 5 0 8	遺構外	表土					139.0	75.5	30.0	393.3	
47	1 5 0 9	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面	石錘	結晶片岩・古生界	閉伊川流域		120.0	83.0	27.5	388.1	
48	1 5 1 0	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面	石錘	結晶片岩・古生界	閉伊川流域	第23図277	120.0	80.0	31.0	383.2	
49	1 5 1 1	遺構外	表土	石皿	アイサイト・中生界	門神	第49図542	169.0	126.5	44.0	1202.6	
50	1 5 1 2	第1号竪穴住居跡(P 25)	埋土	石錘	凝灰質硬砂岩	岩泉	第23図279	128.0	90.0	43.0	469.3	
51	1 5 1 3	第1号竪穴住居跡	A 1層		粘板岩・古生界	閉伊川		(79.0)	54.0	(13.5)	(94.5)	
52	1 5 1 4	第1号竪穴住居跡	北側壁付埋土		凝灰質硬砂岩	岩泉		(47.5)	47.5	23.0	(82.8)	
53	1 5 1 5	第1号竪穴住居跡	A 1層		凝灰質硬砂岩	岩泉		118.0	48.0	30.0	301.1	
54	1 5 1 6	第1号竪穴住居跡	A 2層	敲石	粘板岩(ホルンフェルス)	岩泉	第25図297	123.0	90.0	38.0	503.4	
55	1 5 1 7	遺構外	表土		アイサイト・中生界	門神		160.0	82.0	38.0	677.8	
56	1 5 1 8	第1号竪穴住居跡	埋土	敲石	凝灰質硬砂岩	岩泉	第27図309	85.0	51.0	13.0	43.6	
57	1 5 1 9	遺構外	検出面	打製石斧	粘板岩・古生界	閉伊川	第49図541	81.0	71.5	18.0	152.9	
58	1 5 2 0	第1号竪穴住居跡	A 1層	石錘	アイサイト・中生界	門神	第26図298	(45.0)	46.5	(15.0)	(44.3)	
59	1 5 2 1	第4号土坑跡	埋土	磨製石斧	硬質泥岩	岩泉	第31図346	(36.0)	43.0	23.0	(47.6)	
60	1 5 2 2	第1号竪穴住居跡	A 1層	磨製石斧	凝灰質硬砂岩	岩泉	第26図301	(65.0)	47.0	30.0	(110.5)	
61	1 5 2 3	第1号竪穴住居跡	A 1層	磨製石斧	硬質泥岩	岩泉		(90.0)	(65.0)	18.0	(152.3)	
62	1 5 2 4	第1号竪穴住居跡	A 1層	石皿	流文岩	門神	第26図306	149.0	76.0	70.0	1205.0	
63	1 5 2 5	第1号竪穴住居跡	A 1層	敲石	凝灰岩	岩泉方面	第25図296	(54.0)	(52.0)	(11.5)	(32.0)	
64	1 5 2 6	第1号竪穴住居跡	A 1層	磨製石斧	硬質泥岩	岩泉	第26図300	(107.0)	(23.5)	(7.5)	(23.9)	
65	1 5 2 7	遺構外	B層	石刀	粘板岩・古生界	閉伊川		107.0	82.0	26.0	283.4	
66	1 5 2 8	第2号土坑跡	埋土	打製石斧	結晶片岩・古生界	閉伊川流域	第38図390	83.0	62.0	24.0	159.9	
67	1 5 2 9	第2号土坑跡	埋土	石錘	凝灰岩	岩泉方面	第38図391	151.0	56.5	26.0	368.0	
68	1 5 3 0	第1号竪穴住居跡	A 2層	敲石	凝灰岩	岩泉方面	第25図295	160.0	95.0	38.0	935.1	
69	1 5 3 1	第2号土坑跡	埋土	敲打磨石	凝灰質硬砂岩	岩泉	第38図383	110.0	77.0	50.0	894.9	
70	1 5 3 2	第2号土坑跡	埋土		凝灰岩	岩泉方面		40.0	36.0	8.5	21.6	
71	1 5 3 3	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面		凝灰岩	岩泉方面		36.0	34.0	20.0	32.3	
72	1 5 3 4	第1号竪穴住居跡	床面直上～床面		流文岩	門神		67.0	44.0	14.0	59.6	
73	1 5 3 5	第2号土坑跡	埋土		硬質泥岩	岩泉		17.0	15.0	10.0	4.0	
74	1 5 3 6	第1号竪穴住居跡	A 1層		チャート質泥岩	岩泉						

第9表 礫石器計測値一覧表②

Ⅳ 調査のまとめ

今回の調査により検出した遺構・遺物は以上であった。調査面積が僅か100㎡にもかかわらず、比較的多数の遺構・遺物を検出したといえる。以下、考察を混じえまとめとする。

1 遺構について

(1) 竪穴住居跡について

2棟の竪穴住居跡を検出したが、ここではほぼ全体が把握できた第1号竪穴住居跡について記述する。

第1号竪穴住居跡は長軸方向で11.3mをはかり所謂大型の住居跡になる。その主な特徴は、砲弾形のプラン、主柱穴が西壁側は壁ぞいで東壁側はやや内部に入りこむ、南壁際に小さな立石?が伴う、明瞭な炉跡が確認されなかった、ことなどがあげられる。大型住居跡ということでは宮古市内では今のところ崎山の白石遺跡で調査された長軸が8.6mの竪穴住居跡（後期初頭）が最大のもので、今回の竪穴住居跡はそれをしのぐ規模となっている。県内外では全長が10mをはるかに超えるものが検出しており、その中において11.3mの当住居跡は大型の中でもこぶりな部類といえる。

第1号竪穴住居跡

このような大型の竪穴住居跡は、集会施設とか共同作業場などといわれているが、その実態は不明な点がある。特に、沿岸地方での検出例が皆無で今後の調査に期待がかかる。

さて、今回のこの竪穴住居跡は時期的には中期初頭の大木7式（そのうちでも7b式か）に所属するもので、当該期のものとしては市内では高根遺跡（『高根92』）と崎山貝塚で検出しているが、『高根92』でもふれたが県内でも類例が少なくまだまだ検討の余地があるものと思われる。今回も僅か100㎡という狭い範囲しか調査していないので、全体像がはっきりしないため、あえて詳細な分析、比較などは避けこままでとしたい。

(2) 掘立建物跡について

今回の調査区内では1軒しか確認されなかったが、この掘立建物跡以外にも明瞭な柱痕跡が確認され、しかも柱穴内に扁平な石が置かれている柱穴跡もあり調査区以外にも何らかの掘立建物跡が存在する可能性が極めて高い。

まず、今回確認した掘立建物跡の時期、性格についてだが、本文中にも記したが、それを明確にする建物が掘立建物跡を構成している柱穴から全く出土していないため不明だが、2つの方向性が考えられる。ひとつは、縄文時代前期後半の時期に所属すると考えられる第2号竪穴住居跡以降の縄文時代の掘立建物跡の可能性が考えられる。しかし、これは今回の調査で出土した遺物や遺構が第2号竪穴住居跡とほぼ同一時期ないしはその時期以後のものが主体で、ある程度限定された範囲の中に収束されており、その時期の遺構を切って構築されているこの掘立建物跡を縄文時代のものとして考えていくには周囲の状況が不明であることも含め可能性としては低いと思われる。ただし、全く否定されるべきものでもないことは最近の調査で各地で縄文時代の掘立建物跡が検出されていることを考慮していかなければならない。もうひとつの

方向は、遺跡のほぼ中央部に現在もある華嚴院を含めた鎌倉末からの中世の時代背景との関係である。華嚴院は当初は閉伊川の対岸にある根城跡の一画に建立されたのが、延徳元年（1489）に現在地に再建されたものである。そり以前は田久佐利氏の屋敷跡であったという。そもそも花原市という地名は、「毛馬市」（馬の市）から変化したものといわれており、事実、当遺跡を含む閉伊川原一帯は鎌倉時代は閉伊氏の牧野であった。ここで馬の市が開催される時は鎌倉をはじめ、関東各地から馬買人が集まったという。また、華嚴院が再建された後は閉伊第一の大寺として隆盛を極めたといわれている。（註）このようなことからこの掘立建物跡は、この当時のいずれかにかかわる建物跡の可能性が考えられる。また、出土遺物からも縄文時代以外のものであれば、古代の土師器・須恵器は1片も出土しておらず古代の建物跡とは考えられず、むしろ14世紀代の青磁片や「至大通寶」（初鑄が1309年）が出土していることから年代的にも合致する。鎌倉末以降の田久佐利氏の屋敷跡か牧野と馬の市か華嚴院か、いずれかにかかわる建物跡としての考えた方の可能性が高いと思われる。

（註）『古城物語』田村忠博 1986 文化印刷による。

2 遺物について

土器・石器などの遺物が出土しているが、大半は第1号竪穴住居跡の埋土中からのものであった。土器については、復元できたのが1個体だけで99.9%が破片であり特別新たな知見も得られなかったので、石器を中心にまとめとする。

(1) 土器について

今回出土した土器の主体は縄文時代前期後半から中期初頭そして中葉の大木7～8式のものであったが、7式を中心としている。遺構の大半もこの時期に伴うものといえる。個々についての詳細は本文中にも記しているし、また、器形や器種などのわかる資料がわずかであるので深入りはしないこととする。

(2) 石器について

今回の調査により出土した石器は、若干前期に伴う土器も出土しているが、ほとんどが中期初頭～前半に伴う土器であった。このようなことからこれらの石器は、1型式から2型式という短い期間の様相（中期初頭～前半期）を示しているものと考えられる。宮古市内では、高根遺跡もほぼ同様の時期の遺物のみで当遺跡との比較検討できるものである。

a 石材について

今回の調査では、調査面積が少ないということでひとつの試みとして出土したすべての石を石器であろうがなかろうが収集した。その意図としては、どのような石を持ちこんでいるのか、また、それらが石器特に礫石器にどのように反映しているのか、そしてその石材を入手するための交易・行動範囲がどこまでなのかなどについて探ろうというものであった。結果としては、僅か100㎡たらずの面積であったが、その数があまりにも膨大なものとなり意図した分析が十

分にできなかった。

石(礫)は、現状が畑地ということもあり表土中のものはほとんどなかった。大半が遺構の埋土中からのものであった。

石材としては、流紋岩、凝灰質硬砂岩、凝灰岩、結晶片岩、デイサイト、デイサイト質凝灰岩、粘板岩、粘板岩(ホルンフェルス)、硬質泥岩、チャート質泥岩、チャート、石英、片麻岩、花崗閃緑岩、閃緑岩、泥質細粒の凝灰岩、凝灰質泥岩、黒燿石、赤褐色凝灰岩、結晶質石灰岩、輝石ひん岩、安山岩溶岩(軽石)、珪化木と23種類以上が確認された。それらの地質学上の年代及びその産地は次のとおりである。

	石 材	石材年代	石材産地		石 材	石材年代	石材産地
1	流 紋 岩	古生界	門神	13	片 麻 岩	古生界	田老~宮古
2	凝 灰 質 硬 砂 岩	古生界	岩泉	14	花 崗 閃 緑 岩	不明	宮古以南
3	凝 灰 岩	古生界	岩泉方面	15	閃 緑 岩	不明	門神
4	結 晶 片 岩	古生界	閉伊川流域	16	泥 質 細 粒 凝 灰 岩	古生界	岩泉方面
5	デ イ サ イ ト	古生界	門神	17	凝 灰 質 泥 岩	古生界	岩泉
6	デ イ サ イ ト 質 凝 灰 岩	古生界	門神	18	黒 燿 石	不明	不明
7	粘 板 岩	古生界	閉伊川	19	赤 褐 色 凝 灰 岩	古生界	岩泉方面
8	粘板岩(ホルンフェルス)	古生界	岩泉地方の海岸	20	結 晶 質 石 灰 岩	古生界	岩泉
9	硬 質 泥 岩	古生界	岩泉方面	21	輝 石 ひ ん 岩	白亜系	不明
10	チャート質泥岩	古生界	岩泉	22	安 山 岩 溶 岩	第四紀火山	不明
11	チャート	古生界	岩泉	23	珪 化 木	不明	不明
12	石 英	不明	不明				

上記の一覧表をみてもわかるように、石材の産地、即ちその入手先としては岩泉方面から閉伊川流域そして一部は海岸部にまで及んでいるが、全体的な傾向としては当遺跡が立地する地質的な環境に即した石材が搬入されていることが指摘できる。それが当遺跡の人々の基本的な行動範囲(テリトリー?)を示すものとも考えられる。

さて、これらの石材は剥片石器として利用されるものと礫石器として利用されるものに分類されそうである。剥片石器としては泥質細粒凝灰岩、凝灰質泥岩、黒燿石、赤褐色凝灰岩、硬質泥岩、チャート質泥岩、チャートが、礫石器としては流紋岩、凝灰質硬砂岩、凝灰岩、デイサイト、デイサイト質凝灰岩、粘板岩、粘板岩(ホルンフェルス)、硬質泥岩、花崗閃緑岩、閃緑岩などが利用されている。今回の調査区内では、剥片石器に使用されている石材がある程度の塊としてはほとんど出土していない。このことから考えられることは、製品もしくは半製品として搬入したか、あるいは今回の調査区以外のどこかにか製作の場があるのかの2つの考え方ができるが、今回の調査結果だけをみていくと数千点という膨大な石材(石、礫)の中でもほとんど出土していないことから前者の可能性が考えられるが、他の遺跡のデータや当遺跡の集落全体の把握がなされなければ結論は出せないと思う。しかし、このような問題は今後の遺跡の調査においては十分に考慮していく必要があるのではと思われる。

次に剥片以外の破損していない自然礫の長径と重量の散布状況を示したのが、第51図~第54

行動範囲

図である。一応、形状を扁平円礫①（楕円形状）、扁平円礫②（円形状）、三角形状礫、不定形礫に分類した。これらの散布図をみてわかるように、飛び抜けて大きいものはほとんどなく手軽に運搬できるものが主体を占めている。これらの石（礫）を加工して石器としているものと思われ、主として石器の材料としてかなり多量で多種類の石が持ちこまれているのがわかる。中でも今回の分析では、礫石器のうち石錘と敲石・敲打磨石について同じように散布図を作成したが、いずれも長径、重量の大きいものについては石器として利用されてる例が多く、小さいものについては、石器として利用してない場合が大半である。このことは、崎山貝塚や白石遺跡、高根遺跡などでもほぼ同様な傾向を示しており、遺跡に石材を持ちこむ際には小さいものについてある程度無作為に、大きいものについては意図的に搬入している可能性が高い。また、特異な石材、例えば黒燧石、輝石ひん岩、結晶質石灰岩、石英などは破片ないしは極く小さな形あるいは製品として搬入している。その他、安山岩溶岩（軽石）や珪化木といった化石までも持ちこんでおり、当時の交易ないしは行動範囲が広範にわたっていることも指摘できる。

本来であれば、当初の意図に基づき詳細な分析を試みたかったが、時間的な制約が大きく何らかの機会にもう一度行ないたいと思っている。

b 石器の組成について

今回の調査では、日常的に使用されたと思われるほとんどすべての器種が出土しているといえる。しかし、ほとんどが遺構の埋土から散在的に出土しているもので、石器の組成としては十分に把握されるものではないと考えられるが、ここでは1住居跡である第1号竪穴住居跡の床面出土の石器について考えるみる。

組成

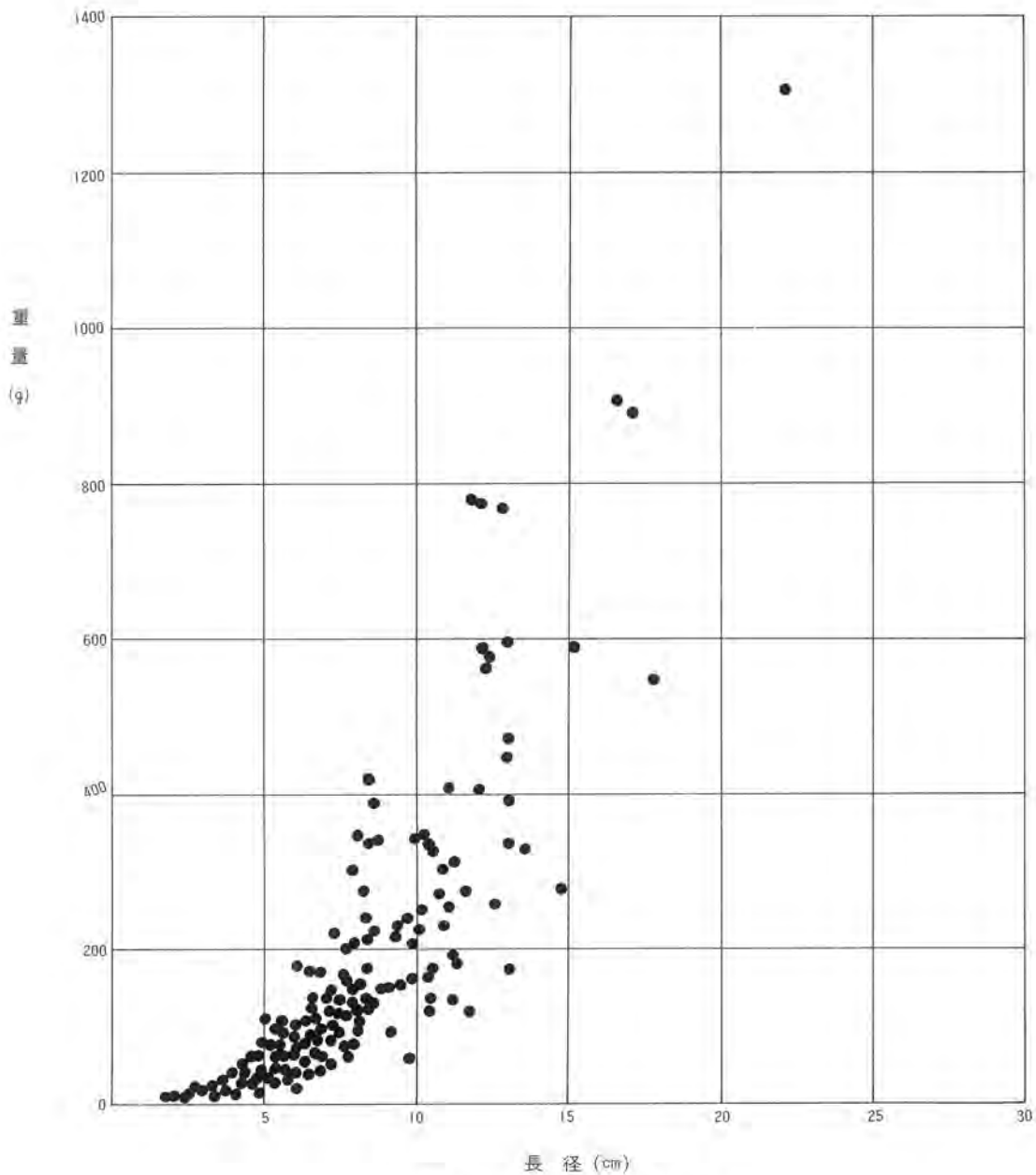
石器の組成については、各方面で様々な方法での研究がなされている。地域的または年代的な大きな視野で考えるものや、1集落や1住居跡などといった狭い範囲で把握し積み上げていく方法などがあるが、どちらもその目的は当時の生活活動の復元にあるもので、それが地域的・年代的あるいは遺跡周辺環境によりその組成に変遷がありそれをたどることにあると思われる。

石器の組成を考えていく上では必然的な大きな制約が伴う。即ち、石器の使用される場が違うものがあり、その遺存率に違いがあるということがある。今回の調査では当然ながら集落全体の様相は語ることができず、また、調査範囲が狭いという限界もあり第1号竪穴住居跡の石器についてのみ言及する。更に、埋土中からは僅かではあるが前期の土器も出土しているため、あえて床面出土に限定した。これらは、量的には少なくとも当住居跡のある一時期の状況を示しているものと考えたからである。

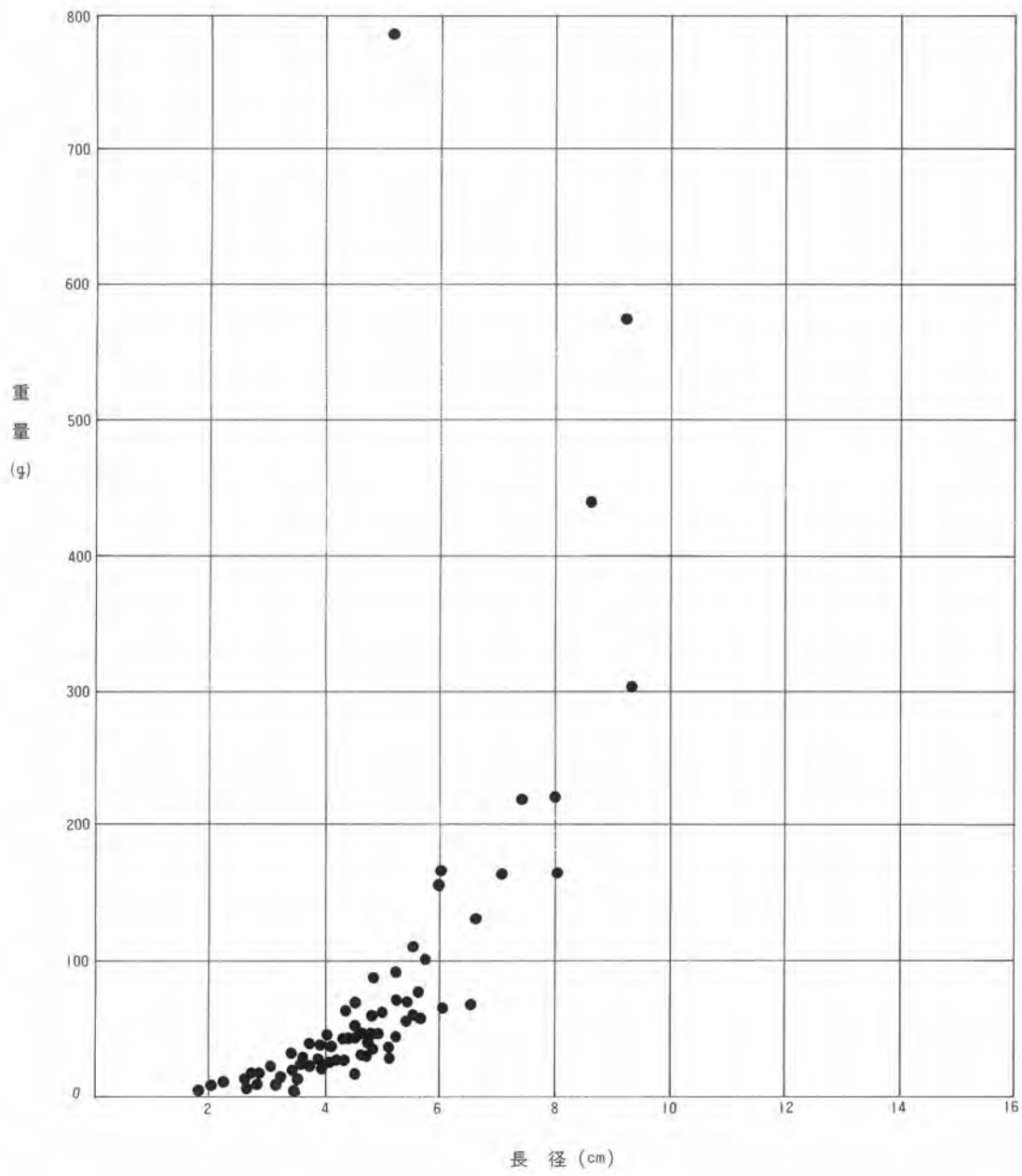
さて、その内容をみると石鏃7、石槍1、石匙1、石錐1、石錘6、打製石斧1、敲石4、敲打磨石2、石皿1、削搔器類、石錘、敲石が目立ち次の様なことが考えられる。①石槍も含め石鏃と削搔器類から狩猟活動が盛んであること。②礫石錘から漁労活動があったこと。（今回出土した石錘の用途については諸説あるが、本章のdの項で記している）③敲打磨石と石皿の存在から植物加工があったこと、などが指摘できるが、特に①と②がきわだっていると思われる。その中でも②の礫石錘を伴う漁労活動が今までの宮古市内の遺跡では確認できなかった

礫石錘

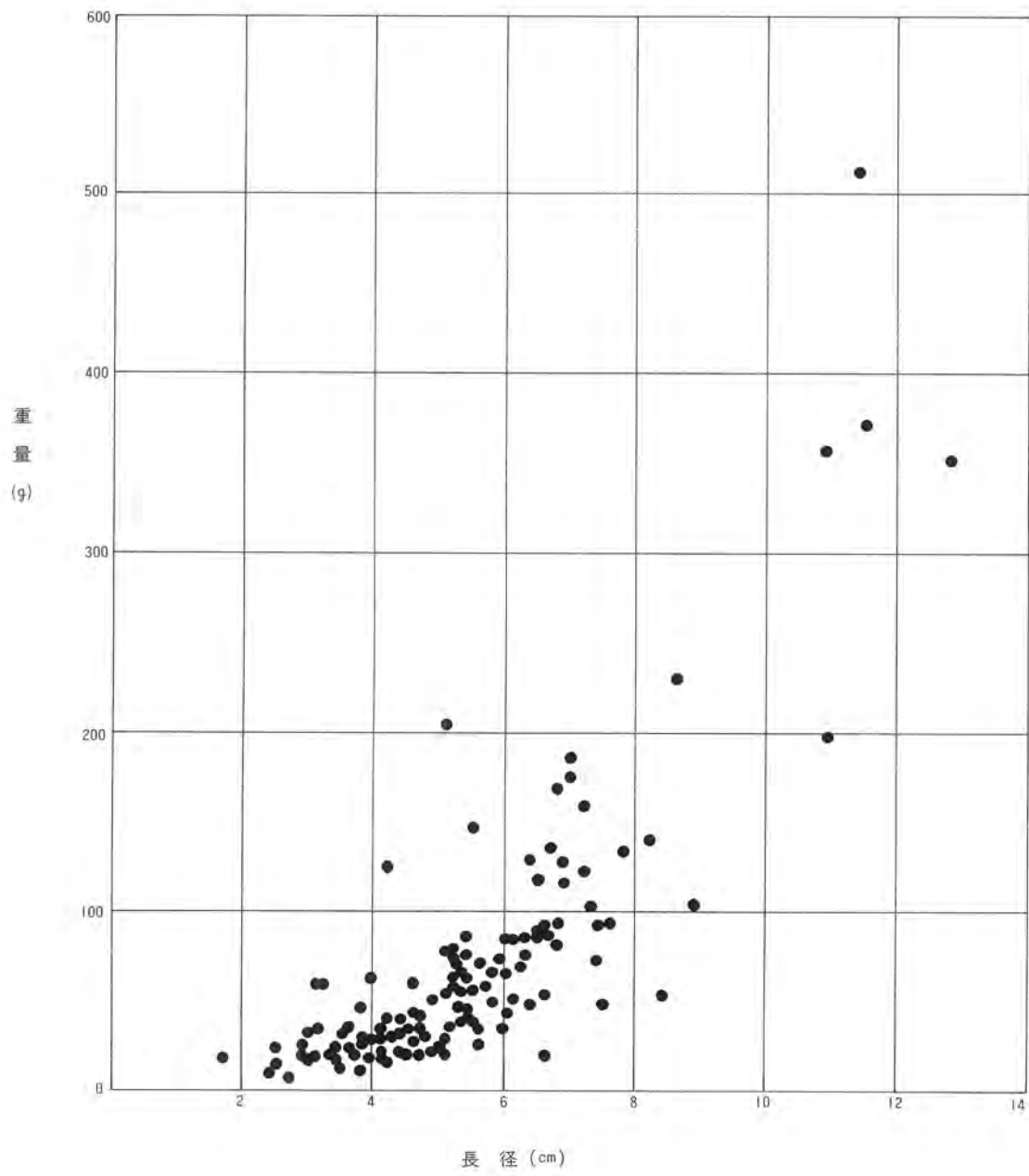
ことである。このことは、閉伊川という大河川に面するという遺跡の環境・立地条件を如実に反映されているものと考えられるもので、今までこのような環境下にある宮古市内の縄文時代の遺跡の調査がなされていなかったということだけなのか。あるいは当遺跡の集落の持つ性格なのかまだまだデータ不足であるため多くは語れない。それは、宮古市内にとどまらず閉伊川の上流域である新里村、川井村における状況が把握できない（できる資料がない）ため、閉伊川流域に今まで調査されてきた崎山貝塚などの海岸部の遺跡とは様相を異にする文化圏？があるのか今後の課題として提示するだけにとどめておきたい。



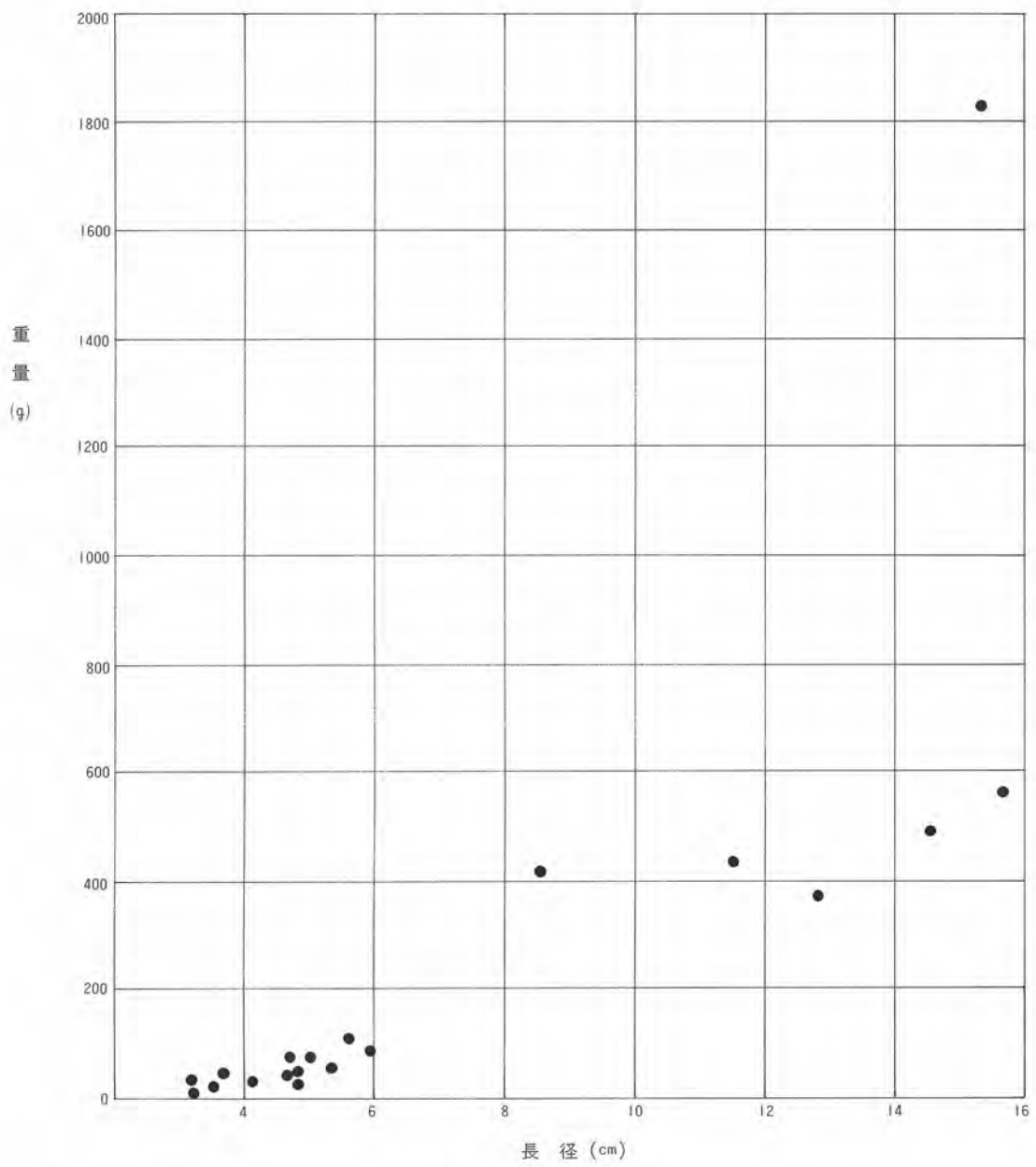
第51図 扁平円礫①散布図



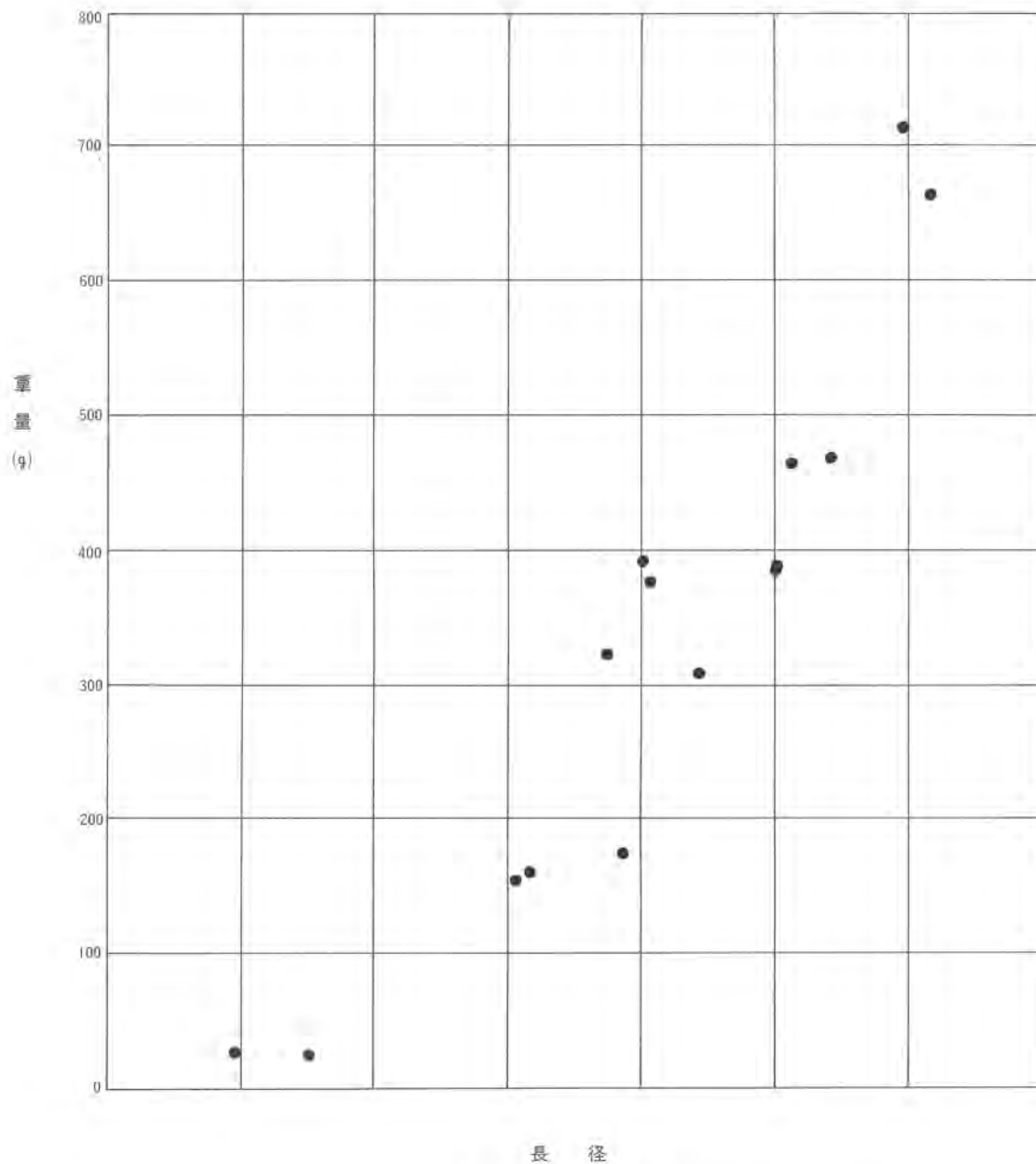
第52図 扁平円盤②散布図



第53図 三角形礫散布図

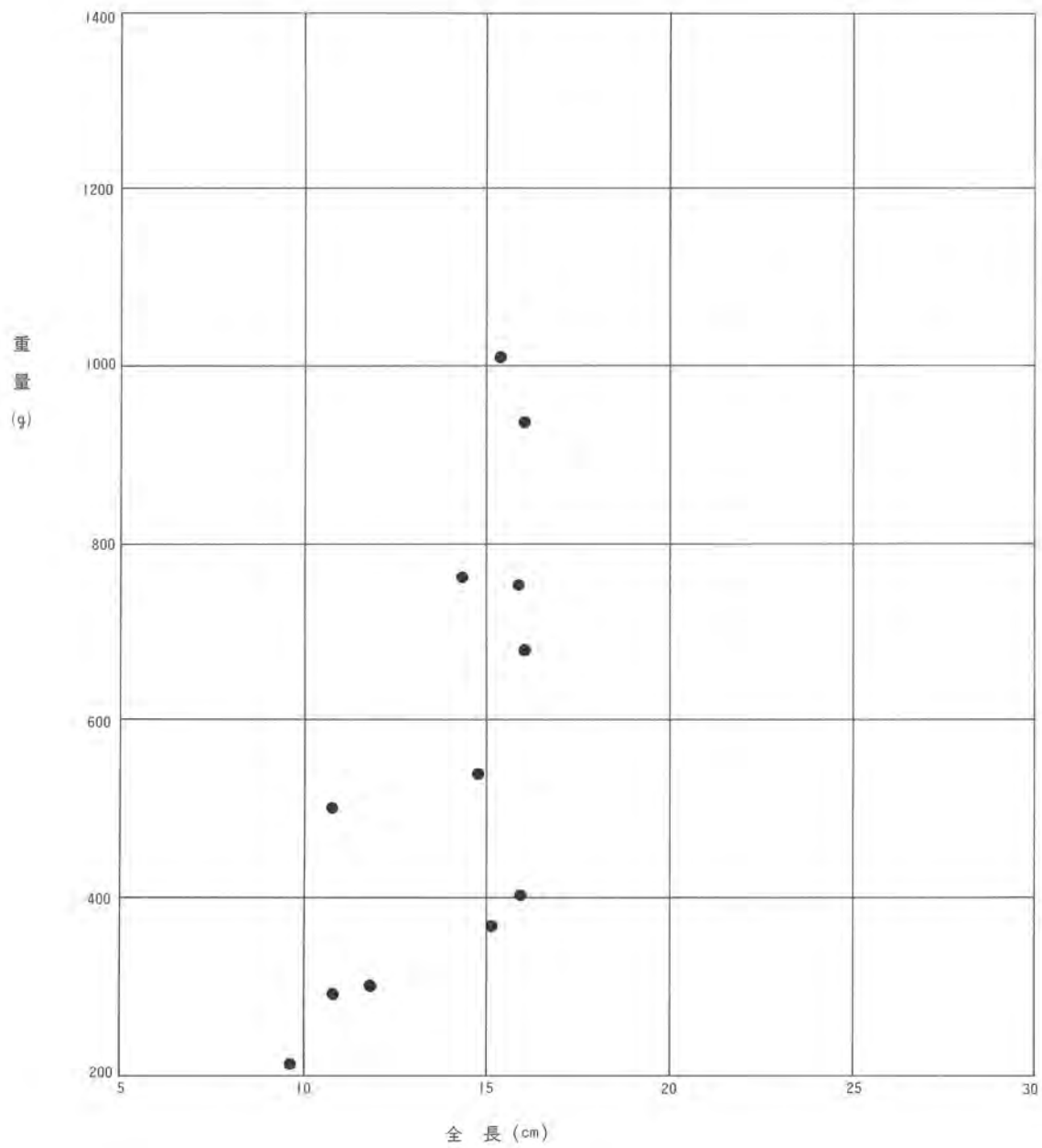


第54図 不定形礫散布図



第55図 石錘散布図

礫石錘について追記するならば、前述したとおり『崎山遺跡群 IV』で高橋が2つの分布状況に言及している点に関しては、筆者も含め見落としていたが、宮古市に北隣する田老町内の小堀内I遺跡から楕円形礫の長軸方向を打ち欠いただけの石錘が43点も出土している。時期的には共伴土器から前期初頭のものである。この点からも改めて高橋の言う岩手県沿岸南部から中部域にかけての扁平円礫（浜石）の在り方と当該地域の過去の表採資料などの再調査が必要になってくるものと思われる。また、最近の三陸縦貫道がらみの岩手県沿岸部の遺跡の調査結果も今後見ていかなければならない。確かに、高橋の言うような傾向性はそれなりに説得力があり、小堀内I遺跡や当遺跡が例外的なのかもしれないが、それらを十分に吟味したうえで、時期的あるいは地域性、そしてなにより拠点的な集落とそうでない集落との関連性があるのかなどといった問題を内在していると思われるので、再度この問題については今後の資料の蓄積を待ち考えていきたい。



第56図 敲石・敲打磨石散布図

c. 剥片石器について

石鏃を中心に多数の剥片石器を出土したが、特に所謂定形的なものとしては石鏃の出土が突出している。

石鏃は弓矢の矢先として縄文文化の確立を象徴する遺物としてひろく認識されているものであることはいうまでもなく、過去様々な形での分析、研究がなされている。形態的には大きく分類して、基部が無柄と有柄があり更に平基、凹基、凸基に分けられる。これに側縁部の形や形態的なバリエーションなどを加味し幾つかの細分がなされている。それによって時期的あるいは地域性、更にはそれによる狩猟体系・生産活動の在り方を解明していこうという方向性を見出し、いこうというものと思われる。

さて、今回の当遺跡の調査では完存、破損を含め78点の石鏃を出土したが、細かい形態分類をすれば、もっとバリエーションのあるものとなるのは承知だが、ここでは大分類だけでみていくが、有柄のものが僅か1点だけで残る77点は無柄のものであった。更に、この無柄のうち55点は抉入の深浅は別にしても凹基で平基のものは22点と少ない。法量的な観点からみると、第58図のようにかなりばらつきがあるが長さは20~30mm前後、最大幅は13~16mm前後、最大厚は3.5~6.0mm前後、重量は1.5~3.0g前後のものが主体を構成しているようである。長径と重量の散布状況を示したのが、第57図である。石材をしてみると泥質細粒凝灰岩、硬質泥岩、凝灰質泥岩、チャート質泥岩の4種類あり、いずれも古生界の北部北上帯のもので産地は岩泉ないしは岩泉方面である。

このような石鏃の様相は、前記したほぼ同時期の高根遺跡においても同様な状況を呈している。一方、重茂半島の東岸の海に面し位置する前期初頭の集落遺跡である千鷲遺跡では、有柄のものはなく、無柄で凹基が10点、平基が27点とその様相を異にしている。これは遺跡の立地環境の違いも考慮しなければならないが、少なくとも前期と中期の遺跡における石鏃の在り方の何らかの相違を反映しているものと思わせそうなデータのひとつと思う。市内には崎山貝塚をはじめとする縄文時代の遺跡の調査例が多々あるが、拠点的な大規模な集落で各時期にまたがった遺跡の調査が多く、当遺跡や高根遺跡、千鷲遺跡のようにほぼ比較的短い期間だけの遺物出土する遺跡の調査例が少ない。

このような様相の違いがそのまま生産活動である狩猟相などの相違あるいは製作技術的な面や時期的な変遷などに反映できるものかは、現段階ではあまりにも比較検討できるデータが極端に少なすぎる。今回は他のデータ収集が時間的な制約のためできず、今後の重要な検討課題としたい。なお、層位的に分層発掘調査がなされている崎山貝塚のデータは現在分析中で、今後このようなデータを比較検討の対象としていけば、少なくとも宮古市内の状況はある程度把握されてくるものと思われる。

石鏃以外の剥片石器については、出土量が石鏃と比較しあまりにも少なく検討できなかったが、逆にいうと石鏃の突出が今回の調査地点での最大の特徴とも換言できるのではないかと思われる。その中であって気になる点を1、2点あげてみる。

第1点は第1号竪穴住居跡の床面から出土した大型の石槍（第17図 205）である。石槍はいうまでもなく槍の先で一般的には大型獣の捕獲に使用されたものといわれている。たった1点だけの出土であるが、住居跡の床面から出土している点が注目される。これと同様な事例がほ

石鏃

高根遺跡

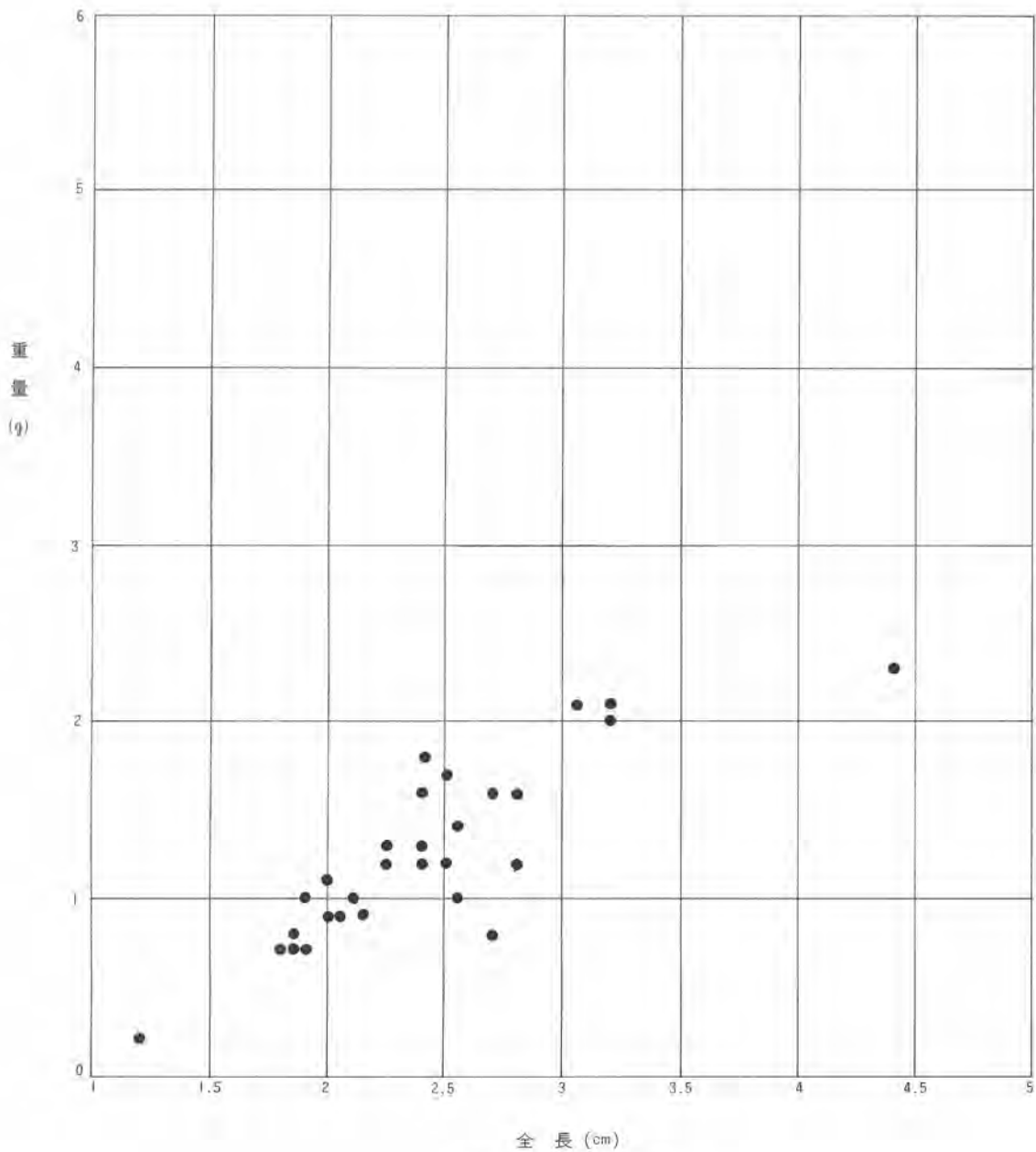
千鷲遺跡

石槍

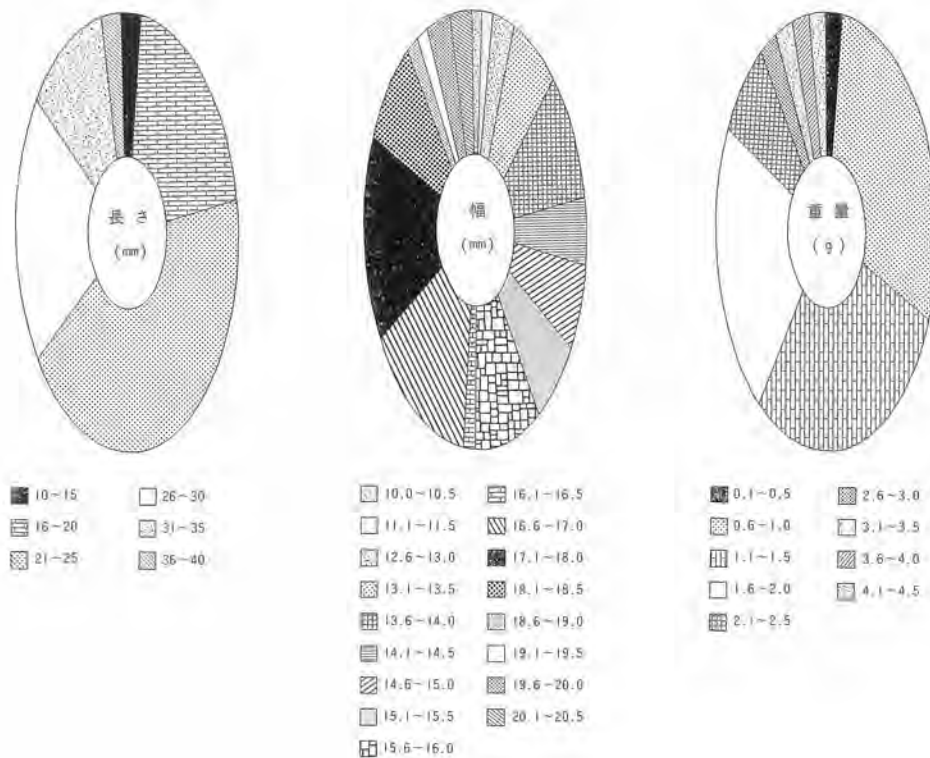
は同時期の高根遺跡の竪穴住居跡でもみられた。報告書では大型の石匙 or 石槍（ポイントと記述）としたが、後者の可能性が高くやはり床面出土であった。

筥状石器

第2点は筥状石器である。やはり、第1号竪穴住居跡埋土（A1層）から出土したものであるが、このうち小型のもの（第20図、237、239、246）は石槍と考えてもよいものと思われた。もしこれらを石槍と考えると、前述の床面出土の大型のものが小型化していく過渡期?とも考えられる。この2点についても検討課題としておきたい。



第57図 石鏃散布図



第58図 石鏃計測値一覧図

d 礫石器について

礫石器も色々な器種が出土しているが、注目されるのは礫石錘である。というのは、何度も記すが、宮古市内の遺跡から今まではこのような礫石錘の出土が皆無といってもよいほどの状況であったからである。この点に注目し高橋は『崎山遺跡群 IV』で遺跡から出土する使用痕跡の全くない扁平円礫（浜石）に着目し、それらの一部が礫石錘の用途をなすものと考え、しかもその分布が岩手県の沿岸部南部から中部域に限定され、礫石錘が使用される内陸部の北上川から馬淵川を北上し八戸市周辺との2つの分布状況まで言及している。しかし、今回当遺跡から内陸部で出土するものとほぼ同様な礫石錘が出土したことは新たな問題提起となるものと思われる。また、別観点から考えると何故このような礫石錘を使用した当遺跡の集団がいたにもかかわらず、それが市内でも特に海岸部の遺跡まで波及していないのかという問題の提示もできる。（註1）

さて、今回出土した礫石錘の特徴をしてみると時期的には中期初頭の大木7式に伴うものと考えられる。また、第55図のように小型のものから大型のものまで分散傾向にあるが、全長が10cm以上、重量が300gを超えるものが多いようである。形状は小型のものは楕円形が大型のものは円形状を呈するものが多い。ただし、小型のものは石錘として認定されない可能性のものもあるかもしれない。側縁部は短軸方向に両面ないしは片面から数回の剥離を施しているものが多い。石材としては、デイサイトや粘板岩、流紋岩など閉伊川及びその流域（門神は、

礫石錘

『崎山遺跡群
IV』

当遺跡の東側に位置している)のものが多く、このように比較的大型で側縁部を剥離しただけの石錘は、所謂漁網のおもりとして使用されたと想定されている切目石錘や有溝石錘とは異なりその一部は、編物を編む際のおもりとして使用されたという見解もあるが、今回のデータを見る限り、編物を編む際のおもりとしてはやはり大きすぎるのではと思われる。

当遺跡は立地と環境の項にも記したとおり、閉伊川が大きく蛇行する比較的流程がゆるやかな位置にある。閉伊川は淡水魚の宝庫といわれており、その魚相としては、ウナギ、ヤマメ、コイ、ウグイ、アユなどが現在でも多く(一部は放流)、近世の頃まではサケ、マスの漁も相応に行われていた。縄文時代の当時も当然、サケ類などの溯上もあつたものと十分考えられる。事実、市内の貝塚では、崎山貝塚と宮古湾の閉伊川河口部に面する鯨ヶ崎館山貝塚からサケ類の遺存体が出土している。この中で当遺跡から出土している石錘との関連で注目したいのは、サケ・マス類である。サケ類は溯上中はほとんど食餌せず、ながれのゆるやかな石と礫の河床で産卵するという習性があり、その捕獲方法にはヤスで突くほかに大量に捕獲するとすれば網漁法による方法しか考えられない。当遺跡は、まさにサケ類の産卵場所としてふさわしい場所にあり、当然何らかの形でこれらを捕食していたことは否定されないと思われる。

このようなことからすれば、当遺跡の比較的大型の石錘が編物を編む際のおもりでないとするならば、まさにサケ類の産卵場所として適当な位置に立地していることから、サケ類の捕獲網のおもりとして使用された可能性を考えたい。(註2)

更に、礫石錘とともに注目したいのが安山岩溶岩(軽石)である。今回出土したものには穿孔や溝を付すような明瞭な痕跡は確認されなかったが、浮子として利用する目的で搬入した可能性が考えられる。市内の縄文時代の遺跡では金浜I遺跡(『金浜I・大付 92』)から出土しており、更に高浜IV地神遺跡(『宮古市分布調査報告書 2』)から表採されているが、ほとんど出土していない。礫石錘との関連で考えられるならば、当然、漁網用の浮子としての用途が考えられるが、礫石錘同様データが不足しており、早急な結論は避けて今後の検討課題としたい。

(註1) 83Pに続く

(註2) 江戸時代の記録にも閉伊川のサケ漁についての記事があり、花原市付近でもサケ漁をしていた。それは、“川ひきあみ”(刺し網漁)であったという。(『市史 漁業・交易』)

(3) 火山灰について

今回の調査では第4号土壇跡(フラスコピット)から、灰白色の火山灰が検出した。遺構の埋土の一部であり、今回の調査区内の他の遺構からは発見されなかった。

出土状況を見ると明らかに再堆積(2次的に動いている)したものと考えられる。この火山灰は安家火山灰といわれるもので、県内の遺跡では遠野市の高瀬I遺跡の陥し穴跡でも確認されている。また、今回当遺跡とともに初めて市内の崎山貝塚でも確認された。安家火山灰は年代的には今から5500年前の縄文時代前期末に比定されているもので、この点については第4号土壇跡から出土している土器群の様相とほぼ一致しており矛盾はない。また、安家火山灰はその噴出時間の始まりと終わりまでの時間幅と噴出源からの遠近などにより、a(初期)、b(第I期)、c(第II期)、d(第III期)、e(第IV期)の5層に分類されている。その特

徴は、粒が粗らく発泡性のガラス質の鉱物が多くオレンジ色系である。

今回当遺跡から出土したものは、5層のうちc（第Ⅱ期）に、また、崎山貝塚のものは当遺跡のひとつ下のd（第Ⅲ期）に相当するもので当遺跡のものよりオレンジ色が強いものであった。今にして思えば、昭和63年（1989）に調査した高根遺跡（『高根 89』）で検出した基本層序Ⅲb層とした明黄褐色土を大量に包含する土層も安家火山灰に相当するものと思われる。高根遺跡のものは崎山貝塚のものと同様オレンジ色が強いものであった。

宮古市内でもこのように火山灰が確認されたということは、土器の編年や集落の変遷などを考えていくうえでは貴重なデータであり、また、一調査員としても火山灰についての若干の知識が得られ、今後の調査による更なるデータの収集にあたりたい。

なお、この火山灰の項を記述するに際しては、(財)岩手県文化財振興事業団岩手県埋蔵文化財センターの菊池強一氏並びに高橋興右衛門氏からの多大なるご教授をいただきたい。

(4) おわりに

今回の調査は僅か100㎡という狭い面積であったにもかかわらず多大なる成果があったものと確信している。遺構としては大型竪穴住居跡の検出、遺物としては礫石錘の出土など宮古市内でははじめての資料となり、これらも含め様々な問題提起がなされたと思っている。また、安家火山灰の確認も重要なデータとなった。しかしながら、筆者の勉強不足からより深い角度での分析ができなかったのも事実である。

今後はこれらを基礎データとして更なるデータの積み重ねにあたっていきたいと思っている。

《参考・引用文献》

- 1980 『宮古の自然』 宮古市刊行
- 1974 『宮古のあゆみ』 宮古市郷土誌編集委員会編 宮古市刊行
- 1974 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 田老 宮古』 岩手県刊行
- 1982 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正 『岩手の土器』 岩手県立博物館
- 1982 相原康二 『岩手県文化財調査報告書第70集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(江釣子村鳩岡崎遺跡)』 岩手県教育委員会
- 1994 小向裕明・佐藤浩彦 『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』 遠野市教育委員会
- 1983 加藤晋平・小林達雄・藤本強編集 『縄文文化の研究 2 生業』 雄山閣
- 1983 加藤晋平・小林達雄・藤本強編集 『縄文文化の研究 7 道具と技術』 雄山閣
- 1987 渡辺 誠 『縄文時代の漁業』 雄山閣
- 1981 鈴木道之助 『図録石器の基礎知識 Ⅲ』 柏書房
- 1983 大原一則他『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県埋蔵文化財センター

カラー図版



第4号土塙跡火山灰出土状況



同上(拡大)



第 1 号竖穴住居跡 (完掘)



同 上

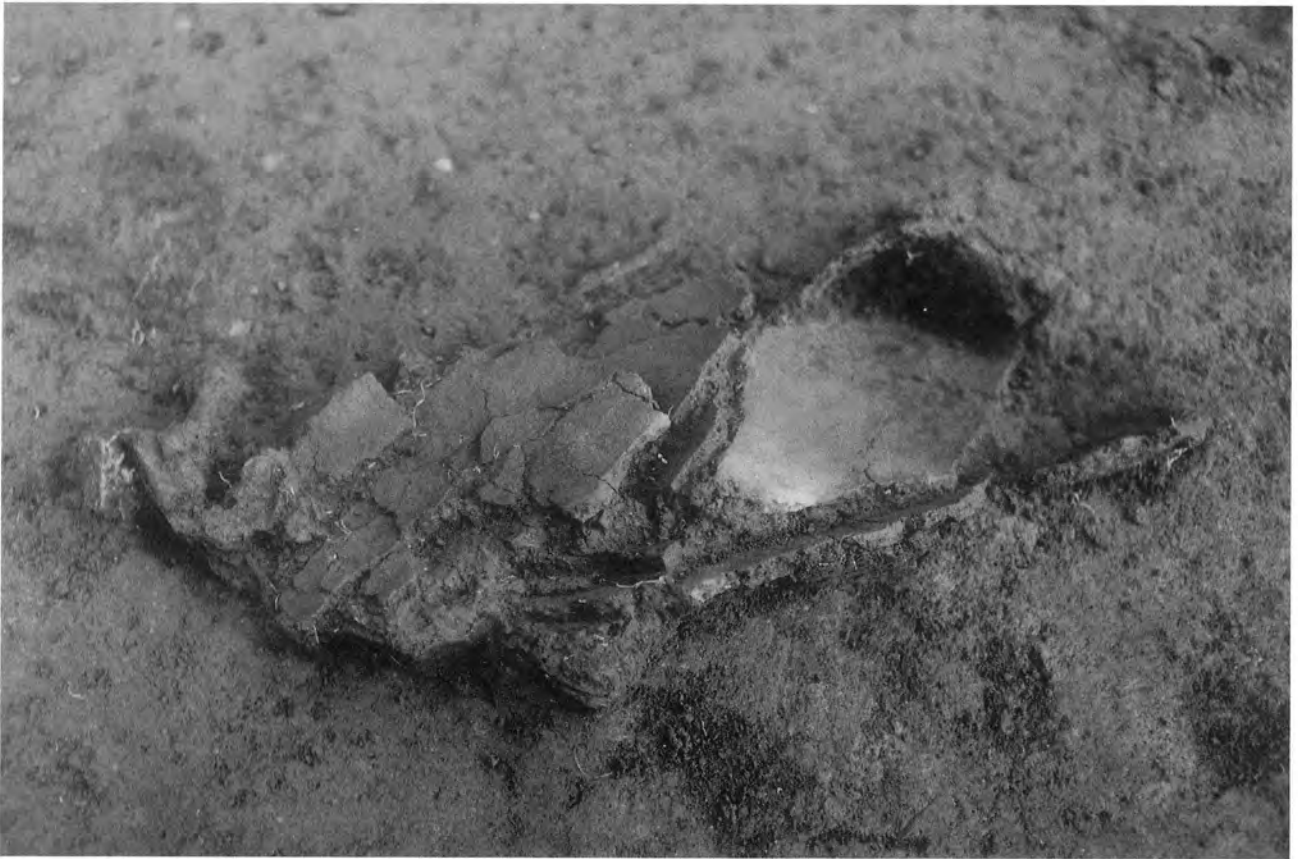
第2図版



第1号竖穴住居跡土層断面



同上

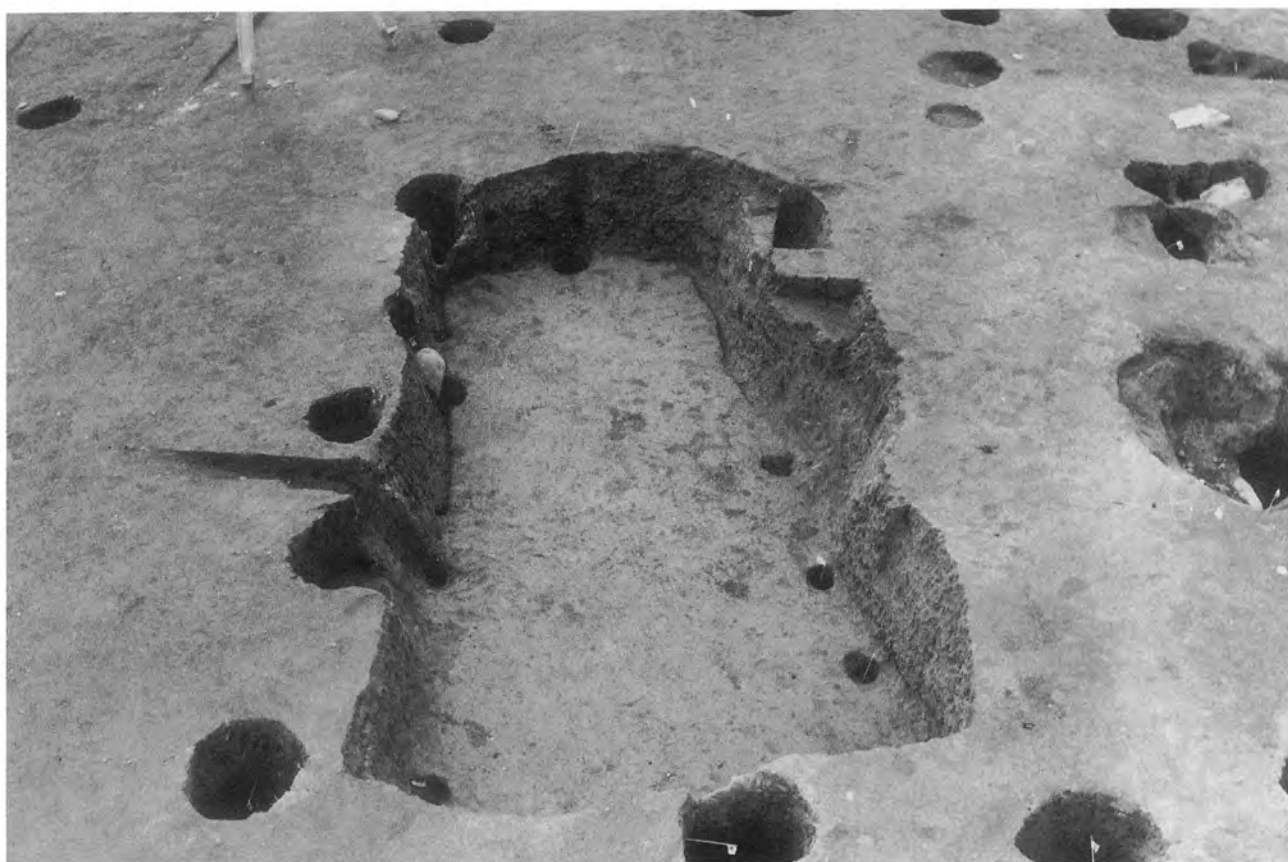


第1号竖穴住居跡土器出土状況（第11図1）



同上 床面上の立石？

第4図版



第2号竖穴住居跡（完掘）



同上 土層断面



第2号竖穴住居跡土層断面



同上

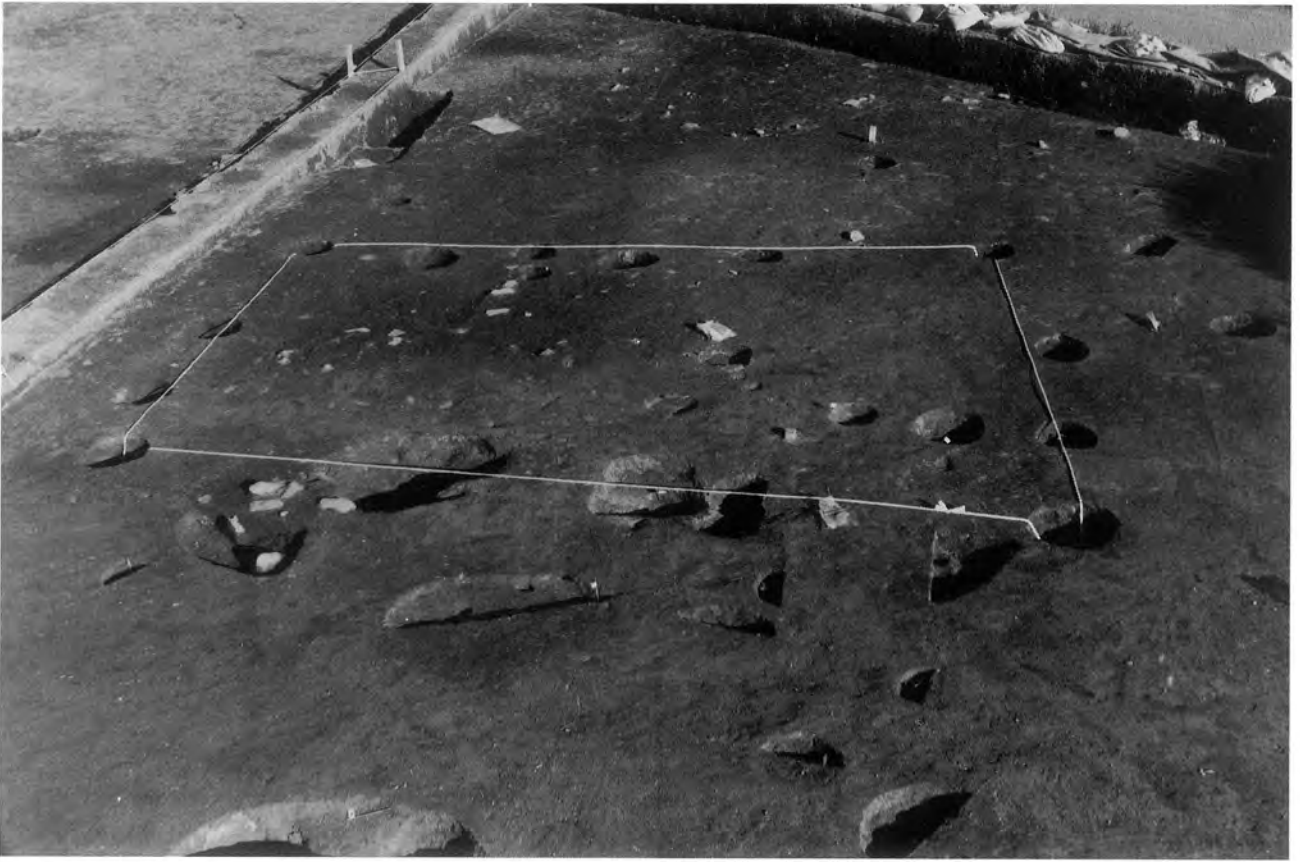
第6図版



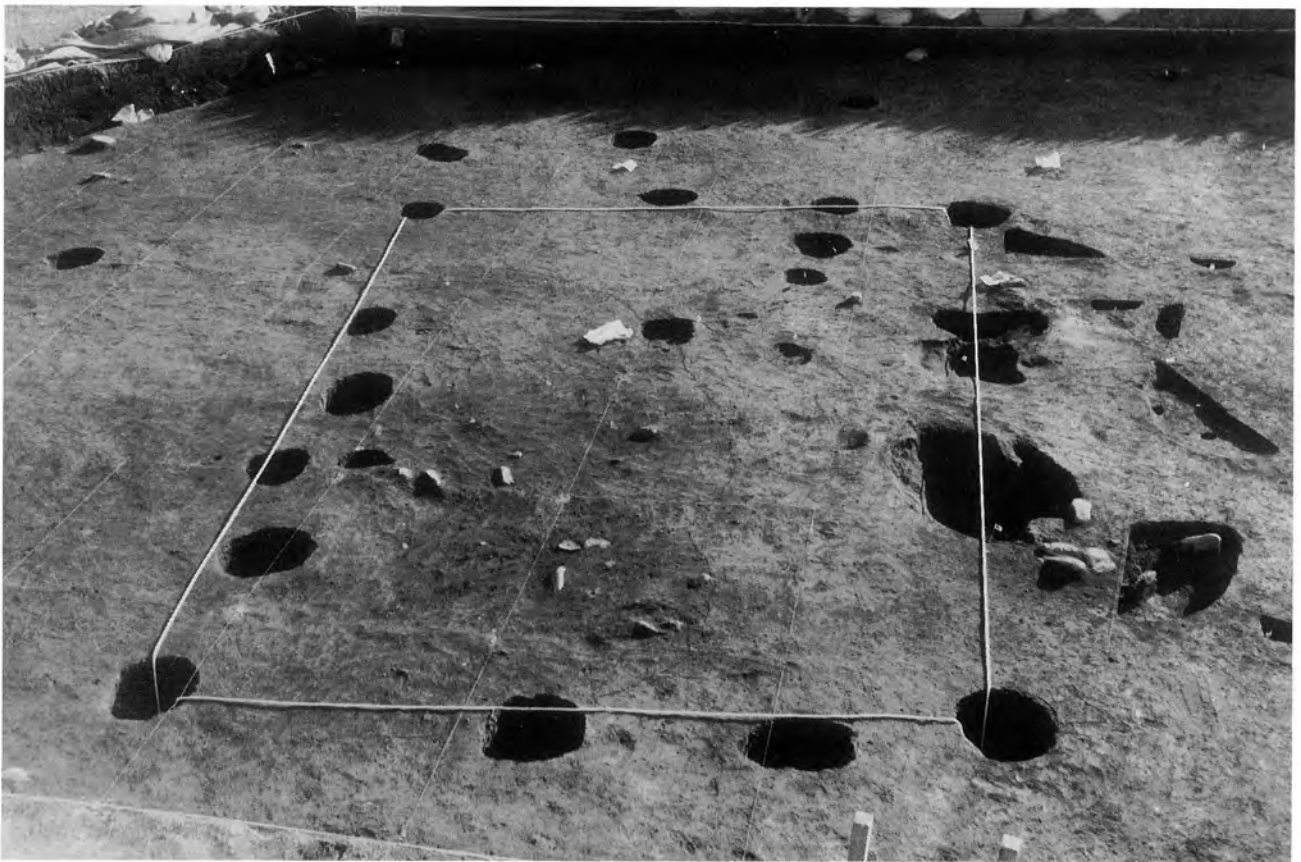
第1号掘立柱建物跡周辺の柱穴跡検出状況



同上 柱穴跡 (P40)



第1号掘立柱建物跡



同上

第8図版



第3号竖穴住居跡



第2号土坛跡集磔（I期）



第2号土坛迹集礫（Ⅱ期）



同上（Ⅲ期）

第10図版



第 3 号 豎 穴 跡

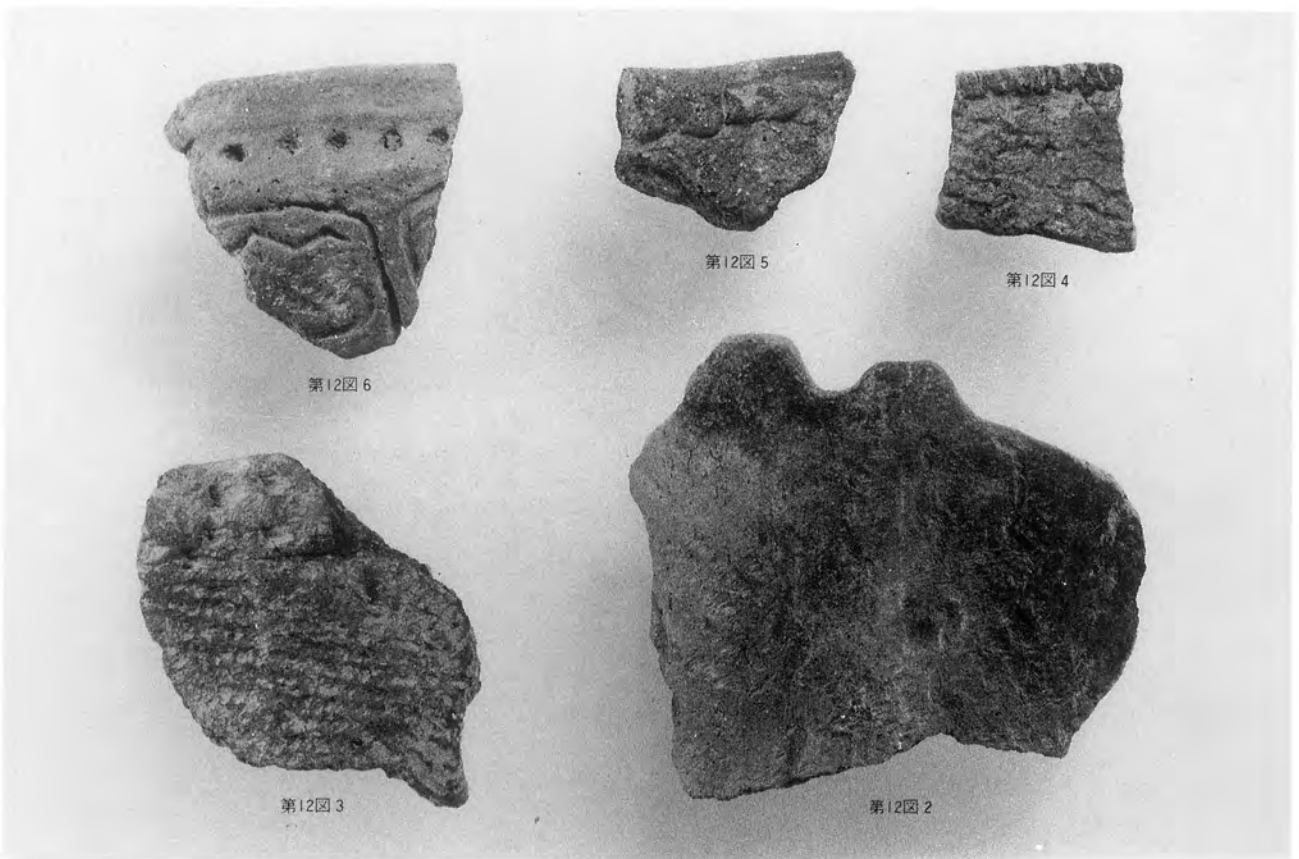


第 4 号 土 坛 跡 土 層 断 面



第11図 1

第1号竖穴住居跡出土土器（床面）



第12図 6

第12図 5

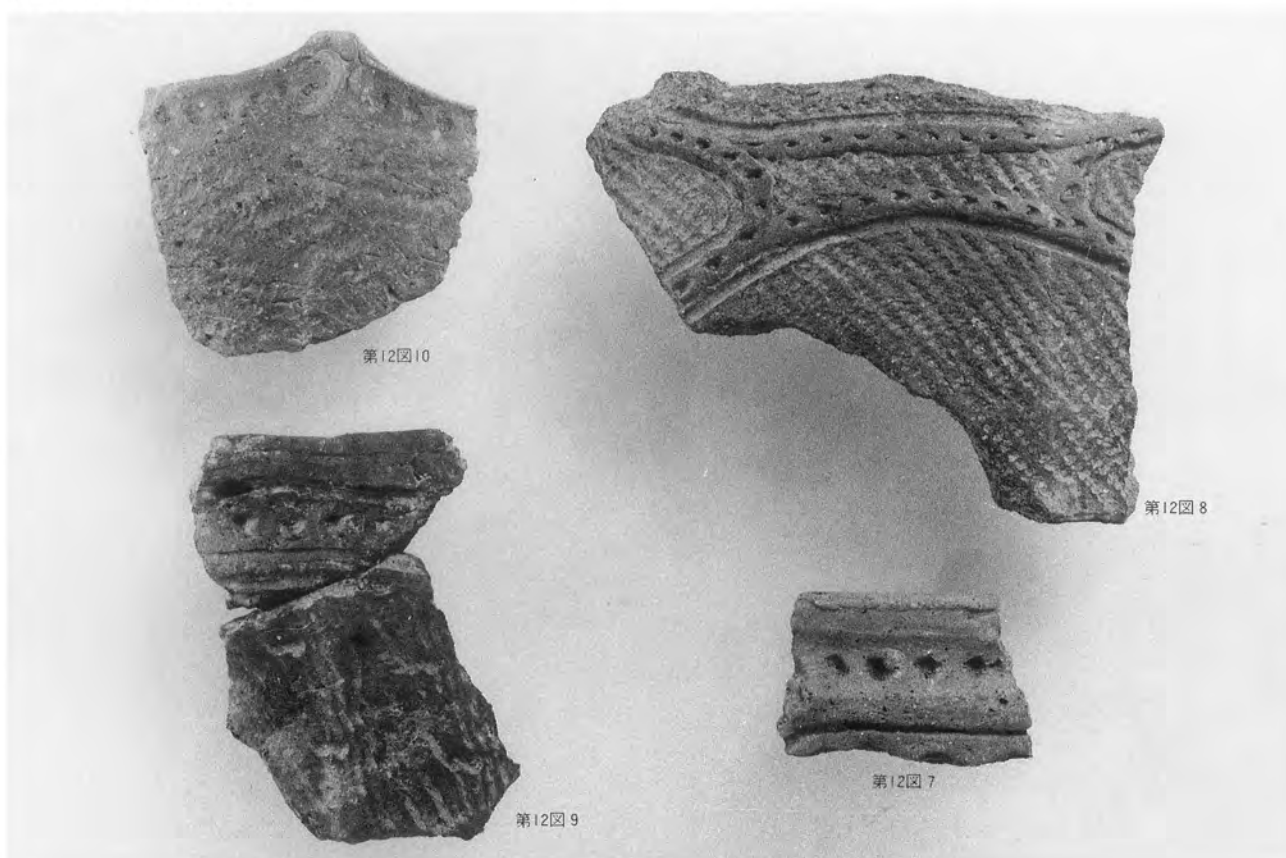
第12図 4

第12図 3

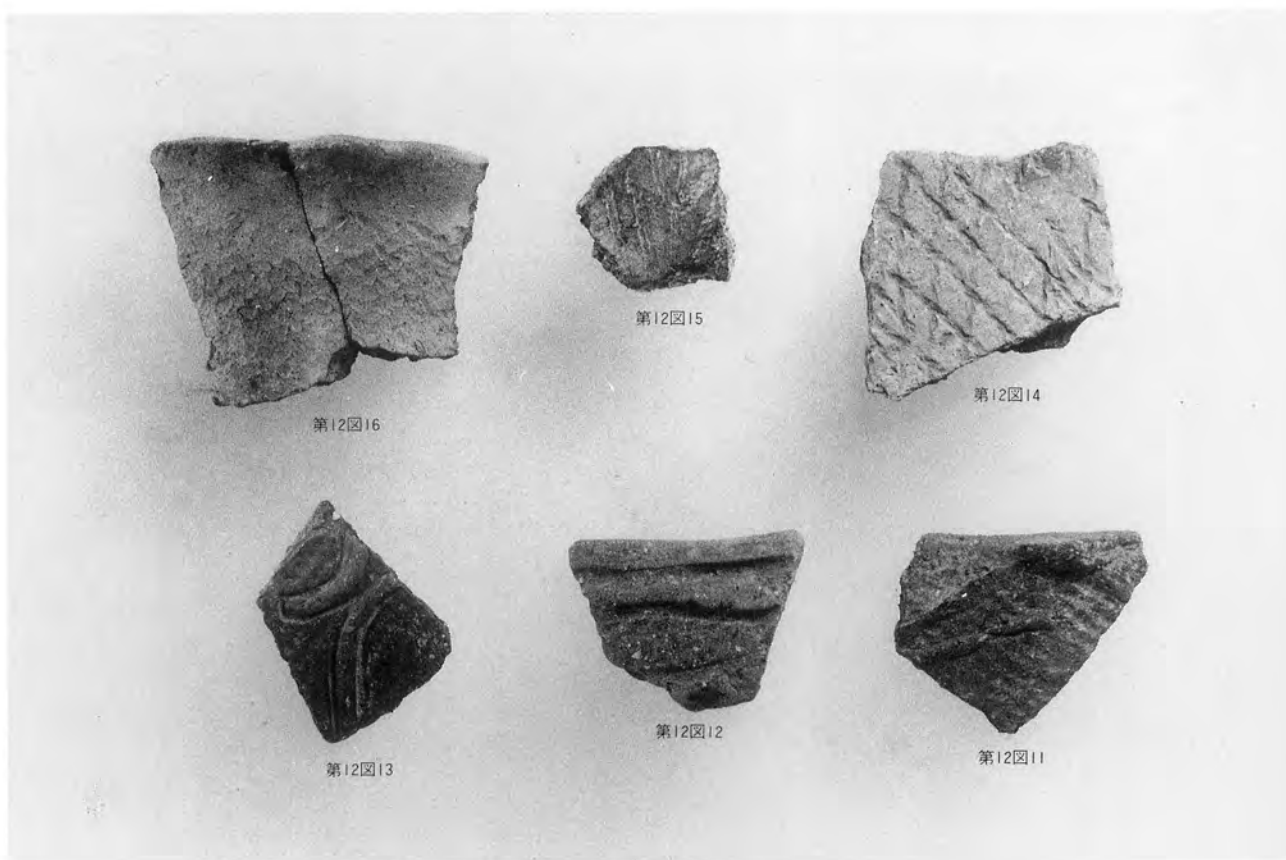
第12図 2

同上

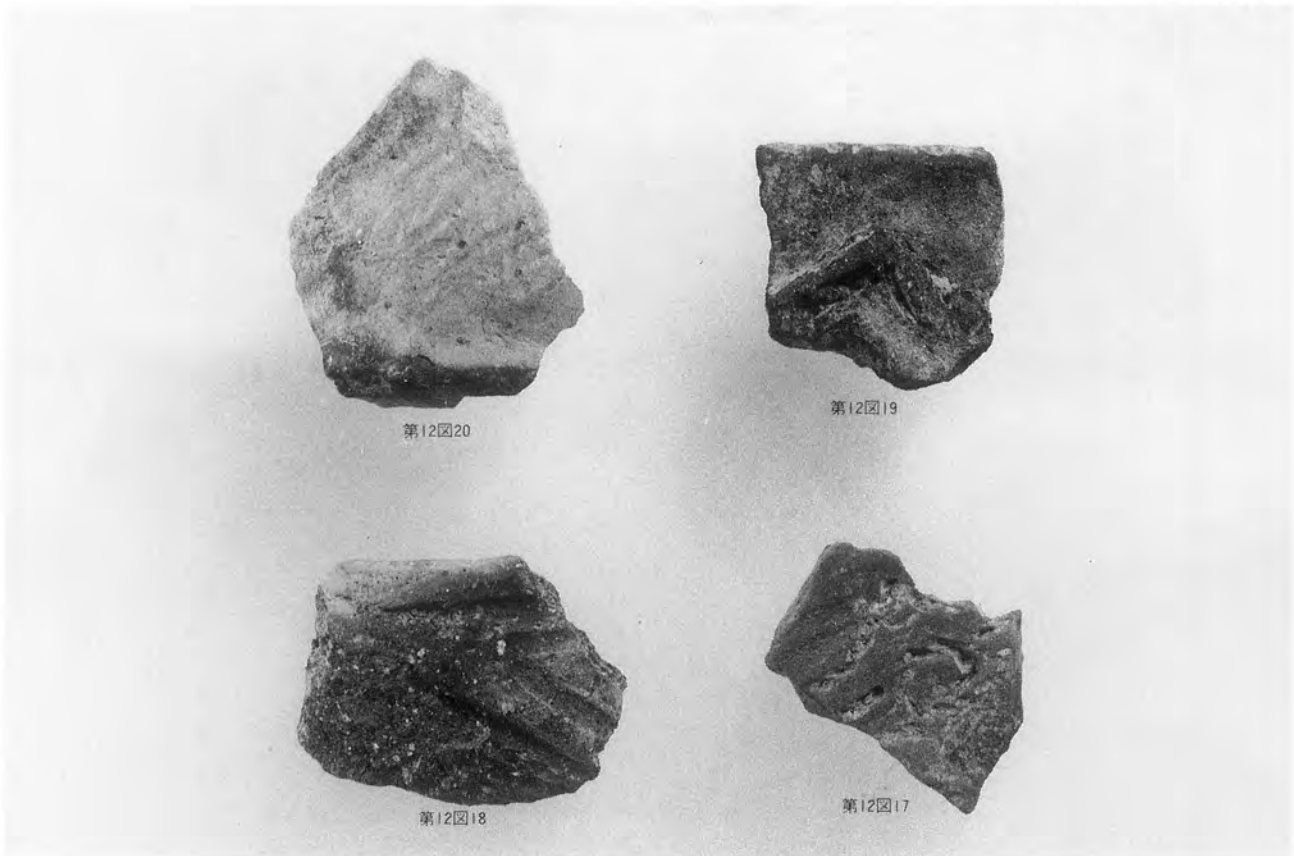
第12図版



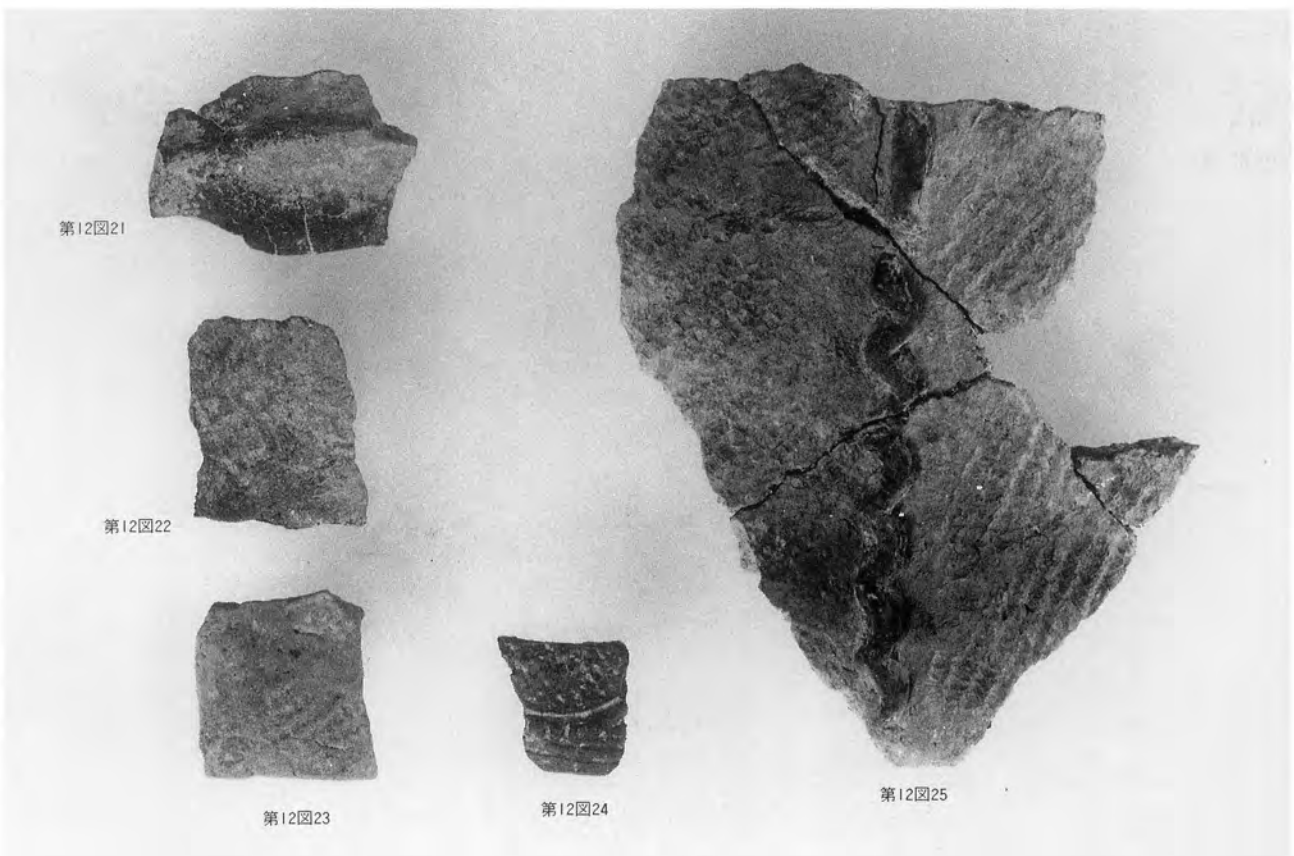
第1号竖穴住居跡出土土器（床面）



同上

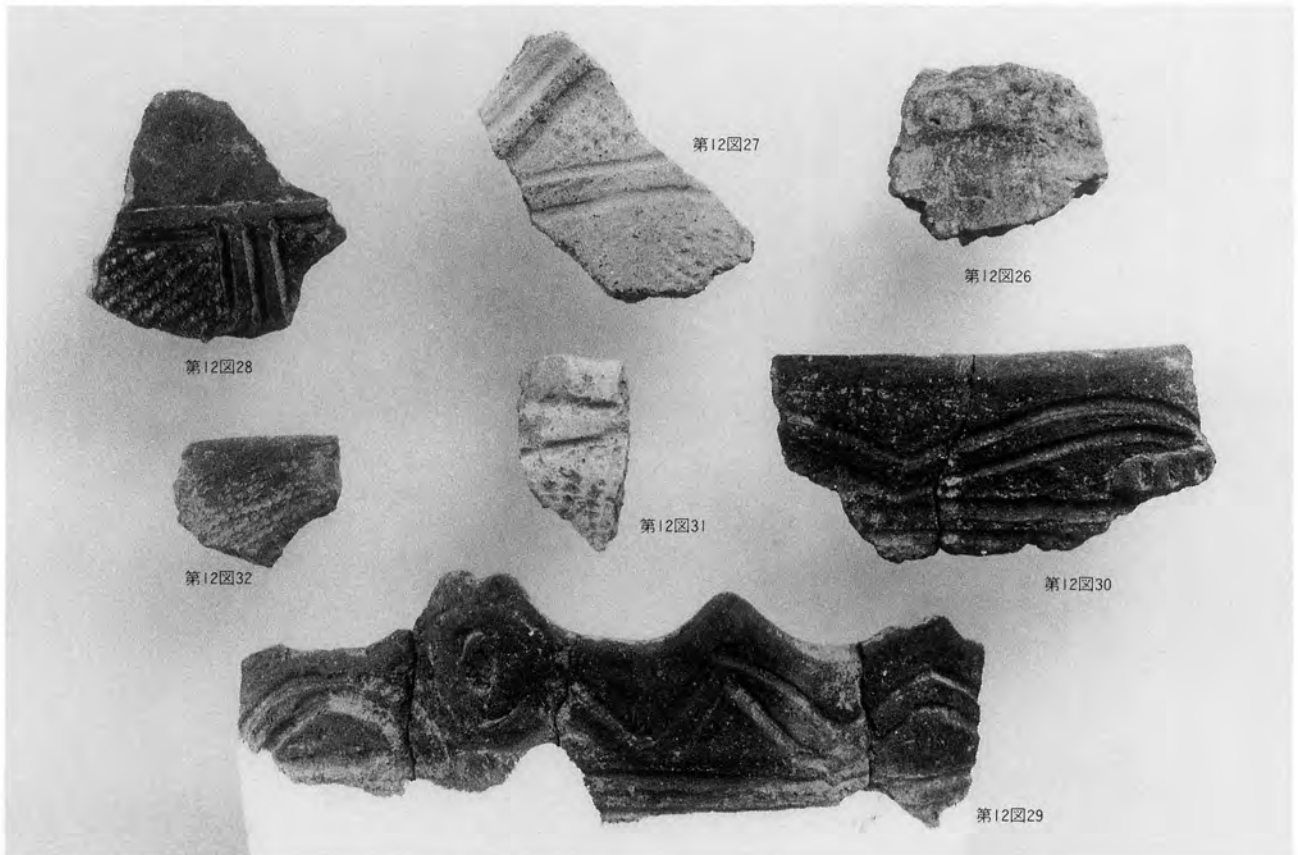


第1号竖穴住居跡出土土器（床面）

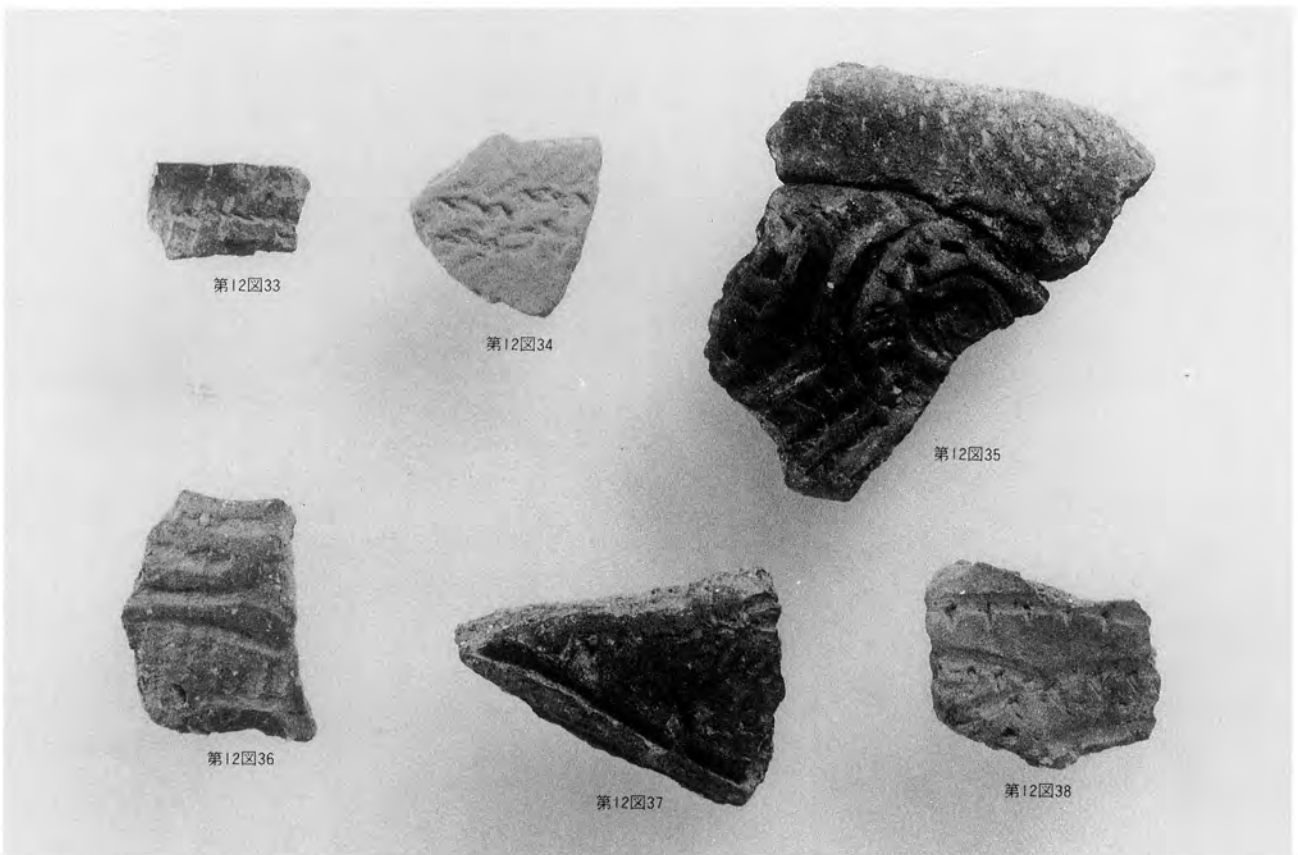


同上

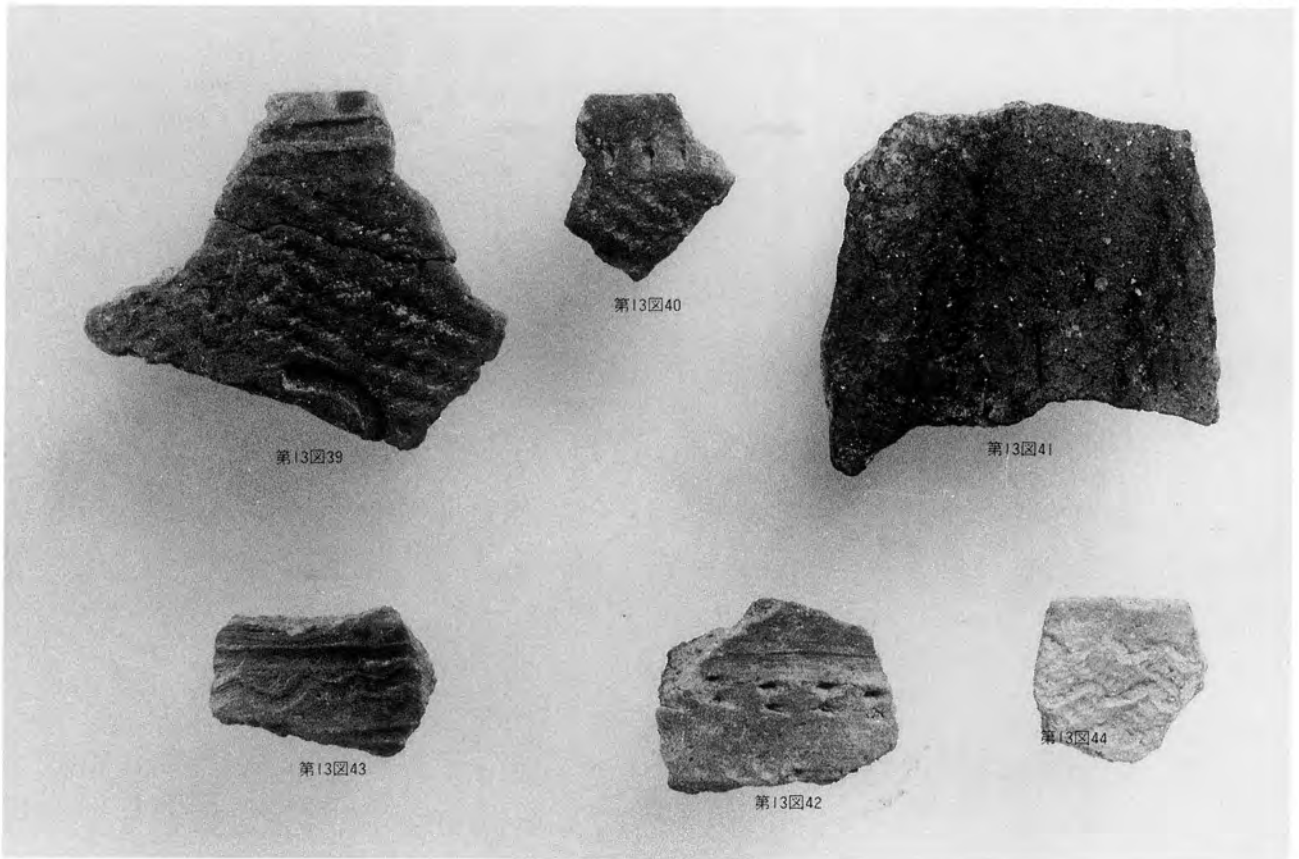
第14図版



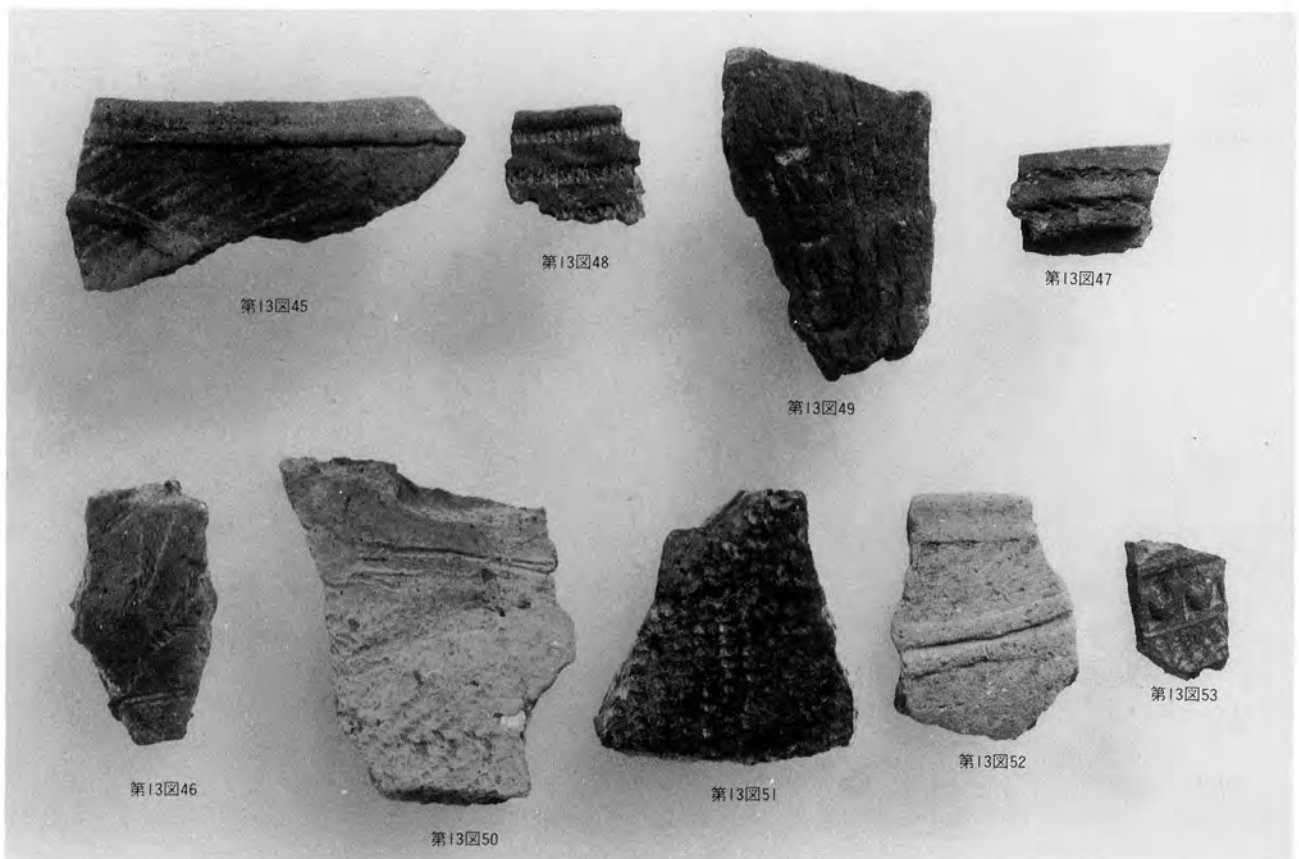
第1号竖穴住居跡出土土器（床面）



同上

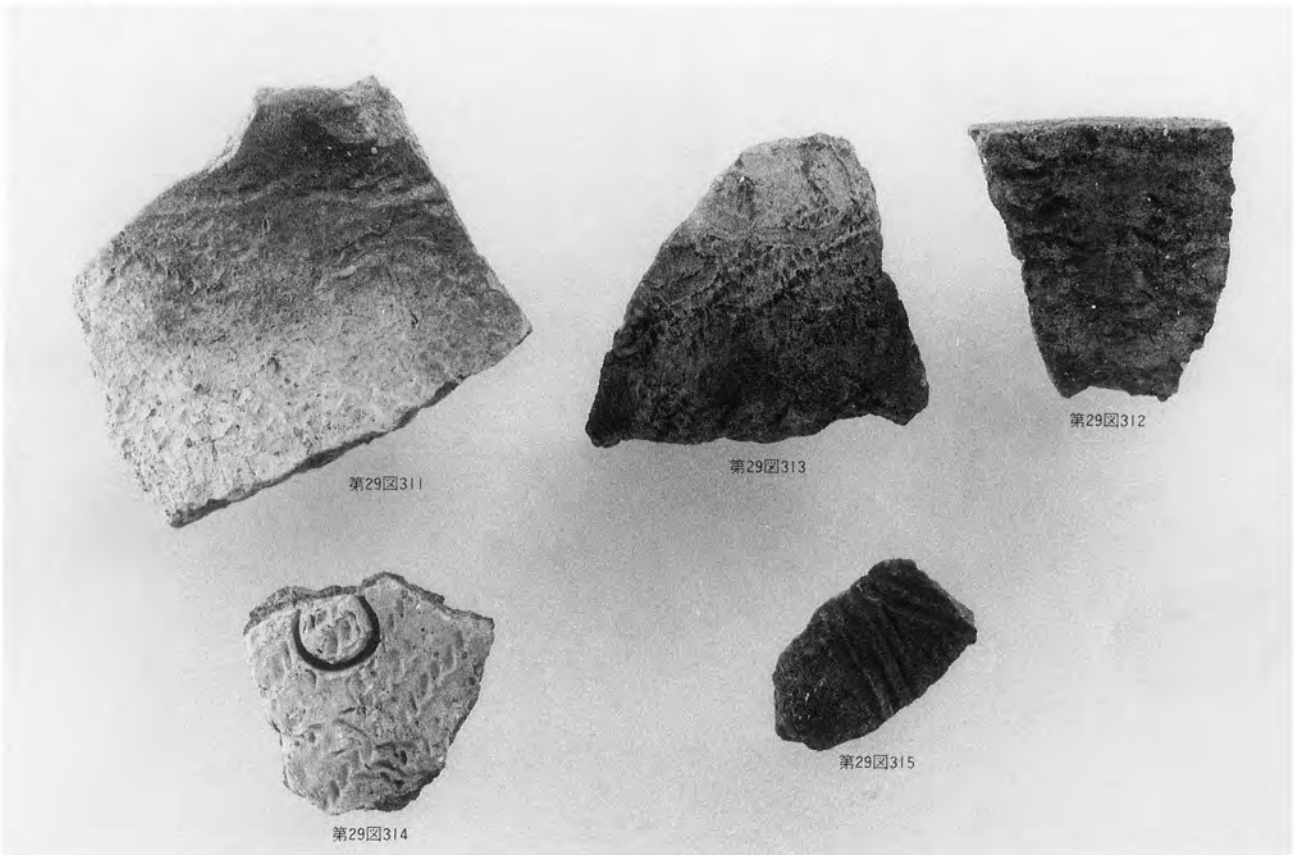


第1号竖穴住居跡出土土器（床面）

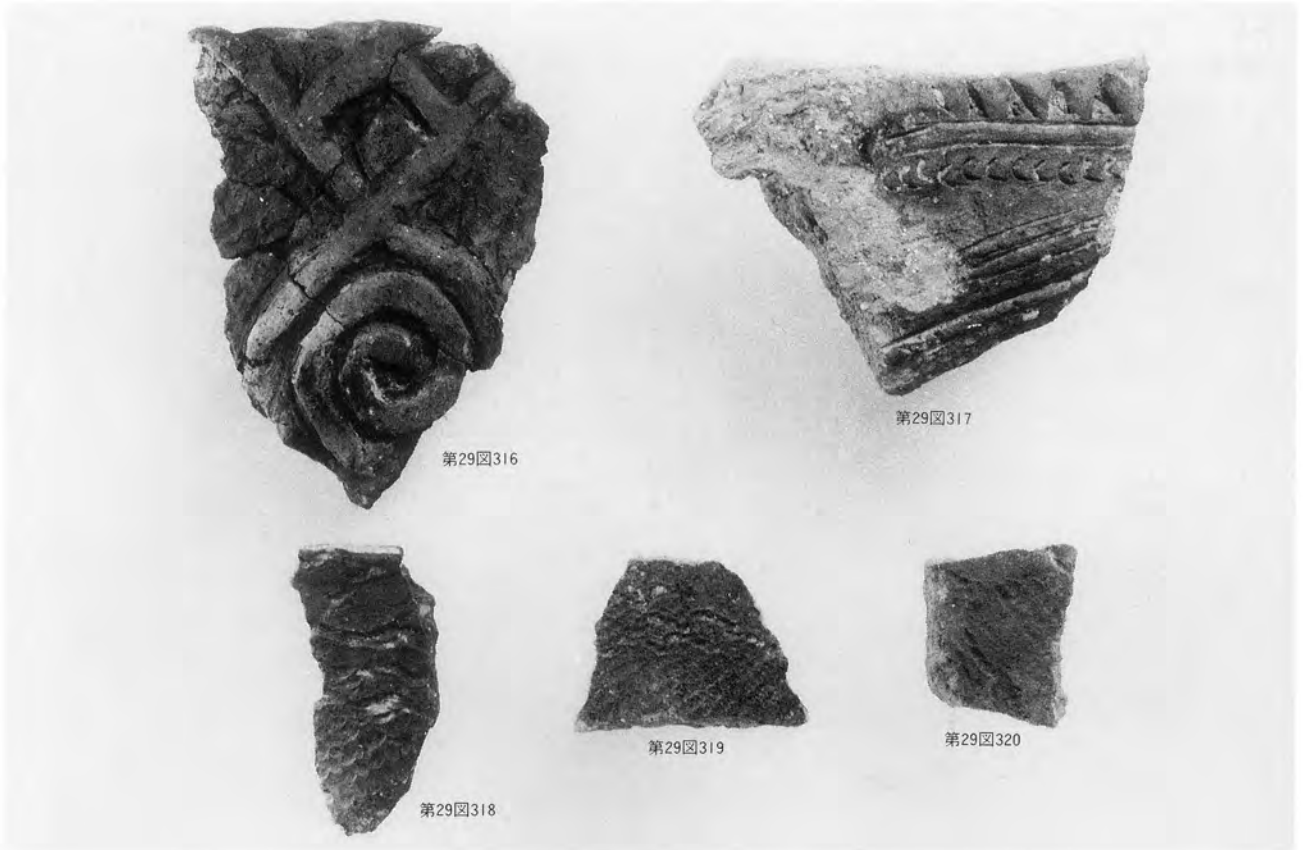


同上

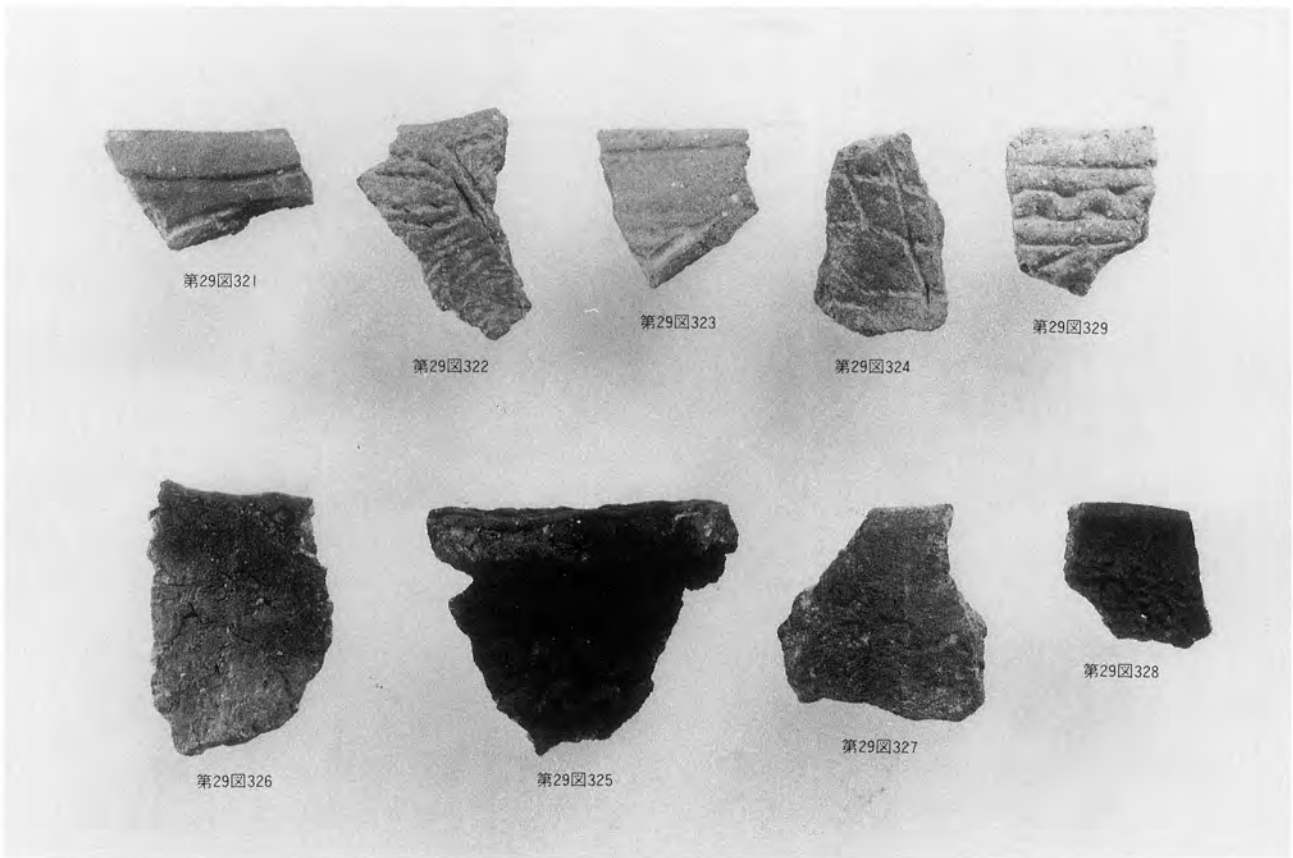
第16図版



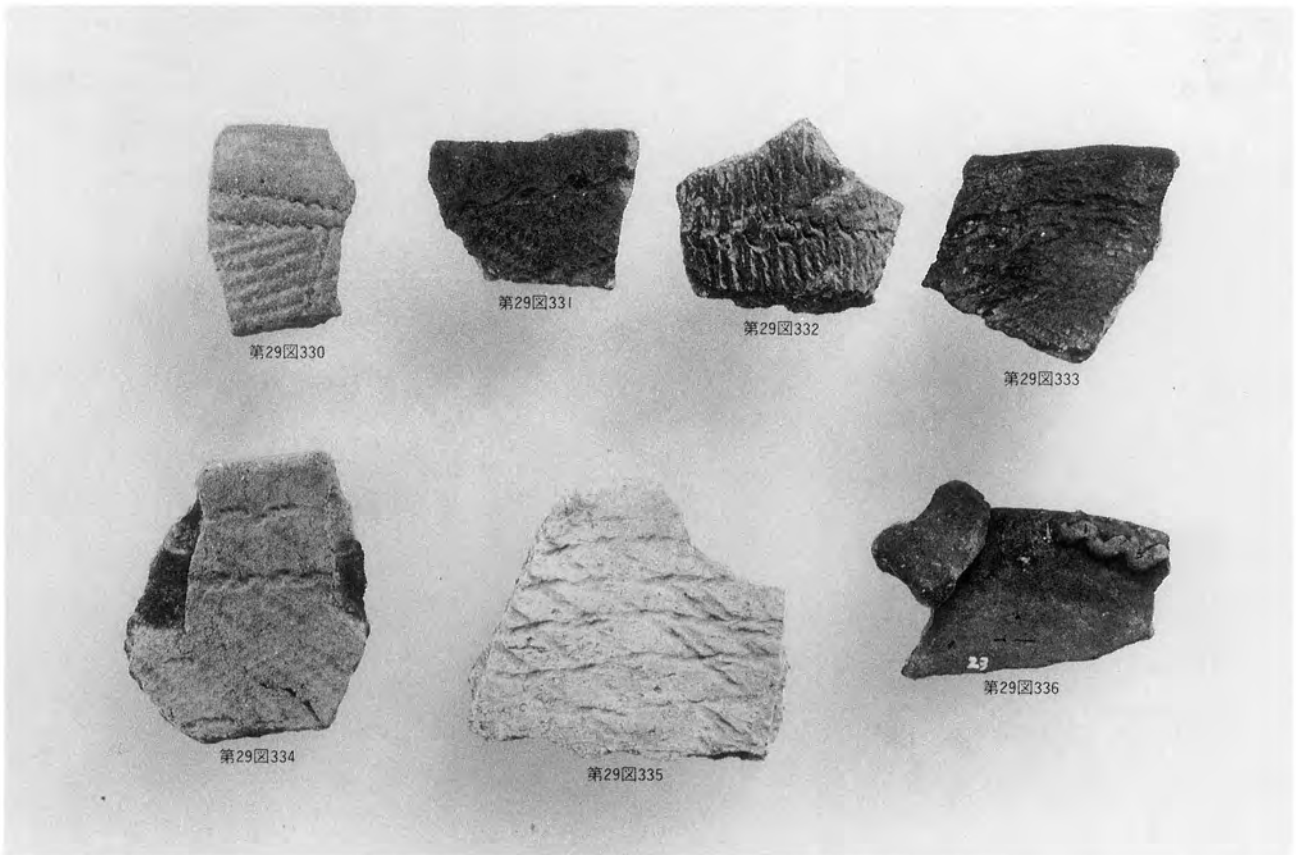
第2号竖穴住居跡出土土器



同上

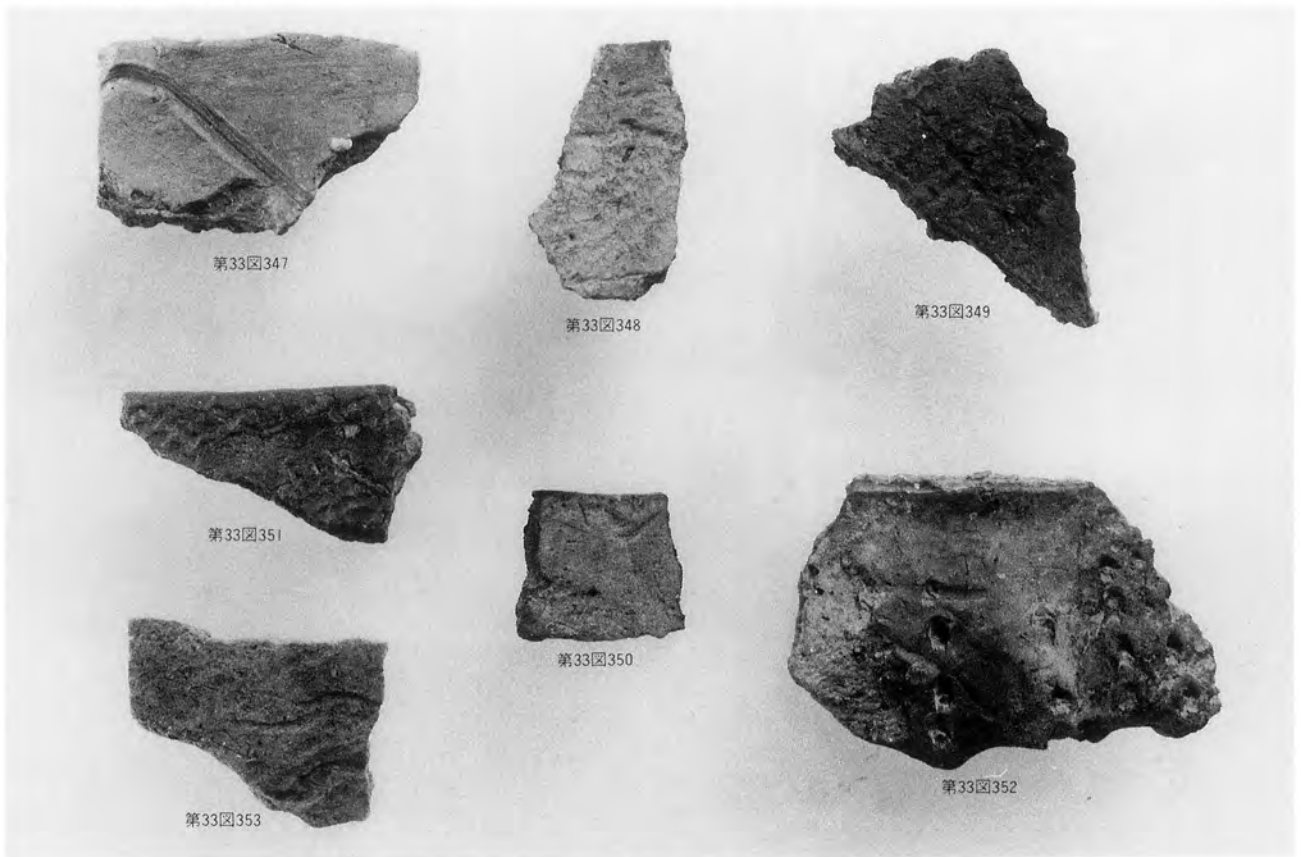


第2号竖穴住居跡出土土器

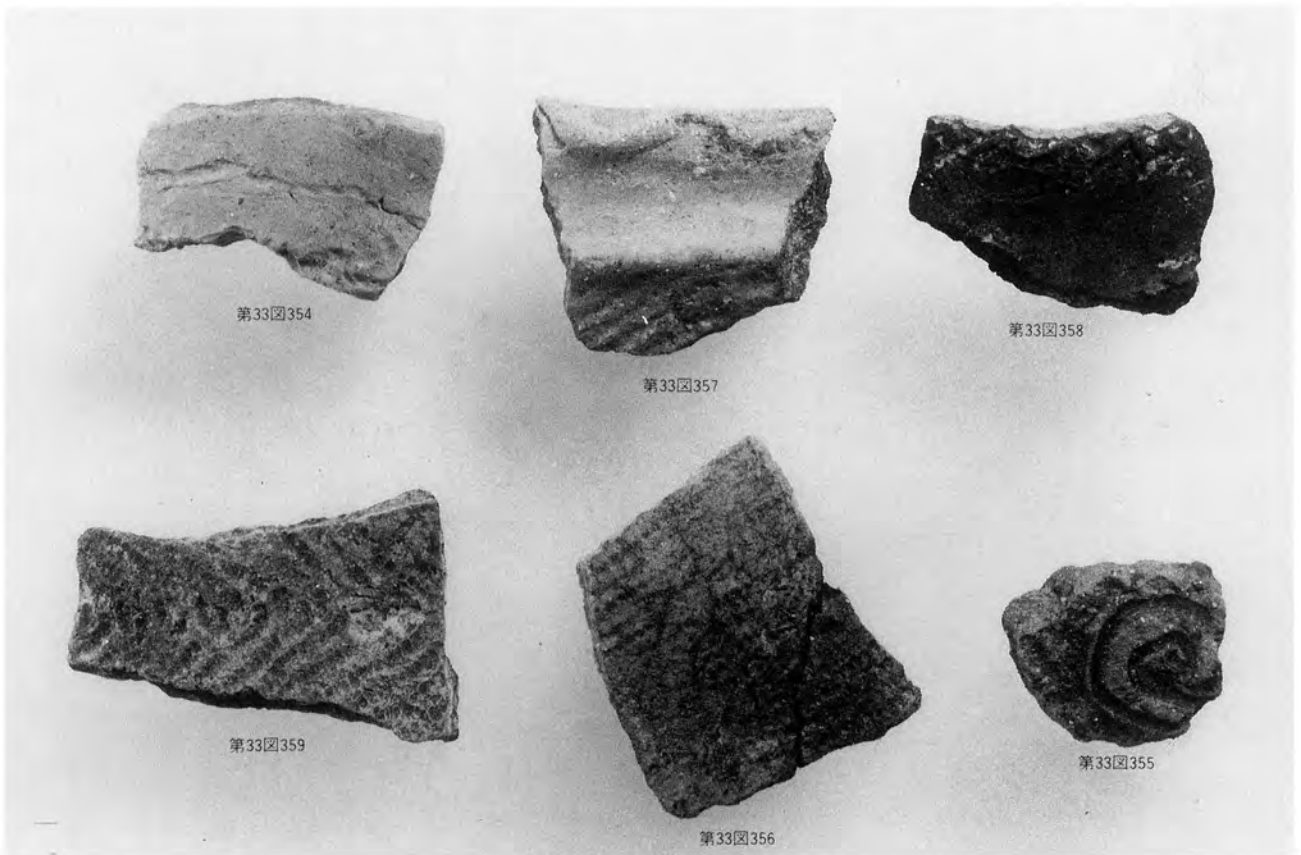


同上

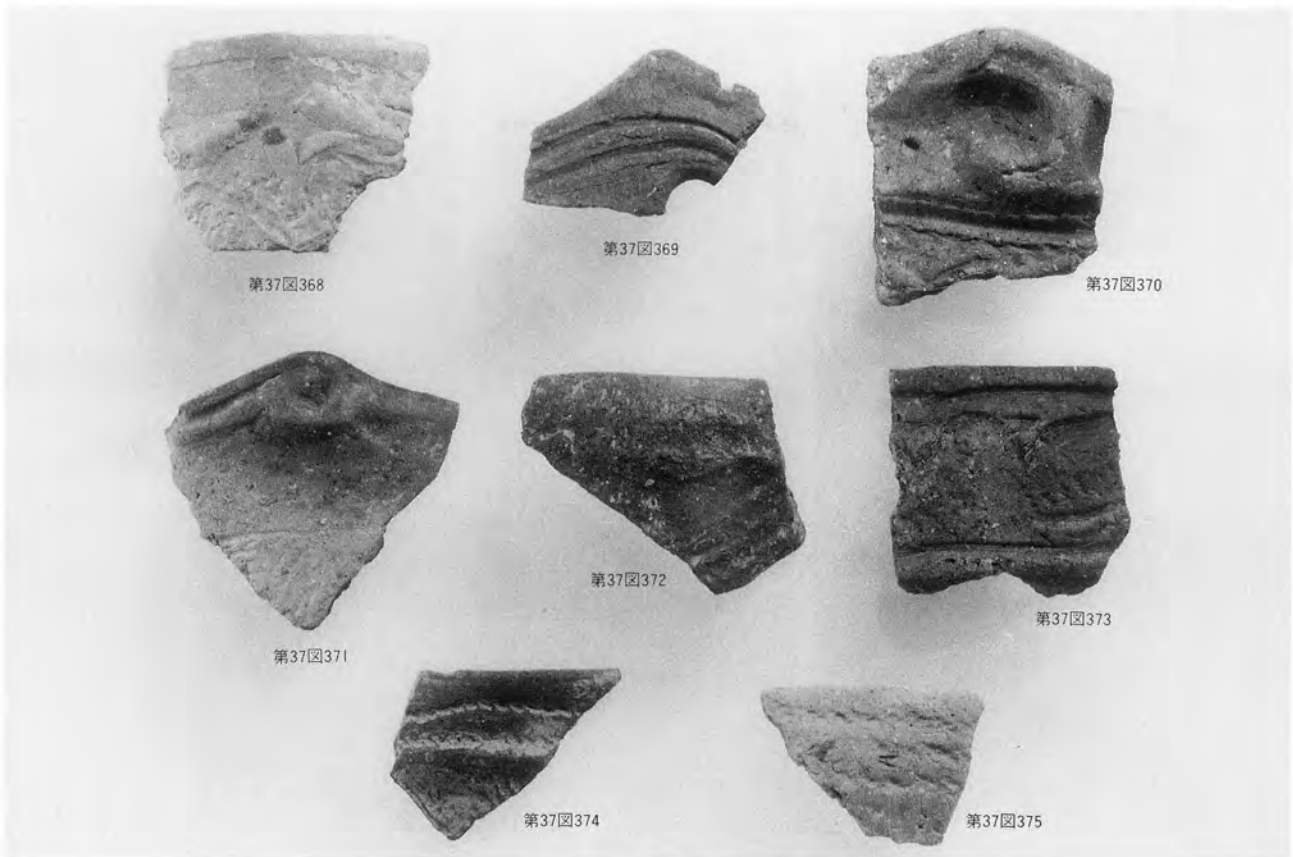
第18図版



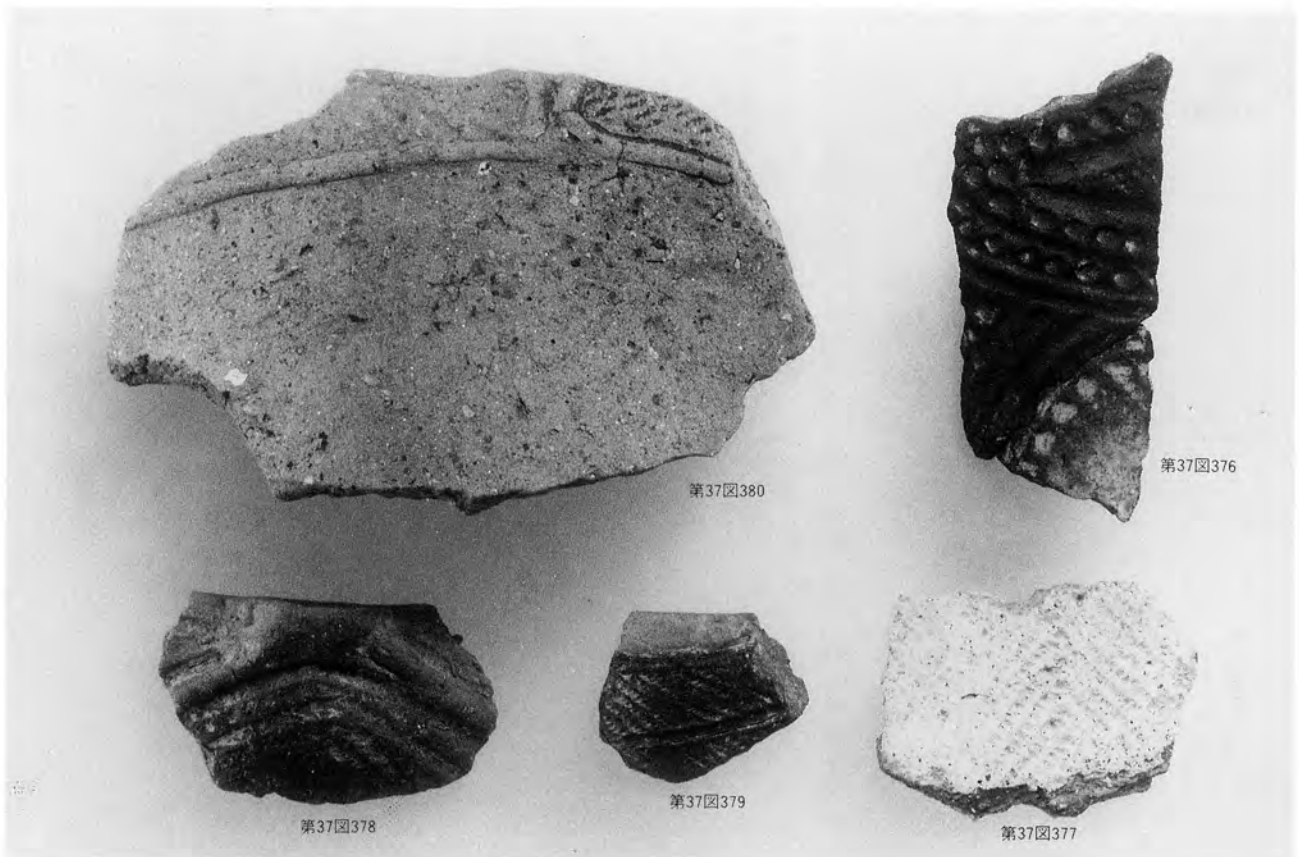
第2号豎穴住居跡及び第1号～3号豎穴跡出土土器



同上

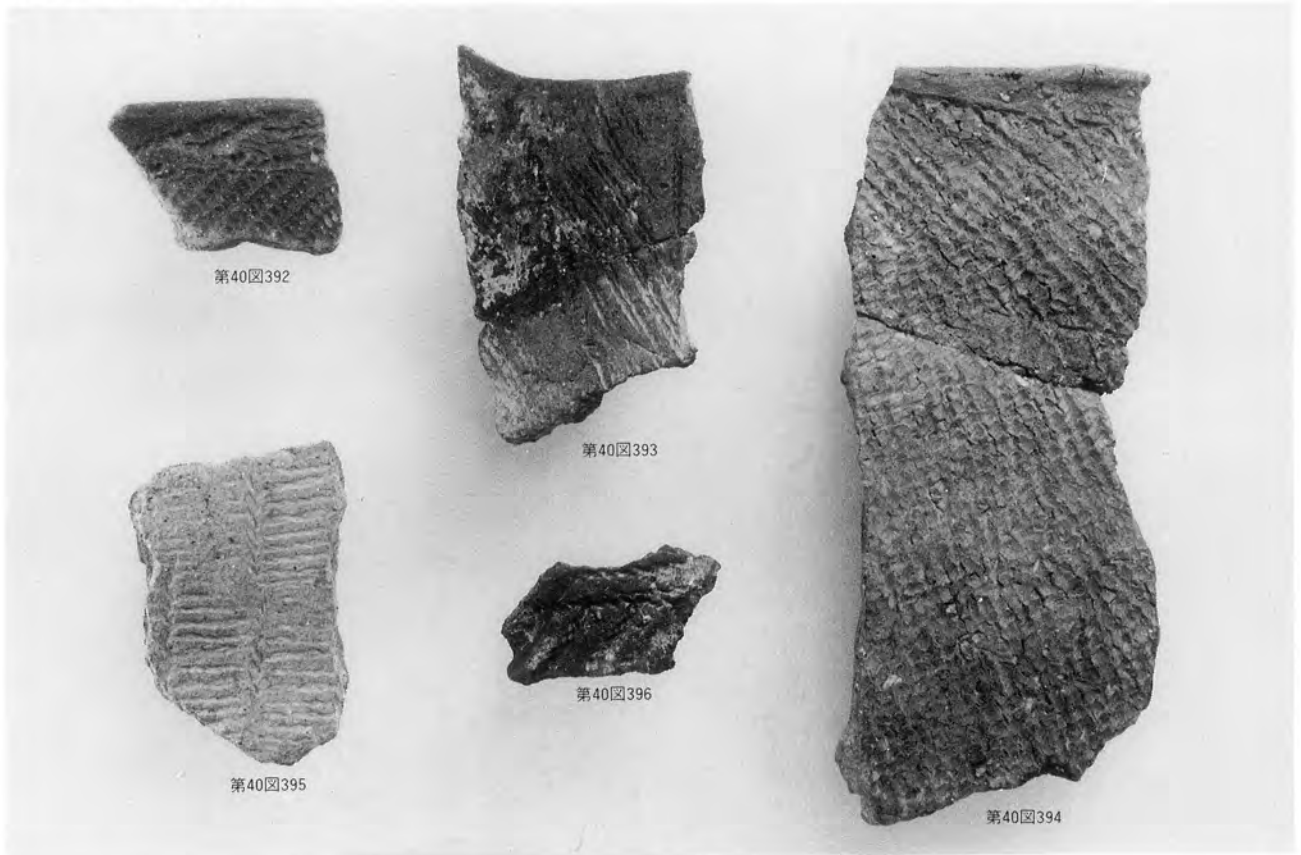


第2号土坛跡出土土器

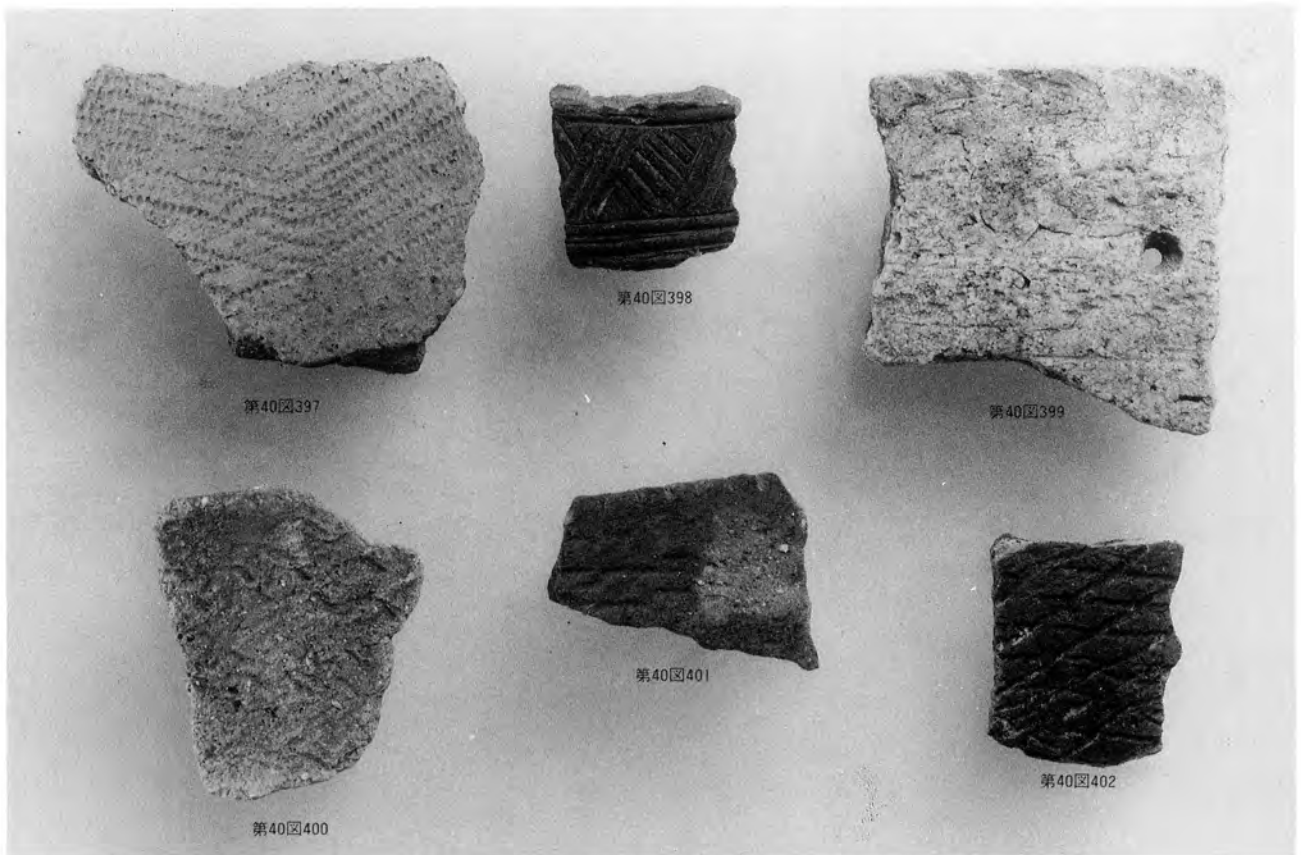


同上

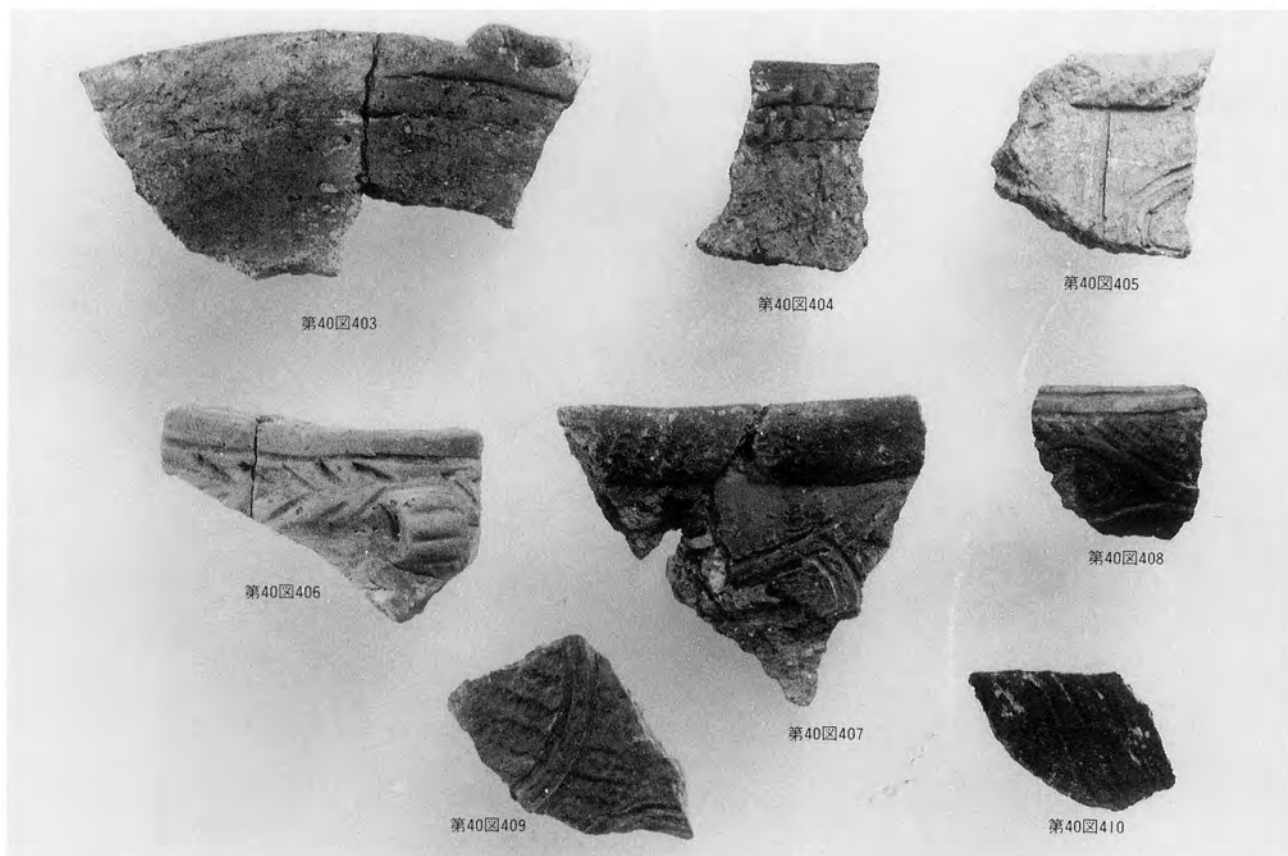
第20図版



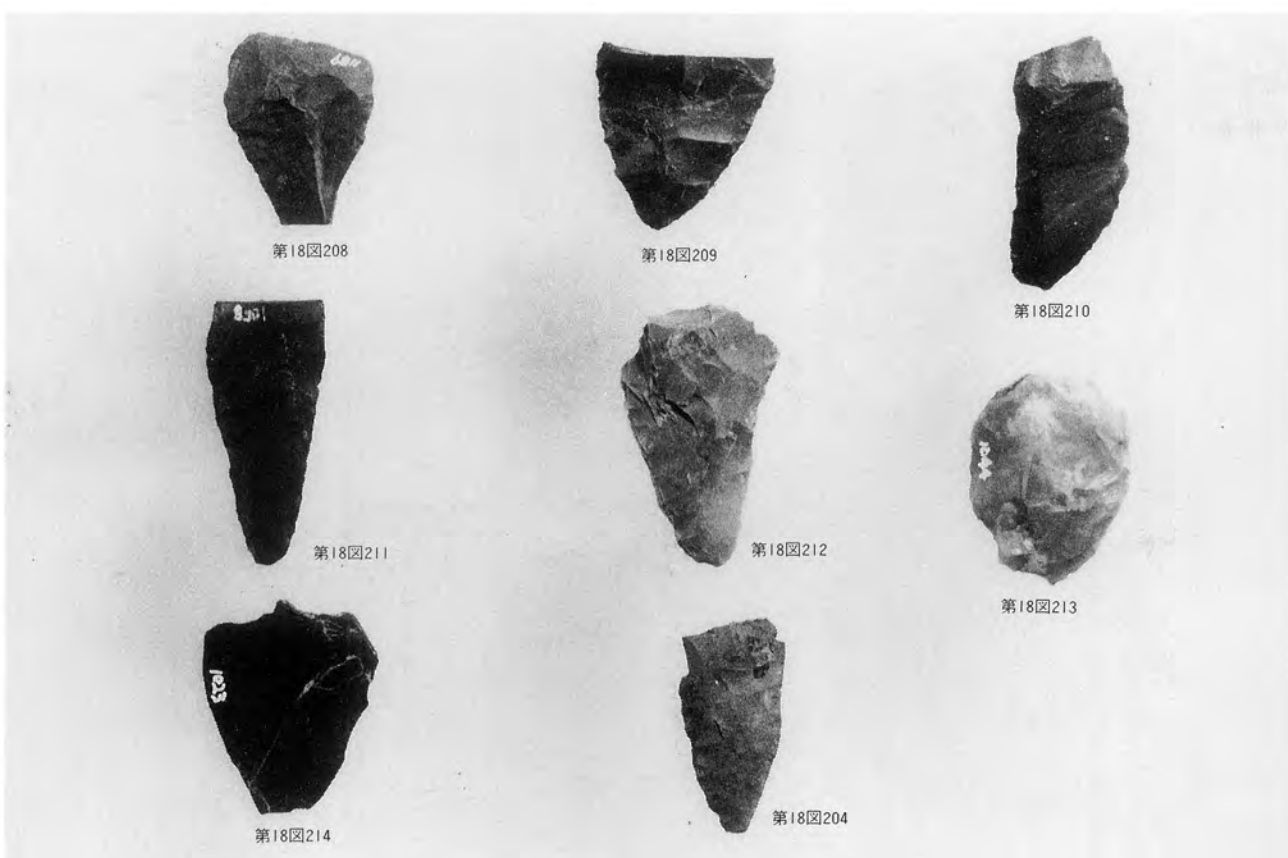
第4号土坛跡出土土器



同上

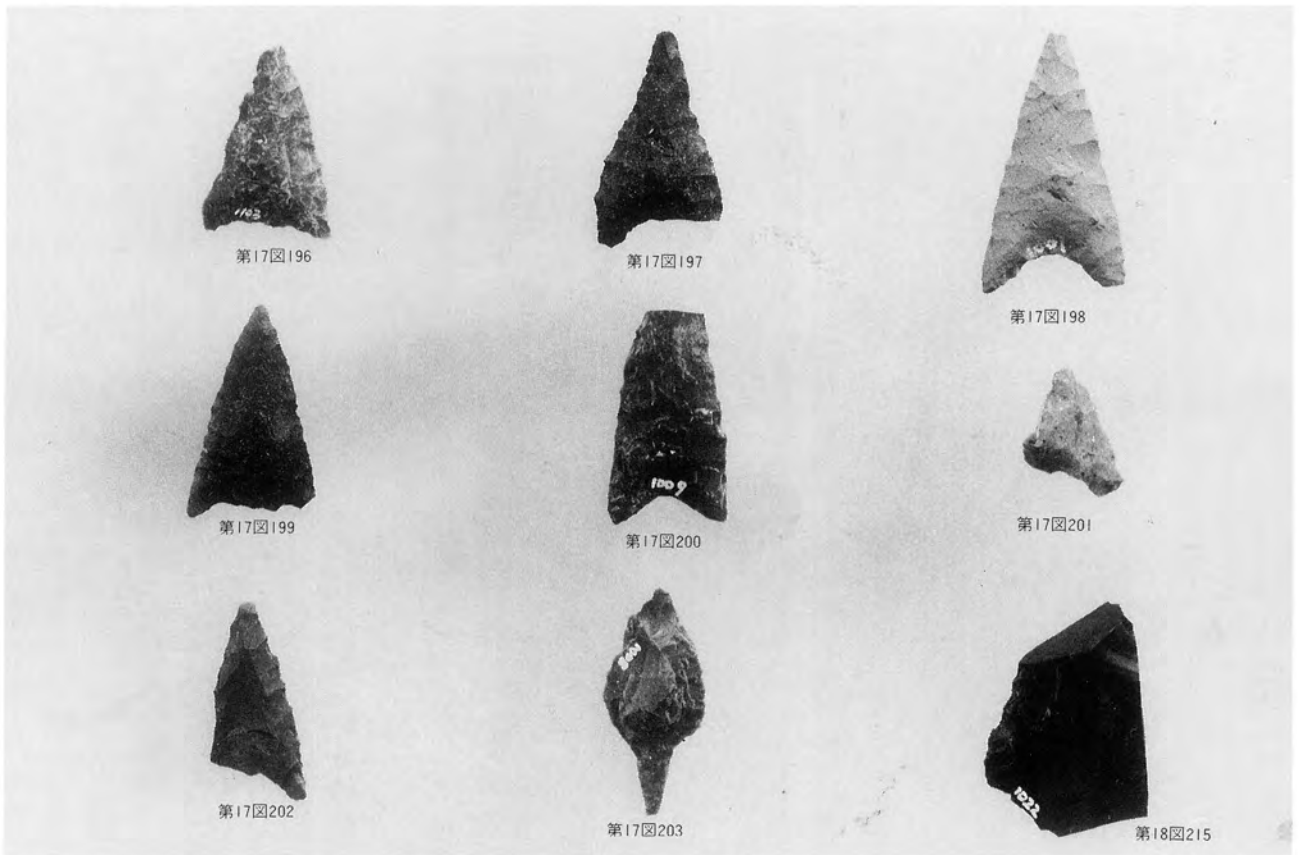


第4号土坑跡出土土器

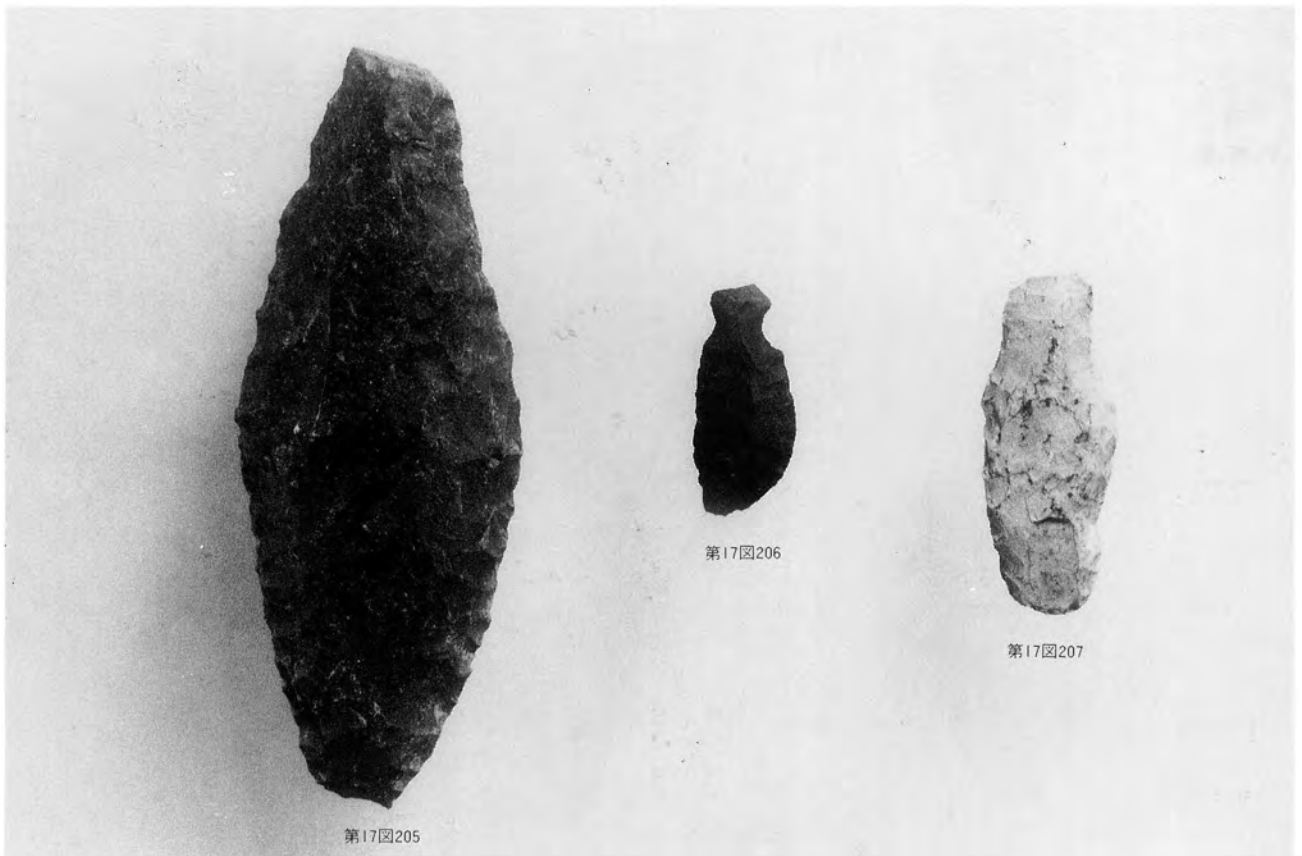


第1号竖穴住居跡出土石器（床面）

第22図版

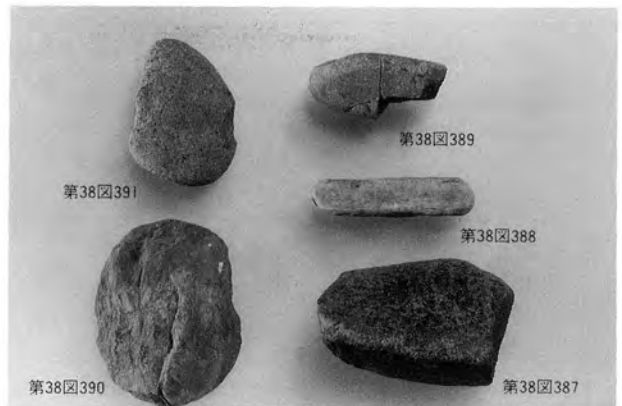
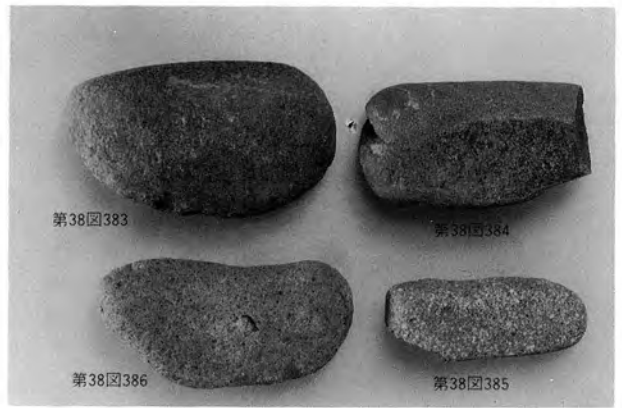


第1号竖穴住居跡出土石器（床面）



同上

第23図版



出土石器及び石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	けばらいちいせき							
書名	花原市遺跡							
副書名	平成4年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	46							
編著者名	鎌田祐二、							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027 岩手県宮古市新川町2-1 TEL0193-62-2111							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
花原市	岩手県宮古市 花原市第2地割 字草鞍前	03202	LG32 -1082	39°36'58"	141°52'37"	19920901 ~19921029	100	集会施設 林業者セ ンター建 設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
花原市	集落	縄文 前期末	竪穴住居跡 3 竪穴跡 3	縄文中期 土器 石器 など				
		中期	土 塚跡 4					
		中世	掘立柱建物1など	陶磁器(青磁片) 1 銭(至同通寶) 1	掘立柱穴跡からの出土 遺物はないが、周辺の 出土遺物より中世の建 物跡と判断した。			

宮古市埋蔵文化財調査報告書46

花原市遺跡

—平成4年度発掘調査報告書—

1995.3

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027 岩手県宮古市新川町2番1号
TEL 0193 (62) 2111

印刷 花坂印刷工業株式会社
〒027 岩手県宮古市新川町1番2号
TEL 0193 (62) 3125(代)

